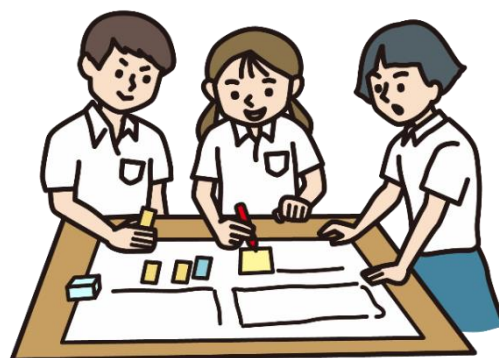
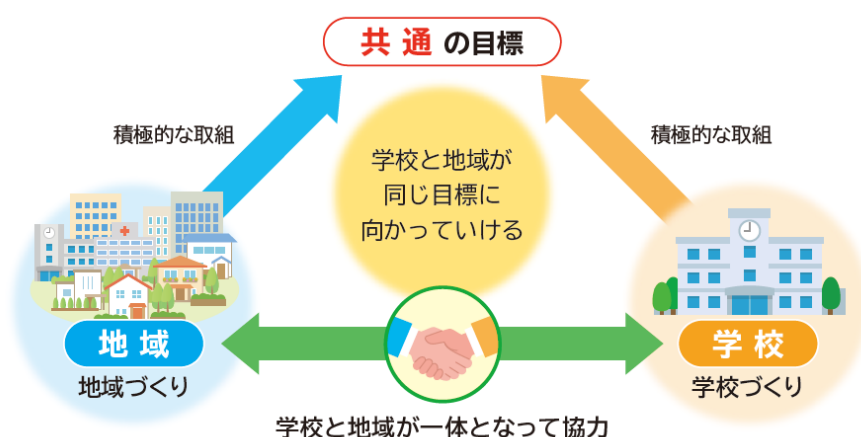


地域創生に向けた高校魅力化の手引 ～高校と地域の連携・協働を進めるために～

取組事例集



令和4年（2022年）3月

北海道教育庁学校教育局高校教育課

<目 次>

はじめに	1
取組事例集の掲載概要	2
地学協働活動とは？	2
(取組事例1) 地域創生に向けた高校魅力化に関連する事業	3
【1-1】北海道CLASSプロジェクト（地学協働活動推進実証事業）：R3～R5	3
【1-2】マイスター・ハイスクール事業（次世代地域産業人材育成刷新事業）：R3～	6
【1-3】北海道高等学校遠隔授業ネットワーク構想：R3～R5	9
(取組事例2) コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）	11
【2-1】道立高校におけるコミュニティ・スクールの導入状況（令和4年4月1日（予定））	11
【2-2】コミュニティ・スクール実践事例集（北海道教育委員会、令和3年3月発行）	11
【2-3】コミュニティ・スクールの具体的な取組①（栗山高校の例）	14
【2-4】コミュニティ・スクールの具体的な取組②（松前高校の例）	14
【2-5】コミュニティ・スクールの具体的な取組③（興部高校の例）	15
【2-6】コミュニティ・スクールの具体的な取組④（別海高校の例）	15
【2-7】コミュニティ・スクールの具体的な取組⑤（登別青嶺高校の例）	16
【2-8】コミュニティ・スクールの具体的な取組⑥（平取高校の例）	17
【2-9】コミュニティ・スクールの具体的な取組⑦（美瑛高校の例）	18
【2-10】コミュニティ・スクールの具体的な取組⑧（清里高校の例）	19
(取組事例3) コンソーシアム（連携組織）	20
【3-1】コンソーシアムの具体的な取組①（訓子府高校の例）	20
【3-2】コンソーシアムの具体的な取組②（上富良野高校の例）	20
【3-3】コンソーシアムの具体的な取組③（白老東高校の例）	21
【3-4】コンソーシアムの具体的な取組④（帯広三条高校の例）	22
【3-5】コンソーシアムの具体的な取組⑤（夕張高校の例）	23
【3-6】コンソーシアムの具体的な取組⑥（豊富高校の例）	24
【3-7】コンソーシアムの具体的な取組⑦（静内農業高校の例）	25
【3-8】コンソーシアムの具体的な取組⑧（余市紅志高校の例）	26
【3-9】コンソーシアムの具体的な取組⑨（利尻高校の例）	27
【3-10】コンソーシアムの具体的な取組⑩（湧別高校の例）	28
(取組事例4) 地域コーディネーター	29
【4-1】地域コーディネーターの具体的な取組①（当別高校の例）	29
【4-2】地域コーディネーターの具体的な取組②（下川商業高校の例）	29
(取組事例5) 中学校と高校が連携した教育活動	30
【5-1】中学校と高校が連携した教育活動（浜頓別高校の例）	30
(取組事例6) 地域課題探究型の学習活動	30
【6-1】高大連携事業による地域の魅力創造の取組（天塩高校の例）	30
【6-2】高校生が主体となった地域の魅力発信の取組（苫前商業高校の例）	31
【6-3】見学旅行との関連を図った総合的な探究の時間の取組（芽室高校の例）	31
【6-4】単元「南幌学」（南幌高校の例）	32

【6-5】	学校設定科目「地域研究」(札幌あすかぜ高校の例)	33
【6-6】	総合的な探究の時間「OH My Project」(長万部高校の例)	34
【6-7】	学校設定科目「函館学」地域探究学習(市立函館高校の例)	35
【6-8】	学校設定科目「稚内学」(稚内高校の例)	36
【6-9】	学校設定科目「弟子屈探究」(弟子屈高校の例)	37
【6-10】	地域を担う人材の育成(留萌教育局の例)	38
(取組事例7) 地域の企業等と連携したキャリア教育		39
【7-1】	デュアルシステム(十勝教育局の例)	39
【7-2】	地域人材を活用したキャリア教育(野幌高校の例)	40
(取組事例8) 地域の人材等の活用や異年齢集団での活動		40
【8-1】	地域人材を活用した教育活動(南幌高校の例)	40
【8-2】	学校設定科目の学習の成果を地域へ還元する取組(江差高校の例)	41
【8-3】	地域と連携したボランティア活動の取組(稚内高校定時制の例)	41
(取組事例9) 地域の特性や学びの場の確保		42
【9-1】	学校設定科目「地域と自然」(蘭越高校の例)	42
【9-2】	商業科目「総合実践」(小樽未来創造高校の例)	43
【9-3】	学校設定科目「日高地域研究」(静内高校の例)	44
【9-4】	学校設定科目「高山植物」(礼文高校の例)	45
【9-5】	学校設定科目「知床学」(羅臼高校の例)	46
【9-6】	学校設定科目「北海道の自然」(訓子府高校の例)	47
【9-7】	地域の博物館等の教育施設の活用(野幌高校の例)	47
(取組事例10) 道外からの地域留学の受入れ		48
【10-1】	道外からの地域留学の受入れ(斜里高校の例)	48
(取組事例11) 北海道高等学校遠隔授業配信センター		50
(参考)「地域創生に向けた高校魅力化の手引」における「参考資料」掲載一覧		54

はじめに

北海道教育委員会では、令和2年12月、「地域創生に向けた高校魅力化の手引～高校と地域の連携・協働を進めるために～」(以下「手引」という。)を作成するなど、地域と連携・協働し、生徒から選ばれる魅力ある高校づくりを推進しています。

手引による主な取組期間は、令和2年度から令和4年度までの3か年としていますが、各高校等における魅力化の取組をさらに推進するため、この度、全道の公立高校等における特色ある取組をまとめた事例集(以下「取組事例集」という。)を作成しました。取組事例集の作成に当たっては、連携・協働するためには、組織的・継続的な仕組みを構築することが重要であることから、コミュニティ・スクールやコンソーシアム(連携組織)の具体的な取組など、推進体制の構築に係る事例を多く掲載しました。

各高校等において、取組事例集が積極的に活用され、地域創生に向けた高校魅力化の取組が一層充実することを期待しています。

なお、手引の巻末(参照：手引 pp.25-91)には「参考資料」として、高校魅力化に向けた特色ある取組を掲載していますので、併せて参考願います(取組事例集 pp.54-55 参照)。また、事例に関連する手引の該当ページについては、「参照：手引 p.○」のような形で記載しています。

○手引の掲載アドレス：<https://www.dokyoj.pref.hokkaido.lg.jp/hk/kki/akd/koukoumiryokukanotebiki.html>

(参考) 手引推進の流れ

1年目 (令和2年度)	本手引の周知期間として位置付けるとともに、各高校等において、高校の魅力化の取組の方向性を検討し、取組が可能なものから実施します。また、次年度からの本格実施に向け、校内体制等を整備し、具体的な計画を立案する期間とします。
2年目 (令和3年度)	全ての高校等で魅力化に取り組みます。年度末には、各学校における取組の改善・充実のため、北海道教育委員会において、取組状況の把握を行うとともに、 魅力化のさらなる推進のため、実践事例を集約した資料を作成し配布 します。
3年目 (令和4年度)	前年度までの取組を検証するとともに、さらに取組の充実が求められる高校等に対し、関係教育局による学校訪問等を通して、改善に向けた指導助言・支援を行います。

(参考) 情報誌「北海道創生ジャーナル『創る』」

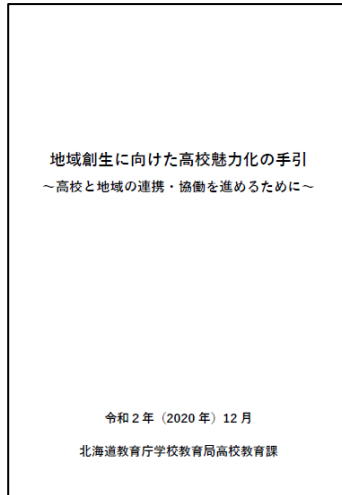
北海道総合政策部地域創生局地域戦略課では、道内で進展する地方創生の取組を広く道民の方々と共有するための情報誌「北海道創生ジャーナル『創る』」を発行しています。

令和3年7月に発行された第16号では、特集「地域×高校 地域創生と高校の魅力化」が掲載され、手引の概要や地域を学びの場とした取組、地域学や地域留学の取組が掲載されていますので、併せて参考願います。

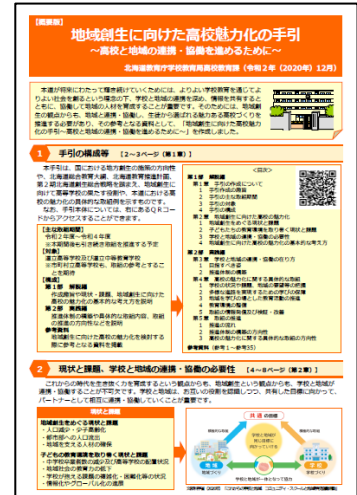
<掲載アドレス>

https://www.pref.hokkaido.lg.jp/fs/4/1/9/7/7/5/1/_tukuru16-1of2.pdf

<手引(本体)>



<手引(概要版)>



取組事例集の掲載概要

取組事例集に掲載した事例の概要は次のとおりです。

取組事例名	掲載概要	ページ番号
地域創生に向けた高校魅力化に関連する事業	<ul style="list-style-type: none"> ● 北海道CLASSプロジェクト【当別、白老東、上富良野、帯広三条】 ● マイスター・ハイスクール事業【静内農業、厚岸翔洋】 ● 北海道高等学校遠隔授業ネットワーク構想 	pp.3-5 pp.6-8 pp.9-10
コミュニティ・スクール(学校運営協議会制度)	<ul style="list-style-type: none"> ● 道立高校におけるコミュニティ・スクールの導入状況 ● コミュニティ・スクール実践事例集【大樹】 ● コミュニティ・スクールの具体的な取組【栗山、松前、興部、別海、登別青嶺、平取、美瑛、清里】 	p.11 pp.11-13 pp.14-19
コンソーシアム(連携組織)	<ul style="list-style-type: none"> ● コンソーシアムの具体的な取組【訓子府、上富良野、白老東、帯広三条、夕張、豊富、静内農業、余市紅志、利尻、湧別】 	pp.20-28
地域コーディネーター	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域コーディネーターの具体的な取組【当別、下川商業】 	p.29
中学校と高校が連携した教育活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 中学校と高校が連携した教育活動【浜頓別】 	p.30
地域課題探究型の学習活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 高大連携事業による地域の魅力創造の取組【天塩】 ● 高校生が主体となった地域の魅力発信の取組【苫前商業】 ● 見学旅行との関連を図った総合的な探究の時間の取組【芽室】 ● 学校設定科目や総合的な探究の時間、単元による取組【南幌、札幌あすかぜ、長万部、市立函館、稚内、弟子屈、留萌教育局】 	p.30 p.31 p.31 pp.32-38
地域の企業等と連携したキャリア教育	<ul style="list-style-type: none"> ● デュアルシステム【十勝教育局】 ● 地域人材を活用したキャリア教育【野幌】 	p.39 p.40
地域の人材等の活用や異年齢集団での活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域人材を活用した教育活動【南幌】 ● 学校設定科目の学習の成果を地域へ還元する取組【江差】 ● 地域と連携したボランティア活動の取組【稚内(定時)】 	p.40 p.41 p.41
地域の特性や学びの場の確保	<ul style="list-style-type: none"> ● 商業科目や学校設定科目による取組【蘭越、小樽未来創造、静内、礼文、羅臼、訓子府、野幌】 	pp.42-47
道外からの地域留学の受入れ	<ul style="list-style-type: none"> ● 道外からの地域留学の受入れ【斜里】 	pp.48-49
遠隔授業の取組	<ul style="list-style-type: none"> ● 北海道高等学校遠隔授業配信センター 	pp.50-53

(注1) 掲載概要の欄の【○○】は、事例を掲載した高校名(○○高校)のことを示す。

(注2) ページ番号の欄の「pp.○～△」は、○～△ページのことを示す。

地学協働活動とは？

北海道教育委員会では、地域学校協働活動(参照:手引 p.40)を「地学協働」と称し、地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働する活動を積極的に展開し、地域と学校がWin-Winの関係を構築することを目指しています。

地学協働は、地域の高齢者、成人、学生、保護者、PTA、NPO、民間企業、団体・機関等の幅広い地域住民等の参画を得て、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えるとともに、「学校を核とした地域づくり」を目指して、地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働して行う様々な活動のことを指します。

子どもの成長を軸として、地域と学校がパートナーとして連携・協働し、意見を出し合い学ぶ中で、地域の将来を担う人材の育成を図るとともに、地域住民のつながりを深め、自立した地域社会の基盤の構築・活性化を図る「学校を核とした地域づくり」を推進することにより、地域創生につながっていくことが期待されます。

(取組例)

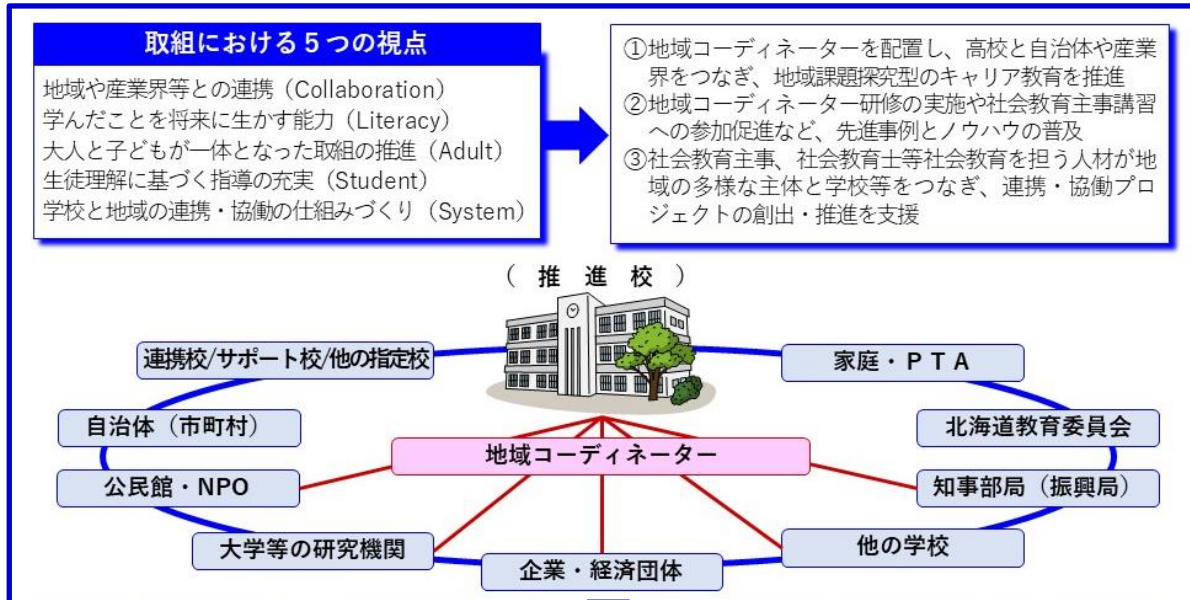
- 学校運営協議会での協議を踏まえて行う活動(11～19ページ参照)
- 地域学校協働本部(参照:手引 p.40)が学校と地域を巻き込みながら行う活動
- 「北海道CLASSプロジェクト」(3～5ページを参照)などにおいて、高校生が地域で地域課題解決型の学習活動を行い、地域住民と一緒に課題解決に向けた事業の企画立案・実施を行ったり、地元の農産物を活用した商品開発に参画して共に地域づくりに関わったりする活動

【取組事例1】地域創生に向けた高校魅力化に関連する事業

北海道教育委員会が実施する事業のうち、地域創生に向けた高校魅力化に関連するものとして、「北海道CLASSプロジェクト」、「マイスター・ハイスクール事業」及び「北海道高等学校遠隔授業ネットワーク構想」の取組を紹介する。

【1-1】北海道CLASSプロジェクト（地学協働活動推進実証事業）：R3～R5

北海道教育委員会では、地域と学校との連携・協働体制を構築し、活動を通じて「まち・ひと・しごと」と「学び」とのつながりづくりに貢献できるよう、令和3年度（2021年度）からの3か年事業として、「北海道CLASSプロジェクト（地学協働活動推進実証事業）」に取り組んでいる。



【研究主題】

- 各研究指定校に配置する地域コーディネーターを中心とした、高校と地域の自治体や産業界等が連携・協働するコンソーシアムを構築する研究
- 地域コーディネーター等による持続可能な地学協働活動の実現に向けた効果的なコーディネート機能の在り方についての研究
- 高校と社会教育関係人材（社会教育主事、社会教育士等）との連携・協働の在り方についての研究
- 生徒と地域の大人が協働した地域課題探究型の学習プログラムについての研究

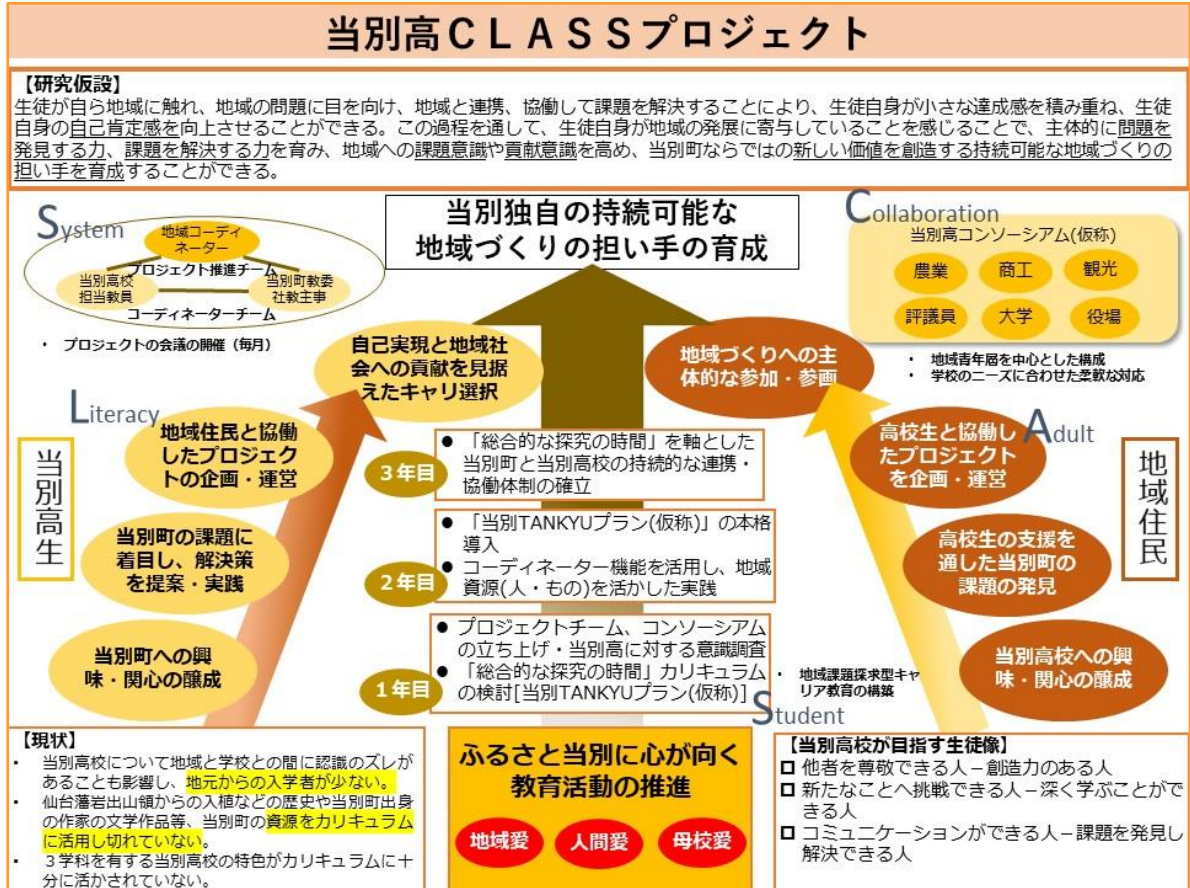
社会教育と学校教育の連携・協働による地域創生の実現

- 地域への課題意識や貢献意識をもち、地域ならではの新しい価値を創造し、地域を支えることができる人材の育成に向け、高校段階における地域を知り、親しむ機会の創出
- 地域をフィールドにした学習活動（生徒が地域に足を運ぶ学習活動）の拡充
- 生徒自ら課題を発見し、解決策を探る「地域課題探究型の学習」の展開
- 地域を知るコーディネーターの配置と多様な主体によるコンソーシアムの設置による、学習活動の支援

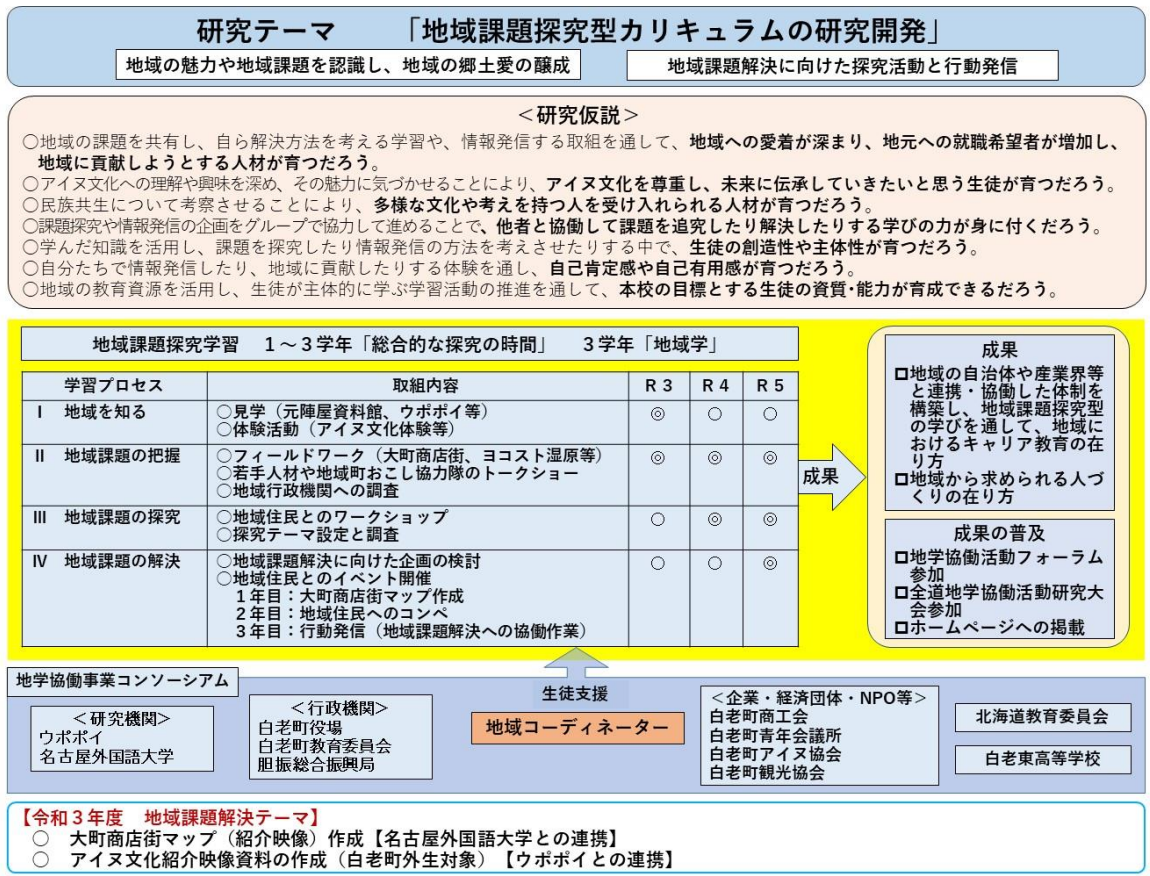
圏域	推進校 (本事業の中心校)	連携校 (既存の取組の拡充を図る高校)	サポート校 (高等学校OPENプロジェクト指定校)
道央	当別高校	夕張高校	余市紅志高校
道南	白老東高校	鷗川高校	函館水産高校
道北	上富良野高校	豊富高校	旭川農業高校
道東	帯広三条高校	本別高校	帯広工業高校

※コンソーシアムの構築や具体的な取組については、20～24ページを参照（上富良野高校、白老東高校、帯広三条高校、夕張高校、豊富高校の事例を掲載）。

○推進校① 当別高校の取組概要図 ※地域コーディネーターの具体的な取組は29ページを参照。



○推進校② 白老東高校の取組概要図 ※コンソーシアムの構築や具体的な取組は21ページを参照。



○推進校③ 上富良野高校の取組概要図 ※コンソーシアムの構築や具体的な取組は 20 ページを参照。

北海道CLASSプロジェクト 研究概要 北海道上富良野高等学校

学校教育目標 未来社会を生き抜く自立した人間の育成

【本校で育成を目指す資質・能力】

自律する力・・・ルールやマナーを正しく理解し、自分から守ることができる力
 つながる力・・・自分や他者を理解し、思いやりをもって他者や地域とつながる力
 行動する力・・・強くしなやかな心と身体を持ち、自分の考えで行動する力
 考える力・・・社会に必要な知識、技能を身につけ、課題を解決する力
 表現する力・・・身につけた知識、技能を使って他者に自分の考えを伝え、対話する力
 挑戦する力・・・達成感を積み重ねて自信を持ち、積極的に新たなことに取り組む力

コンソーシアム構成図

十勝岳ジオパーク推進協議会、国立大雪青少年交流の家、北海道教育委員会・上川振興局、地域の小中学校、地域コーディネーター、上富良野高校、連携高校協力高校、上富良野町教育委員会、上富良野町商工会、上富良野高校PTA、上富良野高校学校運営協議会、上富良野高校振興会、上富良野高校サポーターズクラブ、上富良野高校野球部を応援する会

研究テーマ 地域と協働した地域課題探究型学習プログラムを開発し、生徒と地域が共に学ぶことで本校が目指す資質・能力を備えた生徒の育成を図る。また、連携・協働プログラムを通じて地域に根ざした高校づくりと社会に貢献する人材の育成を図る。

スケジュール	1年目	2年目	3年目
	<ul style="list-style-type: none"> 育成を目指す資質・能力を軸とした事業計画と授業改善案の検討 地域素材を生かした地域課題探究型学習プログラム(学校設定教科「地域探究」)の開発 	<ul style="list-style-type: none"> 主体的・対話的で深い学びに向けた教科横断的な授業改善 評価方法の開発・実践と検証 	<ul style="list-style-type: none"> 事業による成果と開発した評価方法の発信 事業報告書の作成

総合的な探究の時間・学校設定教科「地域探究」

地域課題探究型学習プログラムの開発

主体的・対話的で深い学びの実践

地域コーディネーターを中心とした地域連携コンソーシアムの構築

地域リーダーの育成・地域創生

地域課題探究型のカリキュラム

1学年【総合的な探究の時間】【地域探究Ⅰ】2単位 課題発見のプロセスと探究活動の基礎を学ぶ。

- ① プレ地域探究・・・フィールドワーク、まとめ
- ② 地域探究基礎・・・十勝岳ジオパーク探究(調査方法を学ぶ)、探究チャレンジ(課題解決に向けた仮説、検証方法を学ぶ)、発表会(発表方法を学ぶ)
- ③ 課題共有集会・・・地域コーディネーター、コンソーシアムのメンバーとの課題共有、生徒によるマインドマップの発表と地域の課題に関わる講演

2学年【総合的な探究の時間】【地域探究Ⅱ】2単位 地域課題をテーマに、グループで課題解決型探究学習を行う。

- ① 地域探究・・・国立大雪青少年教育振興機構「探究アワード」のプログラムで地域課題の探究活動を実施(グループ探究活動、校外活動、中間報告会)
- ② 地域探究発表会・・・全校生徒、保護者、コンソーシアムのメンバーに対するポスター発表と質疑応答
- ③ 地域理解、キャリア探究・・・町内における職業体験の実施と成果発表

3学年【総合的な探究の時間】【地域探究Ⅲ】2単位 地域探究の成果の提言 他校の生徒と成果の交流を図る。

- ① 提言発表会・・・町長、町役場職員に対し、まちづくりに関する提言を行う。
- ② 地学協働活動地域フォーラム・・・地域の方々、本校生徒、保護者、連携校生徒、コンソーシアムのメンバーで研究実践の成果と課題の共有、協議、事業改善を行う。
- ③ 研究ポートフォリオの完成・・・3年間の活動を振り返り、資料整理と連絡の準備を行う。

参照：手引 p.82

○推進校④ 帯広三条高校の取組概要図 ※コンソーシアムの構築や具体的な取組は 22 ページを参照。

帯広三条高校 地学協働活動推進実証事業 研究概要

研究仮説：地域と連携・協働した探究的な学びを推進すれば主体的に学ぶ力が身につく、その結果主体的な進路選択と進路実現ができる

三条高校が育成を目指す「4つの資質・能力」			
1 高いコミュニケーション能力を備え、他と協働して課題を解決する力	2 知識・技能の確実な習得をもとに、そこから思考・判断・表現する力		
3 地域に対する理解を深め、そこから広く社会・国際社会を探究する力	4 自らの将来について主体的に考え、その実現に向けて努力する力		
三条高校が育成を目指す「10の力」			
傾聴力	発信力	想像力	創造力
			計画力
			知識活用力
			分析力
			課題発見力
			自己肯定力
			行動力

学びの3乗プラン～教科横断的な学習の実践

授業	1年次	2年次	3年次
総合的な探究の時間	<ul style="list-style-type: none"> ■基礎的知識の習得 ■学ぶ環境の構築 	<ul style="list-style-type: none"> ■基礎的知識の活用 ■学習の自己調整 	<ul style="list-style-type: none"> ■個に応じた学習展開 ■探究的な学習の実践
	<ul style="list-style-type: none"> ■探究スキルの習得 ・各種スキルトレーニング ・専門家による進路講話 <p style="border: 1px solid blue; padding: 2px;">探究するスキルの習得と探究に向かう姿勢の獲得</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■探究スキルの活用 ・専門家との課題探究 ・グループ探究学習と発表活動 <p style="border: 1px solid blue; padding: 2px;">専門的知識・技能の獲得と将来への意欲向上</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■探究の深化と実践 ・地域課題への提言 ・各種研究大会やコンテストへの挑戦 <p style="border: 1px solid blue; padding: 2px;">専門的知識・技能の活用と将来への具体的な展望</p>

本物の知識・本物の評価 → 学ぶ意欲の向上

コーディネーター

協働して解決する学び → 主体的な学び

◆探究コンソーシアム◆

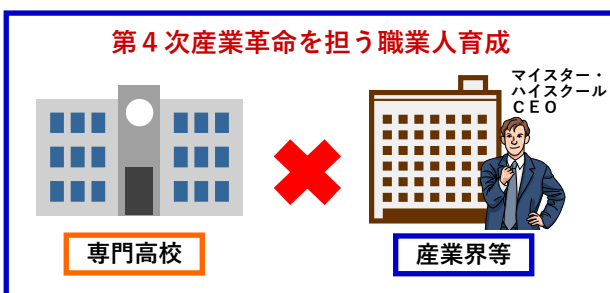
地域課題解決	教育・スポーツ	SCIENCE & TECHNOLOGY	看護・医療 & 地域支援
帯広市役所 十勝振興局	道教育大 道教委	帯広畜産大	道医療大
			国際理解・人権
			JICA 十勝インターナショナル協会
			ART & 表現
			帯広美術館 十勝毎日新聞社

進路実現 ↓ 地域の未来を創造する人材
 育成すべき資質・能力

【1-2】マイスター・ハイスクール事業（次世代地域産業人材育成刷新事業）：R3～

文部科学省では、第4次産業革命の進展、デジタルトランスフォーメーション、6次産業化など、産業構造や仕事内容が急速に変化する中、専門高校と産業界等が一体・同期化することにより、地域の持続可能な成長を牽引する最先端の職業人材育成システムの構築を目指す「マイスター・ハイスクール事業」（次世代地域産業人材育成刷新事業）を3か年事業として実施している。

北海道教育委員会では、本事業を活用した取組を推進しており、令和3年度（2021年度）からは静内農業高校、令和4年度（2022年度）からは厚岸翔洋高校が指定校となっている。



背景・課題

- 第4次産業革命の進展、デジタルトランスフォーメーション（DX）、6次産業化など、産業構造・仕事の内容は急速に変化している。
 - 新型コロナウイルス感染症の感染拡大の中、DX、IoTの進展の加速度が高まり、こうした変化が一層急激になることが予見される。
- **産業人材育成を担う専門高校において、成長産業化を図る産業界と絶えず連動した職業人材育成システムの刷新・構築が喫緊の社会的要請**となっている。

事業内容：成長産業化に向けた革新を図る産業界と専門高校が一体・同期化することによる、地域の持続可能な成長を牽引する最先端の職業人材育成システムの構築

【主な取組】

- **産業界等の関係者と一体となったカリキュラムの刷新・実践**
- 指定校の取組の統括者の役割を担う者として、産業界や地方公共団体の人材から選任した「**マイスター・ハイスクールCEO**」を配置（教育課程の検討・編成、実施方法の検討、高等教育機関、産業界等との連携等を行う）
- 産業界の最先端の技術・知識等を指定校において指導する役割を担う者として、産業界等の人材から選任した「**産業実務家教員**」を配置
- **企業等での授業・実習を多数実施**、企業等の施設・設備の共同利用

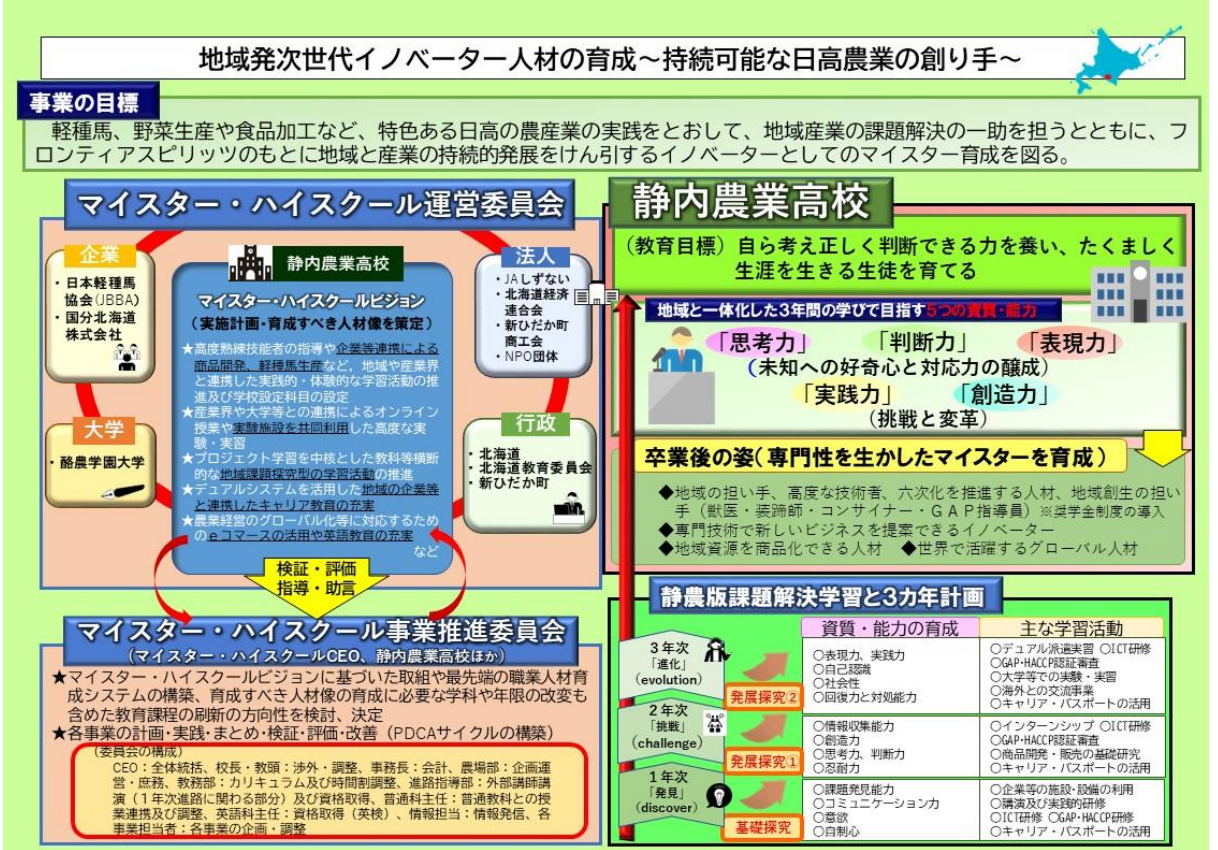
○静内農業高校の取組概要（令和3年度～令和5年度）

参照：手引 p.48

事業名	地域発次世代イノベーター人材の育成～持続可能な日高農業の創り手～
事業目標	軽種馬、野菜生産や食品加工など、特色ある日高の農産業の実践をとおして、地域産業の課題解決の一助を担うとともに、フロンティアスピリッツのもとに地域と産業の持続的発展をけん引するイノベーターとしてのマイスター育成
高校時代に育成すべき人材像	学校教育目標を踏まえ、地域と一体化した3年間の学びで目指す5つの資質・能力 「思考力」「判断力」「表現力」「実践力」「創造力」
マイスター・ハイスクールビジョン - 専門高校における人材育成計画の概要 -	<ol style="list-style-type: none"> 1 高度熟練技能者による指導や企業等と連携した商品開発や軽種馬生産など、地域や産業界と連携した実践的・体験的な学習活動の推進及び学校設定科目の設定 2 プロジェクト学習を中核とした教科等横断的な地域課題探究型の学習活動の推進 3 デュアルシステムを活用した地域の企業等と連携したキャリア教育の充実 4 地域や小・中学校と連携した教育活動など、異年齢集団による活動の推進 5 オンライン授業や実験施設を利用した高度な実験・実習など大学等との連携・協働 6 農業経営のグローバル化等に対応するためのeコマースの活用や英語教育の充実
マイスター・ハイスクールCEO	北海道農政部生産振興局 技術支援担当局長
産業実務家教員	日本軽種馬（JBB A）静内種馬場 獣医師

※コンソーシアムの構築や具体的な取組については、25ページを参照。

○静内農業高校の取組概要図（令和3年度～令和5年度）



○静内農業高校における2年目(令和4年度)の取組概要図



○厚岸翔洋高校の取組概要図（令和4年度～令和6年度）

【事業名】

地域の未来を創るマリン・イノベーターの育成～IT導入による持続可能な地域社会の創造～

【事業概要】

地域の産業界（漁協、道の駅）や自治体（厚岸町）と連携・協働し、IT技術を活用した「スマート水産業」に関わる機器の設置、取扱い方法及び取得データの有効活用のほか、未利用資源の活用、新たな商品化に向けた取組を通して、将来、「スマート水産業」を牽引する拠点地域となるよう、三者が一体となって人材育成を図るとともに、地域創生につなげる事業とする。

【事業実施期間】

令和4年度（2022年度）～令和6年度（2024年度）

【令和4年度実施計画（予定）】

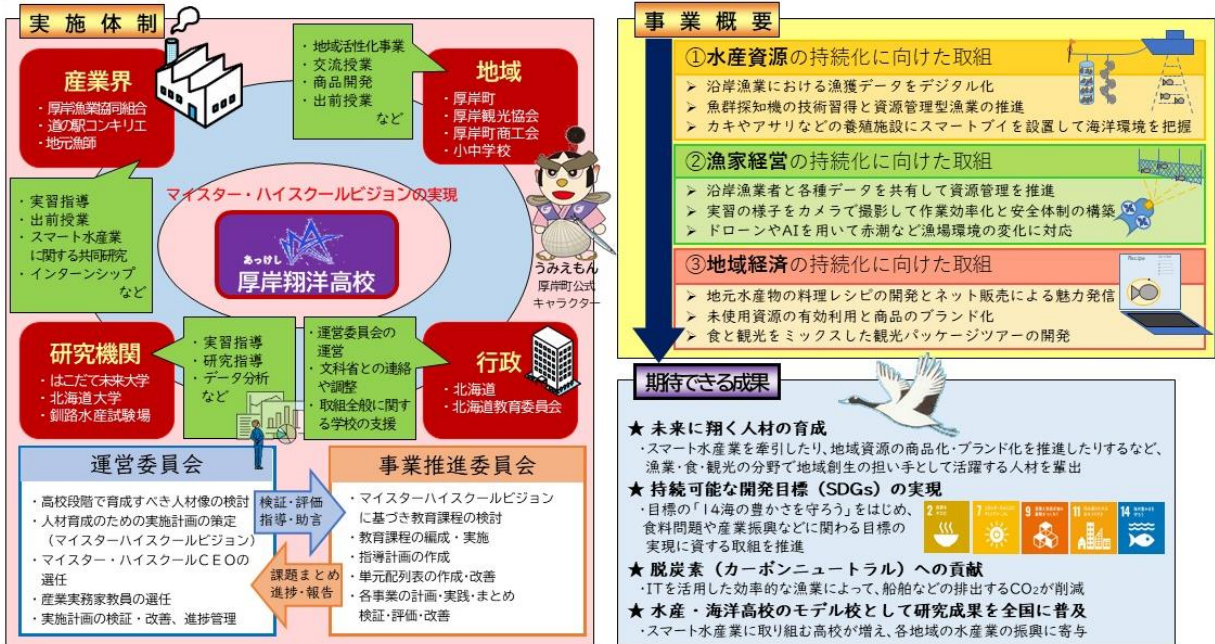
- (1) 厚岸町長による講話をとおして地域の将来について考察
- (2) 町の人口ビジョンや産業構造を調べ、生徒が主体的に地域の課題を発見
- (3) スマートブイやデジタル操業日誌を用いた資源管理の手法を導入
- (4) 漁業実習艇にビデオカメラを設置し、安全かつ効率的な操業体制を構築
- (5) 市場調査や種苗センターでの栽培漁業に関する研修
- (6) 次年度から学校設定科目を新設するため、教育課程の方向性を検討
- (7) キャリア・パスポートの活用（事業実施期間において継続して活用）

地域の未来を創るマリン・イノベーターの育成 ～IT導入による持続可能な地域社会の創造～



事業の目的

水産分野の産業構造が変化し、仕事の内容の革新が求められる中、カキやアサリ、コンブといった水産業を基幹産業とする厚岸町において、IT技術を活用したスマート水産業の実践を通して、地域の資源管理型漁業の推進に寄与するとともに、デジタル人材の育成をはじめとした地域産業の持続的な成長を牽引する最先端の職業人を育成する。



【1-3】北海道高等学校遠隔授業ネットワーク構想：R3～R5

文部科学省では、中山間地域や離島等に立地する小規模高校の教育環境改善のためのネットワークを構築する「地域社会に根ざした高等学校の学校間連携・協働ネットワーク構築事業（COREハイスクール・ネットワーク構想）」を令和3年度（2021年度）からの3か年事業として実施している。

北海道教育委員会では、本事業を活用し、遠隔授業の配信機能集中化と小規模校の魅力化を図る「北海道高等学校遠隔授業ネットワーク構想」に取り組んでいる。

令和3年（2021年）4月、遠隔授業の配信機能を集中化した「北海道高等学校遠隔授業配信センター」を有朋高校内に開設し、本センターから、地域連携特例校25校及び離島にある道立高校2校の計27校に対し、遠隔授業を配信している。

<COREハイスクール・ネットワーク構想>

背景・課題

- 中山間地域や離島等に立地する小規模高校において、地域唯一の高校として、大学進学から就職まで多様な進路希望に応じた教育・支援を行うことが必要であるが、教職員数が限定的であり、生徒のニーズに応じた多様な科目開設や習熟度別指導が困難な状況である。
- 複数の高校の教育課程の共通化やICT機器の最大限の活用により、中山間地域や離島等の高校においても生徒の多様な進路実現に向けた教育・支援を可能とする高校教育を実現し、持続的な地域創生の核としての機能強化を図る。

主な取組

- 同時双方向型の遠隔授業などICTも活用した連携・協働
⇒ 自校では受けることができない授業の受講を可能化
⇒ 免許外教科担任制度の利用解消
- 地元自治体等の関係機関と連携・協働する体制の構築
⇒ 学校外の教育資源を活用した教育の高度化・多様化
⇒ 地域を深く理解しコミュニティを支える人材の育成

北海道高等学校遠隔授業ネットワーク構想の概要

事業背景・課題

① 広域分散型の地理的特性と高校の小規模校化

- 広域分散型の地理的特性により、地元高校以外の高校への通学が困難な地域が多数存在
- 中学校卒業生数の減少により、高校が小規模校化
⇒ 第1学年4～8学級：89校/188校（47.3%）
第1学年1～3学級：99校/188校（52.7%）
第1学年1学級：53校/188校（28.2%）

② 地域の高校への進学率の低下

- 地元小規模校以外の高校への通学が困難な地域において、中学校卒業生が通学区域内の高校へ進学する割合が低下
⇒ 79.3%（他地域は91.6%）

③ 小規模校における大学等への進学率の低下

- 他校への通学が困難な地域にある小規模校において、大学等へ進学する割合が低下
⇒ 22.1%（当該小規模校以外の高校は44.4%）

④ 次代の地域の担い手の創出の必要性

- 少子化や都市部への人口流出により、生産年齢人口が減少

■ 教員配置数が減少する中、多様な学習ニーズに対応した教育課程の編成・実施をどのように行うか。
■ 生徒数が減少する中、切磋琢磨できる環境の整備をどのように行うか。
■ 持続可能な地域の実現・地域創生が求められる中、地域と連携・協働した取組をどのように行うか。

事業目的

遠隔授業の取組やコンソーシアムの構築により、全道どの地域においても、多様で質の高い高校教育を実現するとともに、生徒の地域への理解を深め、ふるさとに誇りと愛着をもって、地域の発展に貢献しようとする人材の育成を図る

設定目標・設定理由

- **目標① 「北海道高等学校遠隔授業配信センター」(T-base) の開設・充実**
(理由) 質の高い遠隔授業の安定的な配信には、配信機能を集中化する必要があるため。
- **目標② 遠隔授業による小規模校での習熟度別授業の実施や多様な科目の開設**
(理由) 小規模校化により教員配置数が減少する中、多様で質の高い高校教育を実現するためには、生徒の学習ニーズに応じた教育課程の編成・実施が必要のため。
- **目標③ コミュニティ・スクールの導入/連携組織(コンソーシアム)の構築**
(理由) 地域と連携・協働するためには、組織的・継続的な仕組みを構築することが必要のため。
- **目標④ 地域課題探究型の学習活動の推進**
(理由) 地域創生の観点から、地域の担い手となる生徒に対し、地域課題を解決する態度など、社会の形成者として必要な資質・能力を育成することが重要のため。

事業① 北海道高等学校遠隔授業配信センター（T-base）

■開設目的

どの地域においても、自らの可能性を最大限に伸ばしていくことのできる多様で質の高い高校教育を提供し、地域の小規模な高校の教育課程や教育活動の充実を図るため、北海道有朋高等学校内に、地域の小規模な高校に遠隔授業を行う「北海道高等学校遠隔授業配信センター」を令和3年4月に開設する。

なお、配信センターには、遠隔授業を専任で担当する教員を配置する。

■実施体制（令和3年度）

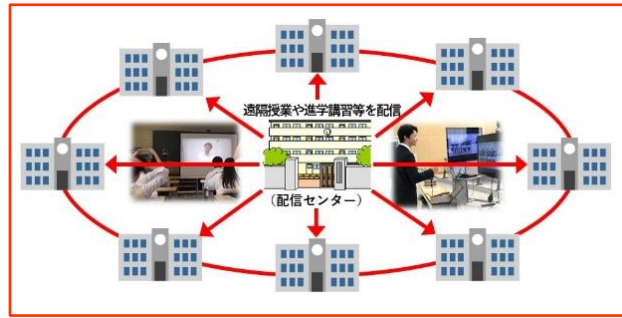
○センター長 1名【有朋高校校長が兼務】

○業務を担当する教員 16名

・次長（教頭）1名【配信業務の全体把握、受信校及び関係市町村教育委員会との渉外業務】

・教諭 15名【国語1、地理歴史1、公民1、数学4、情報1、理科2、音楽1、書道1、英語3】

※T-baseの概要は50～53ページを参照。



■配信計画

年次進行で配信。令和5年度（2023年度）以降は全学年配信。

■配信対象校（令和3年度）

地域連携特例校（25校）、離島にある道立高校（2校）

	R3	R4	R5
配信学年	1年生	1年生	1年生
		2年生	2年生
			3年生

■遠隔授業に関する主な取組概要

①配信センターからの遠隔授業の実施【習熟度別授業の実施、生徒の学習ニーズに応じた多様な科目の開設、複数校への同時配信による授業の実施（遠隔合同授業）】

②配信センターからの進学講習の実施【長期休業期間中を利用した進学講習の実施】

③遠隔システムを活用した地域連携特例校等間における交流等【地域連携特例校等間の遠隔授業の実施、生徒会交流、教職員研修】

④遠隔授業を担当する教員に必要なスキルを身に付けるための教員研修の実施

■令和3年度の配信教科・科目（8教科21科目）

国語	地理歴史	公民	数学	理科	芸術	外国語	情報
国語総合	日本史B	現代社会	数学Ⅰ	科学と人間生活	音楽Ⅰ	コミュニケーション英語Ⅰ	社会と情報
古典B		政治・経済	数学Ⅱ	物理	書道Ⅰ	コミュニケーション英語Ⅱ	
		倫理	数学A	化学		コミュニケーション英語Ⅲ	
			数学B			英語会話	
						英語表現Ⅰ	

事業② 地域との連携・協働による高校魅力化

地域創生に向けた高校魅力化の手引

地域と連携・協働するための推進体制の構築

- コミュニティ・スクールの導入
- 連携組織（コンソーシアム）の構築
- 地域コーディネーターの配置
- 地域連携を担当する教職員の位置付け

多様な進路を実現するための学びの保障

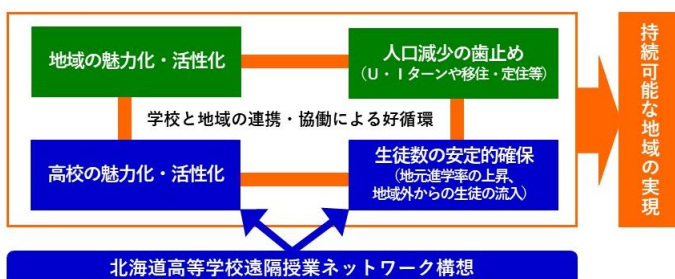
- 生徒の興味・関心や多様な進路に応じた教育課程の編成・実施
- 小・中・高校等の学びの接続
- 課外における学習機会の確保
- 地域と連携した部活動の実施

地域を学びの場とした教育活動の推進

- 地域課題探究型の学習活動の推進
- 地域の企業等と連携したキャリア教育の充実
- 地域の人材等の活用や異年齢集団での活動の推進
- 地域の特性や学びの場の確保
- 道外からの入学者や地域留学の受け入れ

将来展望

- 配信センターの開設・充実により、広域分散型の北海道において、どのような地域においても、生徒の多様な学習ニーズに対応した教育課程の編成・実施が可能
- 各学校が、地域と連携・協働するための推進体制を構築し、地域課題探究型の学習活動を含む地域を学びの場とした教育活動を推進することにより、社会の形成者として必要な資質・能力や地域への愛着や誇りを育み、地域創生を実現



【2-1】道立高校におけるコミュニティ・スクールの導入状況 (令和4年4月1日 (予定))

学校運営協議会設置年月日	学校名	学校運営協議会設置年月日	学校名
平成24年5月9日	別海高校	令和2年4月1日	登別青嶺高校
平成29年9月27日	栗山高校		平取高校
	寿都高校		上富良野高校
平成30年4月1日	夕張高校		常呂高校
	追分高校		大樹高校
	美瑛高校		広尾高校
平成30年10月1日	清里高校		本別高校
	上士幌高校	令和3年4月1日	鷗川高校
平成31年4月1日	下川商業高校		松前高校
	豊富高校		東川高校
	興部高校		斜里高校
平成31年4月24日	鹿追高校	令和4年4月1日	岩内高校
	幕別清陵高校		

※道立高校 25 校に導入済み

【2-2】コミュニティ・スクール実践事例集 (北海道教育委員会、令和3年3月発行)

北海道教育委員会では、高校におけるコミュニティ・スクールの導入の促進を図るため、実践事例集を作成している。令和2年度は、導入の経緯や具体的な取組事例に加え、導入校に対して実施したアンケート結果等を参考資料として掲載した事例集を作成した。

○コミュニティ・スクールの運営・意識・取組等に関するアンケート

- ・実施時期：令和2年(2020年)10月12日～10月19日
- ・対象校：令和2年度(2020年度)までにコミュニティ・スクール(以下「CS」という。)を導入した道立高校20校

・アンケート結果の概要

①CSを導入した経緯(複数回答、上位4位までの項目)

項目	回答数
学校改善に有効と考えたから	18 (90.0%)
地域学校協働活動の活性化に有効と考えたから	16 (80.0%)
学校を中心としたコミュニティづくりに有効と考えたから	16 (80.0%)
教育課程の改善・充実に有効と考えたから	14 (70.0%)

②CS導入により実感している結果(複数回答、「とても当てはまる」「まあ当てはまる」の合計が上位6位までの項目)

項目	回答数
学校と地域が情報を共有するようになった	20 (100.0%)
地域と連携した取組が組織的に行えるようになった	19 (95.0%)
教職員の意識改革が進んだ	17 (85.0%)
地域が学校に協力的になった	17 (85.0%)
特色ある学校づくりが進んだ	16 (80.0%)
学校関係者評価が効果的に行えるようになった	16 (80.0%)

③CS導入の総合満足度(0が不満足～10が満足)

点数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
校数					1	3	3	4	4	2	3

④CSの効果的な運営のために重要だと思うこと(複数回答、上位3位までの項目)

項目	回答数
CSコーディネーター(地域学校協働活動推進員等)が配置されること	13 (65.0%)
CSの委員として適切な人材が確保できること	12 (60.0%)
教職員がCSの意義を十分に理解していること	8 (40.0%)

⑤CS導入上の課題(2つ以内の選択、上位3位までの項目)

項目	回答数
協議会委員の選定	16 (80.0%)
業務の負担増加	13 (65.0%)
既に地域や保護者の協力が得られており、すみ分けに苦慮	5 (25.0%)



※本事例集は北海道教育委員会のホームページに掲載しています。下記QRコードでアクセスしてください。



○本事例集の掲載事例

学校名	事例のタイトル	具体的な取組事例
登別青嶺高校	地域と連携して生徒の生きる力を育む教育	登別青嶺高校のPRについて考える
平取高校	地域の力を活用し地域と共に成長する	地域について考える・地域と共に活動する
上富良野高校	地域との協働で生徒の資質・能力を育む	地域探究活動「かみふらのを学ぶ」
常呂高校	地域とともにある学校づくり～縦と横の連携の充実へ～	地域の課題を発見し、地域とともに成長する
本別高校	地域との組織的で持続可能な連携体制の構築を目指して	2学年総合的な探究の時間「とかち創生学」(with コーチ)の取組
広尾高校	学校教育目標の実現に向けて～教育活動の充実～	広尾町の未来について考える
大樹高校	「総合的な探究の時間」を軸とした地域との連携・協働	大樹町の現在・未来について

掲載事例の一例

『『総合的な探究の時間』を軸とした地域との連携・協働』（大樹高校）

【概要】

大樹高校は、「社会に開かれた教育課程」の実現や学校の魅力化の推進、生徒が地域への誇りと愛着を持ち、充実感の持てる学校づくりなどの推進に向け、保護者や地域の方の学校運営参画の体制づくりを整備するため、大樹町の支援のもと、令和2年（2020年）4月に学校運営協議会を設置した。

大樹町唯一の高校として、保護者や地域の理解と協力を得ながら教育活動に取り組んでおり、学校運営協議会は年3回実施している。

【委員の構成等】

○委員

- ・会長：町青少年健全育成推進町民の会会長（町議会副議長） 1名
- ・副会長：町ボランティア連絡協議会事務局員 本校校長 2名
- ・他12名（PTA会長、町地域学校協働活動推進員、町商工会青年部、町教育委員、教育振興会会長、同窓会副会長他）

○事務局（教頭）

- 部会
 - ・地域連携学習部会
 - ・自己実現支援部会

【コミュニティ・スクール導入の背景と意図】

○少子化による学校規模の縮小が予想される中、「社会に開かれた教育課程」を実現し、本校の魅力化を推進するため、これまでの取組の継続と発展を目指し、地域住民や保護者と教育理念や学校課題を共有し、一層の協力関係を築く必要があった。

○また、平成30年度（2018年度）に大樹町学校運営協議会（小・中学校）が設置され、地域からは、小中高と地域が一体となった教育活動を推進するため、本校における学校運営協議会設置を要望されていた。

○これまでも「小中高一貫ふるさとキャリア教育推進事業」の成果である、地域の学びを通じたキャリア教育を、町や関係機関の支援・協力を得ながら実施してきた。具体的には、地域の人的・物的資源を活用した「大樹学」（「総合的な学習（探究）の時間」を主とした各教科の活動等）や地域ボランティア活動等により、町全体をフィールドとした教育活動を積極的に展開してきた。

○学校教育目標「健やかな身体と豊かな心を持ち、自ら学ぶ人間を育てる」に則り、「総合的な探究の時間」を中心に、各教科活動、共生社会授業（※）、学校行事、課外活動等の一層の充実を図るため、地域の人材や施設の活用について、学校運営協議会を軸に調整することで、教育活動への支援や協力をさらに推進できるという目的で導入を決定した。

（※）「共生社会授業」とは、多様な特性を持つ個々が違いに認め合う共生社会について理解を深めることを目的として、本校全学年で行っている授業。

【コミュニティ・スクール導入に向けた取組状況】

○校内体制の整備

令和元年（2019年）9月に、校長・PTA会長・学校評議員・分掌部長による準備委員会を立ち上げ、近隣のコミュニティ・スクール導入済の高校から情報提供いただき、校内研修で職員に周知するとともに大樹町教育委員会等との協議を深めた。

○学校運営協議会委員の選出

人選にあたっては、大樹町教育委員会の協力を得ながら、地域性を考慮し、本校の教育活動に関わって、連携関係にある経済団体等に依頼した。

【具体的な取組事例】

「大樹町の現在・未来について」

今年度はこれまでの取組の充実を図り、「できることから始めよう」というスタンスで新しい取組を実施した。令和3年度(2021年度)から、第3学年の「総合的な探究の時間」を1単位増やして2単位とし、さらに3年間を通じて「町の未来について」考える系統的な取組とするため、現在、3か年の指導計画を大樹町地域学校協働活動推進員(以下「地域コーディネーター」という。)とともに検討している。

現段階の3か年計画は、次のとおりとなっている。

学年	内容
第1学年	町内巡検(大樹町宇宙交流センターSORA・インターステラテクノロジス 他) インターンシップ(地域公開報告会を含む) → <u>大樹町の「今(現在)」を知る</u>
第2学年	台湾見学旅行(地域公開報告会を含む)、大樹町SDGs探究(JICA協力) → <u>大樹町外の「今」を知り、改めて大樹町の「今(現在)」そして「未来」を考える</u>
第3学年	町内企業模擬面接、大樹町街づくりプロジェクト(講話・フィールドワーク・制作) 夢叶えるプロジェクトin大樹町(発表会) → <u>大樹町の「未来」を考える</u>

地域コーディネーターに週1回来校いただけるようになったことから、地域人材や地域活動等の情報収集や連絡調整、打ち合わせが大変スムーズになった。また、これまで本校教員の知らなかった地域の貴重な人材や事業等を知ることができ、教育活動に広がりを持たせることができています。

○実際の主な取組

- ・インターンシップ(公開報告会を含む)、大樹町宇宙交流センターSORA見学(第1学年)
- ・インターステラテクノロジス社見学、まちのワクワク未来予想図ワークショップ(第2学年)
- ・町内企業等進路模擬面接、給食献立考案、町内福祉施設訪問(第3学年)



【成果と課題】(○：成果、●：課題や今後の展望)

- 地域コーディネーターを中心に、これまでの授業実践を更に充実させることができた。
- 多くの地元企業等や地域人材との繋がりができ、講演等の授業を多数実施できた。生徒は、様々な活躍をしている地域の方からの講話等到大変刺激を受けることができた。
- コミュニティ・スクール導入とともに、大樹町教育委員会職員や地域おこし協力隊員等との連携が深まり、町内唯一の高校として、さらに多くの方から協力を得られる環境となってきた。
- 地域の方に本校への理解を深めていただくため、高校を会場とした学校説明会だけでなく、高校側が町内の公共施設等に足を運び、地域住民対象の説明会や懇談会を開くことができた。
- 既存組織との活動一本化、または連携の在り方、コミュニティ・スクールとしての活動の可視化が検討課題である。

【2-3】コミュニティ・スクールの具体的な取組①（栗山高校の例）

参照：手引 p.78

「地域連携による人材育成の取組」

栗山高校では、学校運営協議会から意見をいただきながら、栗山町小中高ふるさとキャリア体験発表会、くりやま塾、栗山子ども会議などに取り組み、地域と連携・協働した教育活動の充実を図っている。

○コミュニティ・スクールの目的

- ・地域と一体となった教育活動の推進に努めること
- ・連携した教育活動の推進に努めること
- ・生徒が学ぶ喜びと充実感の持てる教育活動の推進に努めること

○町と連携した教育活動

①栗山町小中高ふるさとキャリア教育体験発表会

町内の全小中学校と栗山高校、及び地元の企業が連携し、児童生徒の社会的・職業的自立に向けて必要な能力や態度を育て、それぞれの発達段階に応じたキャリア教育の在り方について考えを深めることを目的としている。近年は異業種や学校間連携の貴重な機会として、各学校及び企業がそれぞれの取組を発表し、交流する場となっている。

②くりやま塾

外部講師を招き、「栗山町におけるSDGs時代の環境保全について」というテーマで、講演とワークショップを行った。当日は学年の枠を取り払い、生徒会が自主的に運営を行った。

③栗山子ども会議

町内の小学生から高校生、北海道介護福祉学校の学生が参加し、各学校のいじめ撲滅に向けた日頃の取組を発表し、グループワークや意見交換等を行った。本校からは生徒会総務3名が参加した。

○成果

- ・生徒が主体的・対話的に学び、地域の学校のリーダーとして活躍できる場を設定することができた。
- ・本校生徒が、地域の児童生徒のリーダーとして活躍することの大切さを自覚するとともに、栗山町の企業が世界規模での挑戦を行っていることを知ることができた。



体験発表会



くりやま塾



子ども会議

【2-4】コミュニティ・スクールの具体的な取組②（松前高校の例）

参照：手引 p.77

「小中高が連携した書道教育・ふるさと学習の推進」

松前高校では、地域との連携による松前学や小中高の連携による高度な書道教育の実践を通して、探究力や想像力と豊かな心の育成に取り組むなど、コミュニティ・スクールを活用した地域と連携・協働した書道教育・ふるさと学習の充実を図っている。

○取組に至るまでの経緯

- ・平成30年に町内4小中学校が学校運営協議会を設置（書道教育・ふるさと教育の内容や日程等を調整で本校と連携）
- ・令和3年、本校に学校運営協議会を設置（小中高と連携した書道教育・ふるさと学習のほか、学校設定科目「松前学」の充実を促進）

○小中高連携による取組の実際

①小中高が連携した学校設定科目「松前学」の充実

「松前学」の一環として、さくらまつり期間中の「観光ボランティアガイド」や「松前ガイドブック」の作成に取り組み、まちづくりについて学んでいる。また、地域の伝承をまとめた紙芝居を作成し、小学生に伝承するなど、小中学校との連携が図られている。

②ふるさと読本「松前」の編纂と活用

小学校社会科で使用する副読本を中高でも活用し、ふるさと学習を推進している。また、編纂作業に高校の教諭も参加し、活用法について協議するなど、充実を図っている。

○成果

- ・地域との連携・協働により、地域の人材にふれる機会が生まれ、生徒が道内屈指の歴史や伝統をもつ松前の特徴的な学びを深めることができる。
- ・令和3年度全国学力・学習状況調査における生徒質問紙の質問項目「今住んでいる地域の行事に参加しますか。」において、地元中学生における肯定的な回答が全道平均を上回るなど、地域への愛着をもった生徒が入学してきており、コミュニティ・スクールは人材育成に必須となっている。



松前学



松前町巡検



江良八幡神社杵振舞体験

【2-5】コミュニティ・スクールの具体的な取組③（興部高校の例）

参照：手引 p.38

「学校力向上＋地域創生を目指して」

興部高校では、令和元年度より学校運営協議会を組織し、地域の将来を担う人材を育成するため、学校を核とした地域との連携・協働の取組を通じた教育活動の充実を図っている。

○取組に至るまでの経緯

- ・興部町の知名度上昇に向けた高校生の取組について協議
- ・「総合的な探究の時間」における商品開発の継続や公設塾設置について協議



興部町 PR

○実際の取組

①興部町のPR活動

生徒が見学旅行先の商業施設において、興部町について調べたパンフレットと興部町の特産品を配布した。

②公設塾設置に向けて

ブリマベンギーノ代表取締役・藤岡 慎二氏による高校魅力化講演会を実施し、学校運営協議会で公設塾設置の協議を進めた。



地元企業との商品開発

③「総合的な探究の時間」における商品開発の検証

今年度、おこっぺ町観光協会の 谷口 貴之氏を中心に、第1学年の「総合的な探究の時間」で、商品開発を実施した。



公設塾についての話し合い

○成果

- ・興部町のPR活動に向け、生徒が自ら興部町について調べ学んだことにより、地域の特性を知ることができ、郷土に対する誇りを高めることにつながった。また、どのようにしたら興部町の良さを知ってもらえるかを考えることを通して、生徒の発信力を高めることができた。
- ・令和4年度から興部町によって公設塾が設置されることが決定した。興部高校生の学力向上や地域と連携した探究活動の充実、教員以外の人材に関わることによる教育効果の向上が期待される。
- ・令和3年度に商品開発を展開したことで、社会に開かれた教育課程の実現につながった。生徒が複数の専門家と関わることで、生徒の資質・能力の向上にもつながった。また、複数の企業の協働による商品開発が町内で初めて行われることに結びついた。

【2-6】コミュニティ・スクールの具体的な取組④（別海高校の例）

参照：手引 p.38

「地域合同防災避難訓練～みんなで拓く学校づくり運営協議会～」

別海高校では、学校運営協議会の機能を活用し、別海町役場、本校近隣に所在する町内会及び中学校と連携した防災避難訓練を実施するなど、地域と連携・協働した教育活動の充実を図っている。

○取組に至るまでの経緯

- ・学校運営協議会で本校における「危機管理」をテーマに熟議
- ・改善の方策として「防災について考える週間」を設定
- ・取組の一環として「地域合同防災訓練」の実施を決定
- ・関係機関、近隣の学校及び幼稚園、地域住民への参加依頼
- ・町内会住民への告知（回覧板による周知、チラシの配布）



幼稚園児を誘導

○実際の取組『防災について考える週間』

①避難所運営ゲーム（「Do はぐ」）の実施

別海町役場防災交通課の職員を講師として実施。本校生徒の他に近隣の中学校の生徒も参加した。



避難用テントを設置

②地域合同防災避難訓練の実施

通常授業時に交通機関等の不通を想定した避難訓練を近隣の中学校、幼稚園、保育園と合同で実施。避難に当たっては、本校生徒（第3学年）が園児や中学生の避難を支援するなど実践的な訓練となった。



地域住民に非常食配付

③避難所設営訓練の実施

避難所運営ゲームで培った知識を活かし、本校生徒（第1学年）が避難所設営を体験。近隣町内会から協力を得て、実際に地域住民が避難してくる状況を想定し受入作業を体験した。



段ボールベッドの組立

○成果

参加した生徒からは「町民との訓練は初めての経験であったが、万が一災害が発生した際には、高校生として適切な行動をとることができるようになりたいと思った。」等、これまで以上に災害を自分ごとと捉え防災意識が高まった様子が見られた。

【2-7】コミュニティ・スクールの具体的な取組⑤（登別青嶺高校の例）

「地域とのパートナーシップによる通いたくなる学校づくり」

登別青嶺高校では、地域の教育力を活用したインターンシップや、地元イベントへの高校生による参加・協力に取り組むなど、地域と連携・協働した教育活動の充実を図っている。

○取組に至るまでの経緯

- ・令和2年度に学校運営協議会を設置
- ・地域に愛され地域教育力で生徒を育てる学校を目指している。

○実際の取組

①保護者・地域の意見を取り入れた「校則の見直し」

10月下旬に、本校の風紀委員会は、学校運営協議会及び登別市役所に対しアンケート協力を依頼した。本校の校則見直しの取組を周知した上で、社会人の目で見えた高校生らしさについて意見を集約した。地域の方が見た登別青嶺高校生の姿について率直な意見を知り、具体的な規定の見直しに反映することができた。

【校則見直しのためのアンケート】

②「ふるさと先生」として地域人材を活用した授業づくり

地元の多様な生徒を育てる単位制高校として、令和4年度から開設する学校設定科目「じもと学」や新学習指導要領の公民科「公共」を見据え、地域人材の活用を進めている。



市職員・地元編集者による授業の様子



飲食店マップやガイドを作成

1年次の現代社会において、登別市役所職員及び地元の編集者を講師に招き、地域の飲食店マップやガイドブックを作成し、登別市が市内全戸に配布した。また、登別市選挙管理委員会の協力を得た模擬選挙、裁判官、検察官を招いた模擬裁判、市議会における模擬議会等、地域の専門家による体験的な授業づくりに取り組んだ。



模擬選挙



模擬議会



模擬裁判

1年次の総合的な探究の時間においては、登別市、地元企業、NPO法人等の協力を得て、胆振管内の歴史・自然・観光等に関する地域資源に関する地域研修とワークショップを実施した。

③「湯鬼神からのお願い」～地域課題解決の取組～

登別国際観光コンベンション協会から依頼を受け、本校生徒は、年末年始に部活動等のグループや個人で観光施設の清掃活動等に取り組んだ。生徒は、地域産業の在り方を学ぶことができ、保護者からも「子どもにとっていい社会勉強になった。」と好評を得た。

○成果

- ・学校評価において、学校運営協議会から「自主的主体的活動」の項目である「地域行事への参加やボランティア活動の推進」について高評価が得られ、地域連携の継続に期待が寄せられた。
- ・校則の見直しに当たって地域から寄せられた意見は、生徒に身だしなみの意義を再認識させるとともに、地域からの自校に対する期待を直に感じさせる機会にもなった。
- ・生徒は、専門家による授業と体験を通じて自身の生き方や社会の在り方に対する思考を深め、それを具体的に表現できるようになった。（下表参照）

クラス	今日の学習を振り返って、MQに対する今の自分の考えを書いてみましょう。	評価1	2度の模擬裁判と授業を振り返って、MQに対する自分の考えをまとめましょう	評価2	総合評価
C組	1 しっかり一人一人の話を聞いて判断する	B	多角的な視点で判断することが必要 裁判や法律について知識を深めることで公正公平な裁判ができる	B	B
C組	2 法律についての知識を深めることで公正公平な判断ができると思う みんな平等にして判断すること	C	自分が思ったことで、悪役にするかなどを決めずに検察官や弁護士、被告人や証人の話をしっかり聞いた上でどうするかを決めること	B	B
C組	3 自分の意見をちゃんと言うこと	C	誰もが納得いく判断をすること 一人だけで納得いかに判断すると公平ではなくてしまうから皆が納得するような正しい判断をすることが必要	B	B
C組	4 法の下できちんと平等な裁判をする	C	公正公平はどっちかにかたよるだけでなく、両者ともに話を聞き、その中で証拠をもとに、判決を決めることが大切。市民の意見を取り入れることも大事	B	B

【表 模擬裁判の振り返り：模擬裁判を経て生徒の思考が深まり、具体的に表現できるようになった。】

【2-8】コミュニティ・スクールの具体的な取組⑥（平取高校の例）

「平取の子は平取で育てる」

平取高校では、学校運営協議会を中心に、「平取の子は平取で育てる」をテーマに、町内の様々な分野で活躍している方々の協力を得ながら、地域と連携・協働した教育活動の充実を図っている。

○取組に至るまでの経緯

平取町役場及び平取町教育委員会と連携して、次の3点の目標の達成に向けた取組を実施

- (1) 生徒に、平取町の魅力（人材、自然、観光資源）を伝え、平取町の文化や歴史等に興味・関心をもたせる。
- (2) 生徒が、主体的に平取町の課題に向き合い、解決しようとする態度を養う。
- (3) 生徒が、平取高校や平取町の魅力を町外に発信するなど、主体的に地域に貢献する態度を養う。

○実際の取組

①CS講演会「世界からびらとりへ」

シンガポール、シカゴ、ハワイなど様々な国で暮らし、多様な文化に触れてきた学校運営協議会の委員である熊谷厚子様を講師に招き、生徒だけでなく、多数の町民の方を対象に、「海外での生活で感じた日本（平取）とは」、「なぜ豊糠（平取町）に戻り『くまさん荘』の経営を始めたのか」、「自身の経験から考える国際人とは」をテーマとした講演会を実施した。



CS講演会

②高齢者疑似体験

「家庭総合」の授業において、「加齢による心身の変化と必要な支援について考える」ことを目的とした高齢者疑似体験を実施した。授業では、平取町地域包括支援センターの協力の下、生徒全員が手足に付けるおもりや視界が狭くなるゴーグル、車いす等を用いた高齢者疑似体験を行った。



高齢者疑似体験

③ホームページ作成

本校の有志の生徒が中心となり、ホームページの開設及び運営を行い、本校及び平取町の魅力を世界中に発信する取組を実施した。各コンテンツを作成するための取材を通して、生徒が本校及び平取町の新たな魅力や課題を発見し、平取町に貢献する態度を養うことを目的とした。

実施に当たっては、平取町主催の「びらとり協働のまちづくり事業」に応募し、活動資金を調達した。また、町内在住の方の指導の下、令和4年4月ホームページ運営開始を目標に準備を進めており、地域とともに本校生徒がまちづくりに参画していく過程を地域内外に発信する計画である。

今後は、町内事業所等のホームページ作成や、本取組に携わった本校卒業生に本校や平取町の情報発信を依頼するなど、平取町の魅力発信のためのネットワークを構築するとともに、より持続可能で発展的な取組とする計画である。



ホームページ作成

○成果

- ・CS講演会では、実施後に行った生徒対象のアンケートにおいて、「自分自身もっと英語を勉強し、広い世界を体感したい」、「『様々な国の人々と接するには、自分との違いを探すのではなく、共通点を見つけることが大事だ』という講師の言葉に感銘を受けた」との感想が多くあった。
- ・生徒は、地域の様々な方と触れ合うことにより、「町民の方が自分たちを応援してくれている」という意識が芽生え始めており、コミュニティ・スクールの取組が、生徒の成長に繋がっていることを実感することができた。
- ・高齢者疑似体験やインターンシップ実施事業所の仲介等、コミュニティ・スクールの取組を通して、多くの町民の方が、本校の教育活動に御尽力いただいていることを実感することができた。多くの生徒からも、「このような不便さで生活しているのなら、周囲のサポートが大切だ」との感想があった。

「地域と連携したキャリア教育」

美瑛高校では、学校運営協議会の設置により、地域と連携・協働した教育活動の充実を図っている。本校の生徒の多くが、都市部から登校していることから、美瑛町の教育資源を活用し、地域を知り、地域の課題を解決する方策を考える探究活動を通じて、将来に夢や希望をもち、自ら考え行動する生徒を育成している。

○取組に至るまでの経緯

- ・本校生徒は、自己の将来の希望や可能性について、イメージすることが困難な生徒が多く在籍しており、生徒自身が主体的に考える活動を通して、自身の将来に夢や希望をもち、主体的に行動することができる生徒を育成するための方策を検討した。
- ・地域への愛着を深め、地域に貢献できる人材の育成を図るためには、地域の自然と産業をフィールドとして活用し、教育活動の充実を図る必要がある。
- ・本校で育成したい生徒の資質・能力について、整理するとともに、学校運営協議会において、地域の教育資源を活用した具体的な教育活動について、検討を重ねた。
- ・協議会では、多様な生徒を受け入れている本校にとって、地域全体で生徒を育てることが重要であるとの意見が出るなど、委員からの賛同を得ることができ、地域をフィールドとした学びの充実を柱とした特色ある教育活動として、「地域連携型キャリア教育」を推進することになった。
- ・具体的な取組内容について、学校運営協議会で検討を重ね、「地域巡検」「インターンシップ」など、委員の協力による取組を実施することとした。



○実際の取組

①地域巡検

美瑛町の主要産業である観光に着目し、観光や地域の活性化について考察することを目的に、町内在住の写真家による講話や、同氏のガイドによる地域巡検を行い、地域の魅力について、生徒自身が肌で感じる取組を実施した。

その後、地域の農園を営む方の講話により、地域の産業について知る活動を行うとともに、美瑛町まちづくり推進課と協働し、魅力あるまちづくりについて、高校生の視点でグループワークを行った。



②インターンシップ

魅力あるまちづくりに向け、町と産業との関わりについて考えることを目的に、インターンシップを実施した。インターンシップでは、グループワークの内容や、生徒の進路希望を考慮し、実習を行う事業所を決定し、実際に実習で学んだことや今後の自己の在り方・生き方について、協力企業に向けて発表する機会を設け、学習の成果を地域に発信した。



○成果

- ・学校運営協議会において、本校の教育活動を承認したことにより、地域ぐるみで生徒の活動を支援することができた。
- ・委員が講師を務めたり、連携する企業の選定を行ったりするなど、主体的に学校に関わりを持つことで、社会に開かれた教育課程の実現につながった。
- ・学校運営協議会が、主体的に地域との橋渡しを行うことで、学校や生徒に対する地域の見方が変わり、地域と学校との連携体制をより強固に築くことができた。
- ・生徒は地域産業とまちづくりの関係について知ることを通して、高校のある美瑛町の魅力に気づき、地域に愛着をもつことができた。
- ・地域の魅力や課題について考え、その解決方法を検討することを通して、生徒自身と地域との関わりについて主体的に考えるようになった。
- ・地域貢献への意識が向上し、地元企業への就職を希望する生徒が増加した。

【2-10】コミュニティ・スクールの具体的な取組⑧（清里高校の例）

「清里町ミニサミット」

清里高校では、学校運営協議会や町内の議会議員との意見交換に取り組むなど、地域と連携・協働したシチズンシップ教育に係る活動の充実を図っている。

○取組に至るまでの経緯

- ・令和2年度、地域活性化に係る提案を地域の人に伝えたいという生徒会生徒の要望により、学校運営協議会における生徒会との意見交換会及び町議会議員との意見交換会を実施した。
- ・令和3年度、昨年度の反省から、全校生徒が関わる提案にしたいとの意見を踏まえ、校内における地域創生に係る提言発表会を実施して、生徒からの選抜班による清里町ミニサミットを実施した。

○実際の取組

①「学校運営協議会における生徒会執行部生徒意見交換会」

- ・実施日・場所
令和2年11月12日（木）清里高校会議室
- ・参加者
学校評議員4名、学校運営協議会委員12名
生徒会執行部生徒6名
- ・内 容（グループディスカッション）
話題「社会人へ高校生の疑問・要望」
- ・主な意見
「地域や高校の活性化について、若者の意見を地域に反映するにはどうすればよいか」、「高校の農場の作物を豊かにする助言がほしい」等



学校運営協議会

②「清里町ミニサミット（町議会議員との意見討論会）」

- ・実施日・場所
令和4年1月20日（木）清里高校視聴覚室等
- ・参加者
町議会議員4名、議会事務局1名、3学年生徒9名
- ・内 容（提言発表、質疑応答、グループ討議）
「地域とのつながりを大切に助け合うまちづくり」、「町をネットで広めよう！」等
- ・主な意見
「社会全体として情報化が進んでいるが、特に田舎であるほど、福祉などの行政サービスにおいて、都会との格差を埋めるために情報通信技術が必要になる」、「卒業して進学で地元を離れた後でも、地元に関わりをもってほしい。安心して戻ってこられる仕事を創れるように町も模索しており、今後より一層若者の意見が求められる。」等



提言発表の様子



グループ討論の様子

○成果

- ・持続可能な町づくりや地域創生について、高校生と町の有力者や議員が意見交換を行うことにより、共通の町の課題に対して、多様な立場から課題解決に向けて、建設的なアイデアを得ることができた。
- ・実際の討論等を通して、高校の役割について地域の人が理解し、高校活性化のために一層の支援を図ることにつながった。また、高校生の地域貢献への意識を向上することができた。

【3-1】コンソーシアムの具体的な取組① (訓子府高校の例)

訓子府高校では、訓子府高等学校魅力化プロジェクト委員会 (訓子府町教育委員会主催) により、地域の方々と知恵を出し合い、学校魅力化に向けた様々な取組を考え、地域との連携を深めた教育活動を推進している。

1 活動内容

- (1) 保護者及び生徒に対する学校魅力化に向けた意見交換
- (2) 教育課程や進路に係る意見交換
- (3) 令和4年度スクール・ミッション策定に係る意見交換

2 具体的な活動例

(1) 訓子府高校通学バスの運行

令和4年度から、公共交通機関では通学が困難な北見市西側区域への通学バス (訓子府町教委による) を運行予定。

(2) 武蔵野美術大学と連携した取組の実施

武蔵野美術大学の協力の下、本校美術部による学校PRポスターの作成や、全学年における対話型作品鑑賞会 (9回) を実施した。対話型作品鑑賞会をとおして、生徒たちはもの見方や感じ方が多様であることに気付き、互いに理解し合う態度の育成を図った。

(3) 学校PR動画の作成

本校の様子がより伝わりやすいよう、本校の特色ある取組や生徒のインタビュー等の動画を撮影し、学校PRポスター (QRコード) 及び学校HPにて視聴できるようにした。

(4) スクール・ミッションに係る意見交換

ファシリテーターとして外部講師を招き、訓子府町の将来像、訓子府町や地域社会で活躍できる人材像、卒業時に身に付けてほしい力についてグループワークを行い、訓子府高校のグラデュエーション・ポリシーの基礎を作った。

訓子府高等学校魅力化プロジェクト委員会

令和3年3月設置

訓子府高校をより魅力的で持続可能な学校とするための事業推進体制として、この委員会を設置する。

≪ 構成員 ≫

- ・ 訓子府高校PTA会長及び副会長
- ・ 訓子府高校同窓会会長及び副会長
- ・ 訓子府高校OB 若干名
- ・ 訓子府町校長会会長
- ・ 訓子府中学校長
- ・ 訓子府町PTA連合会会長及び副会長
- ・ 学校運営協議会学校応援団 若干名
- ・ 訓子府町代表教育委員
- ・ その他会長が必要と認める者
- ・ 訓子府高校校長及び教頭 (事務局) 訓子府町教育委員会

スクール・ミッションに係る意見交換

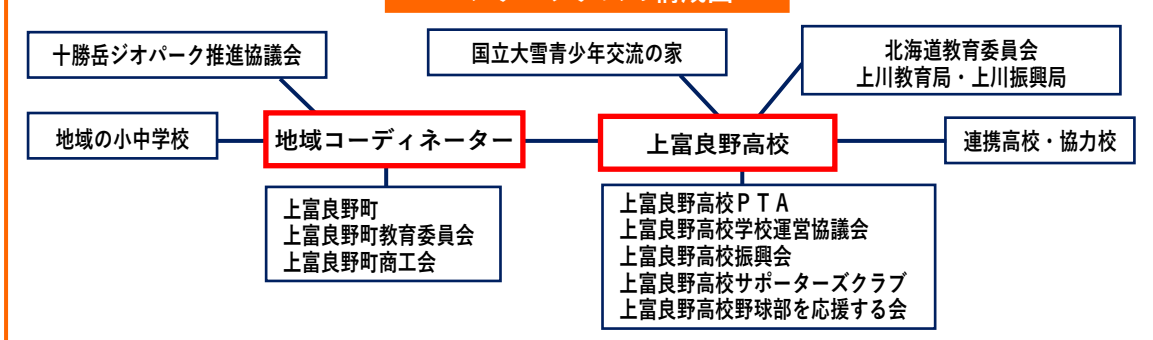


【3-2】コンソーシアムの具体的な取組② (上富良野高校の例)

※取組概要図は5ページ参照。

上富良野高校は、「北海道CLASSプロジェクト (地学協働活動推進実証事業)」の推進校として、「国立大雪青少年交流の家」及び「十勝岳ジオパーク推進協議会」との連携による地域探究活動を行い、主体的な課題発見と協働的な課題解決の取組を通して、地域と学校が連携・協働した教育活動の充実を図っている。

コンソーシアムの構成図



1 活動内容

- ・ 地域探究提言発表会
- ・ 全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」

2 具体的な活動例

(1) 地域課題探究に係る上富良野町長への提言発表会

上富良野町及び町教育委員会の協力により、本校3年生全員が町議会で「町長への提言」を行った。「十勝岳ジオパーク推進協議会」と連携した地域探究活動で探究した3年間の成果を、提言として町長にプレゼンテーションするとともに、町長との交流を通して、地域課題の解決に向けた取組の大切さについて理解を深めた。

(2) 全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」の活用

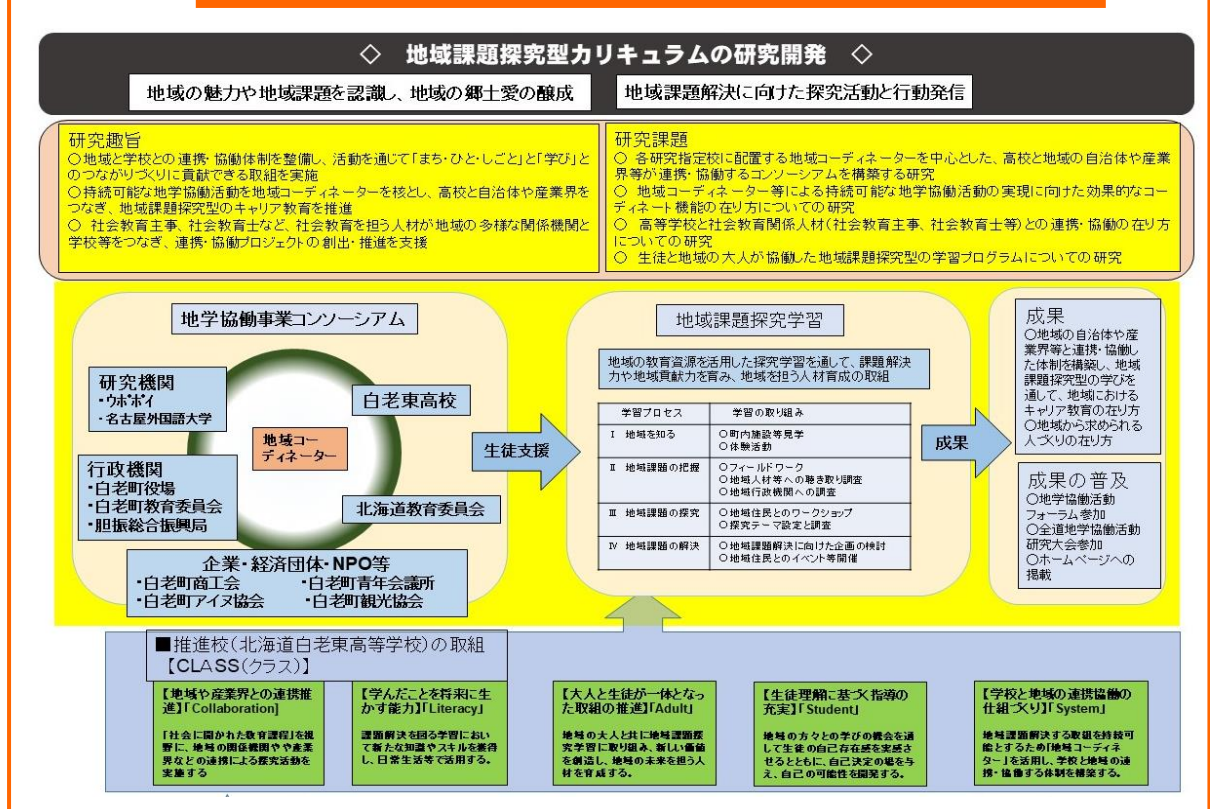
本校では、国立大雪青少年の家の「地域探究プログラム」を活用し、探究活動を系統的に実施している。プログラムでは、学習した成果を校内で発表し、全国ステージへの代表選考を行うとともに、上富良野高校PTA等地域の関係者による助言により、探究活動への理解を深めている。また、今年度 (令和3年度)、本校の代表が全国ステージで銀賞を受賞した。探究活動は、「十勝岳ジオパーク推進協議会」、「上富良野町商工会」と連携して実施しており、第1回コンソーシアム会議では、生徒が直接委員に探究活動の報告を行った。

【3-3】コンソーシアムの具体的な取組③（白老東高校の例）

※取組概要図は4ページ参照。

白老東高校では、平成19年度から実施しているアイヌ民族の伝統文化教育に加え、令和3年度から「北海道CLASSプロジェクト（地学協働活動推進実証事業）」の推進校として、「地学協働事業コンソーシアム」を構築し（下図参照）、地域課題の解決に向けたフィールドワーク及び地域の魅力を伝えるPR動画の制作に取り組むなど、地域と連携・協働した教育活動の充実を図っている。

図 地域課題探究型カリキュラムの研究開発（コンソーシアム図含む）



1 活動内容

- ・アイヌ文化を学ぶ ～アイヌ文化体験学習及びPR動画制作～
- ・地域課題の解決に向けたプロジェクト ～商店街へのフィールドワーク及びPR動画制作～

2 具体的な活動

(1) アイヌ文化体験学習を通じた伝統文化教育

白老アイヌ協会や一般社団法人白老モシリなどと連携し、生徒は、ムックリ制作やアイヌ文様刺繍等の体験実習を行い、アイヌ民族の自然観・歴史・文化について学習した。また、民族共生象徴空間ウポポイと連携し、「アイヌ文化の紹介」をテーマにした動画の制作を行い、アイヌ文化や民族共生への理解を深めることができた。



体験実習

(2) 大学と連携した地域の商店街へのフィールドワーク及びPR動画の制作

白老町では、地域の商店街の活性化が課題の一つである。この課題解決に向けたプロジェクトとして、名古屋外国語大学と連携し、生徒は大学生とともに地域の商店街に直接出向き、商店街の課題や魅力について情報収集するなど、フィールドワークを行った。さらに町民との対話交流会を実施し、地域の魅力や今後の展望について、さまざまな意見を聞き情報交換することができた。

また、商店街のPR動画を制作するため、映像制作のプロの方（白老町出身）による講習会を実施し、映像企画・撮影方法について学習した。その後、商店街において動画を撮影し、学校で編集作業を行い、商店街の魅力を伝えるPR動画を制作した。



商店街の聞き取りの様子



大学生と調査内容をまとめている様子

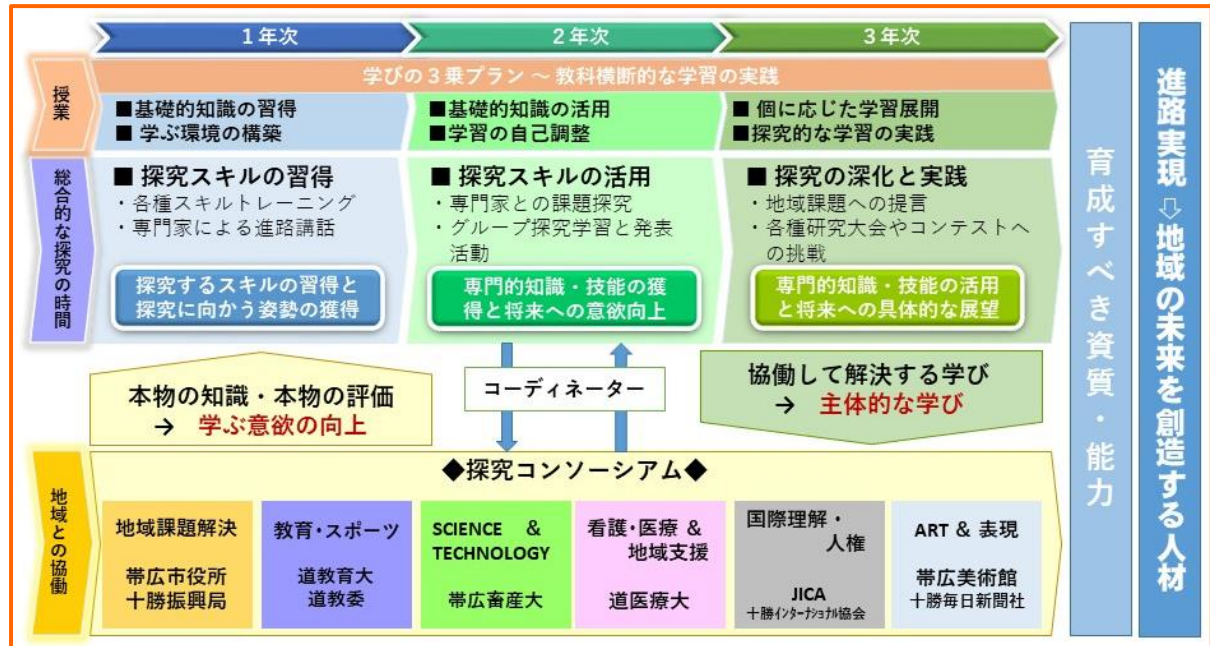


商店街での動画撮影

【3-4】コンソーシアムの具体的な取組④（帯広三条高校の例）

※取組概要図は5ページ参照。

帯広三条高校では、「北海道CLASSプロジェクト（地学協働活動推進実証事業）」の推進校の指定を受け、地域コーディネーターを仲介役として、外部機関から構成される「探究コンソーシアム」を組織し、地域と連携・協働した探究的な学びの推進に取り組んでいる。



1 活動内容

- ・地域コーディネーターや「探究コンソーシアム」を構成する各機関が参加する「探究コンソーシアム会議」を年2回開催し、探究活動の在り方や具体的な連携・支援の方法について協議した。
- ・「探究コンソーシアム」を構成する各機関の協力により、学校設定科目や総合的な探究の時間などにおいて、地域と連携・協働した複数の探究型プロジェクト学習を実施した。

2 具体的な活動例

(1) 学校設定科目「自己表現」の取組

帯広市役所の協力のもと、帯広市内の各地区や商店街の活性化について、グループに分かれ、関係者アンケートや現地調査を行った。また、課題解決の具体策や提案をプレゼンテーションソフトにまとめ、帯広市役所都市政策課や商業労働課、帯広畜産大学、各地区代表者に向け発表し、講評・評価を受けた。

北海道立帯広美術館の学芸員を講師として、20点程の本物の絵画を展示し、鑑賞した感想を講師や生徒同士で表現し合う「対話型鑑賞」を実施した。

帯広大谷短期大学附属図書館の協力により、「人を通して本を知る、本を通して人を知る」ことをテーマに、生徒同士で本を紹介し合い、表現力の向上を図るビブリオバトルを実施した。

(2) 総合的な探究の時間における「ネイティブの時間」の取組

帯広市内の英会話スクールの学院長により、「そして、英語はあなたを変える」というテーマで英語を学ぶ意義について講演会を実施した。

地域コーディネーターから帯広市在住の英語のネイティブスピーカー6名を紹介され、茶道や食文化等の日本文化やスポーツ、サイエンスについてネイティブスピーカーとともに体験し、英語でプレゼンテーションする活動を実施した。

(3) 現代社会における「住民の政治参加と地域づくり」の学習

帯広市役所都市政策課による帯広市のまちづくりについての講演の後、グループに分かれ、自分たちがまちづくりの何ができるかを議論し、発表した。

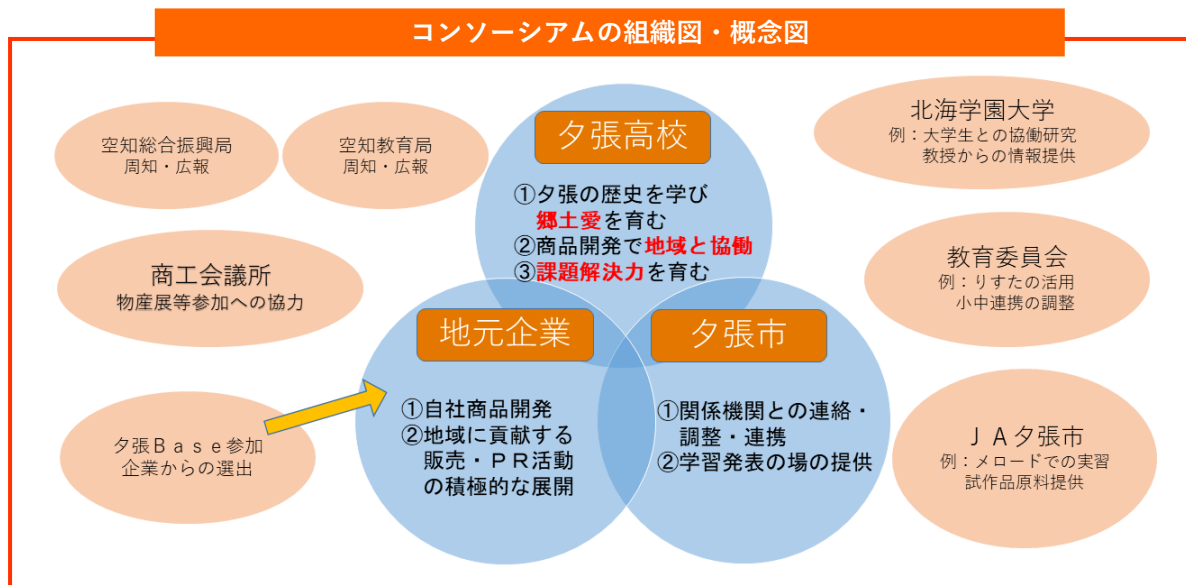
地域貢献に取り組んでいる地元企業により、地域貢献の意義やボランティア活動についての講話を実施した。



【3-5】コンソーシアムの具体的な取組⑤（夕張高校の例）

夕張高校では、「北海道CLASSプロジェクト（地学協働活動推進実証事業）」の連携校として、コンソーシアムを立ち上げ、地域課題探究型のキャリア教育について計画し、地域と学校とが連携した教育活動を実施している。

令和3年度から3年計画で、「生徒が地域の活性化や課題解決等に主体的に挑戦する姿勢・態度を身に付けること」と、「学校及び自治体・地域企業が地域課題の解決とそのための学習環境の整備について、持続的に連携協働して取り組む体制を構築すること」を目標に、コンソーシアムを構成する関係機関がそれぞれの立場や役割を生かして関わる中で、地元の農作物等を活用した「ふるさと納税返礼品」の開発等に取り組み、地域と連携・協働した教育活動の充実を図っている。なお、令和3年度においては、年3回のコンソーシアムの会議を実施し、取り組んだ内容を共有しながら、持続的に連携・協働できる仕組み作りや、学校体制の構築等についても協議を行った。



1 活動内容

- ・日本遺産「炭鉄港」関連商品（炭鉄港そば）のパッケージデザインの考案（令和3年度）
- ・地元企業と連携して、地元農作物等を活用した商品の開発（令和4年度予定）
- ・地域の特色を生かしたオリジナル商品の開発（令和5年度予定）

2 具体的な活動例（令和3年度）

(1) 夕張の歴史を学ぶ

「炭鉄港」関連商品のパッケージデザインを考案するにあたり、歴史的な背景や産業などについて知るため、合同会社小野農園代表 元澤 洋 氏（コンソーシアム委員）、夕張市石炭博物館館長 吉岡 宏高 氏による講話を実施した。講師との対話を通して、夕張の歴史についての理解を深めた。

(2) 購買意欲を高める工夫

パッケージデザインを考えるポイントを学ぶために、北の旅レシピ代表 村澤 規子 氏、空のアトリエグラフィックデザイナー 小菅 謙三 氏からご指導いただいた。

(3) パッケージデザイン製作

これまでの学習を踏まえ、4グループ（各グループ3名）に分かれて、試作品制作を行った。それぞれのグループが作成した試作品について、一般の方から意見を聴取するために、道の駅メロードにて、購買意欲を高めるデザインとなっているか、アンケート調査を行った。さらにアンケート調査の結果をもとにパッケージデザインの改善を行った。

(4) 完成披露会実施

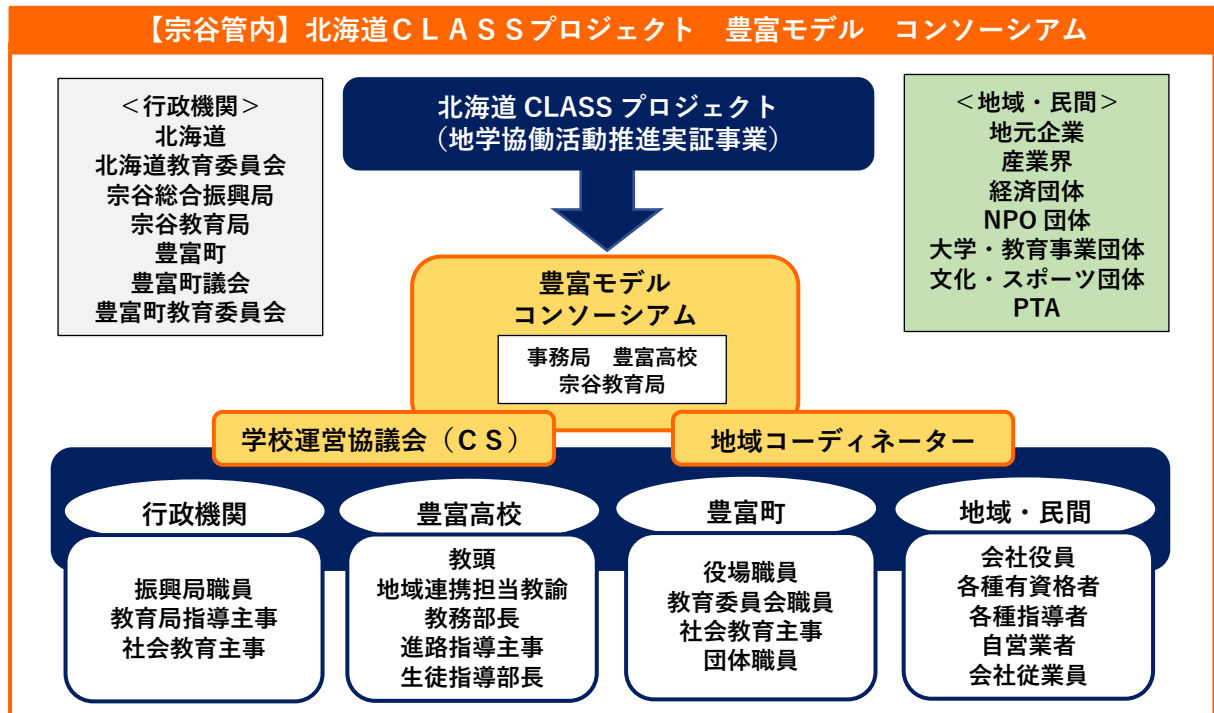
コンソーシアムの関係機関である夕張市教育委員会から施設の提供を受け、夕張市拠点複合施設「りすた」にて、夕張市民に向けて、「炭鉄港」関連商品のパッケージデザインの完成披露会を実施した。また、地元菓子店と生徒が共同開発したそばクッキーとそば茶で来場した市民をもてなした。

(5) 取組報告会実施

次年度、この取組を引き継ぐ2年生と、コンソーシアム委員に、今年度の取組について報告を行った。

【3-6】コンソーシアムの具体的な取組⑥（豊富高校の例）

豊富高校では、令和3年度から「北海道CLASSプロジェクト（地学協働活動推進実証事業）」の連携校として、コンソーシアム組織を構築し、地域と連携・協働した探究学習を推進している。



1 活動内容

- ・生徒が地域課題を見出し、課題を解決するために、地域と学校が連携・協働した探究活動を考案・実施する。
- ・地域の新たな価値の創造へつなげるため、学校と地域が課題を共有し、解決に向けて協働した取組を推進する。

2 具体的な活動例

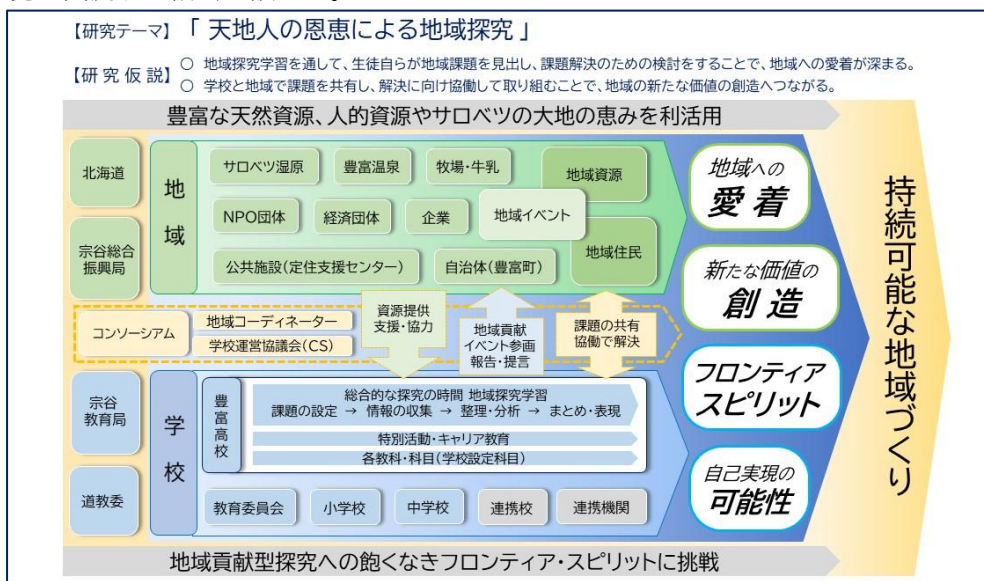
・探究成果発表会・意見交流会

令和3年12月17日（金）に全学年で探究成果発表会を実施した。豊富町長、豊富町教育委員会教育長、学校運営協議会委員、コンソーシアム構成員、町内小・中学校管理職・教員、保護者が参加した。

成果発表会の後、参加者を7グループに分けて意見交流会を実施し、成果発表会について講評をいただき、共通のテーマについて、参加した大人と生徒が意見を交流する機会を設けた。

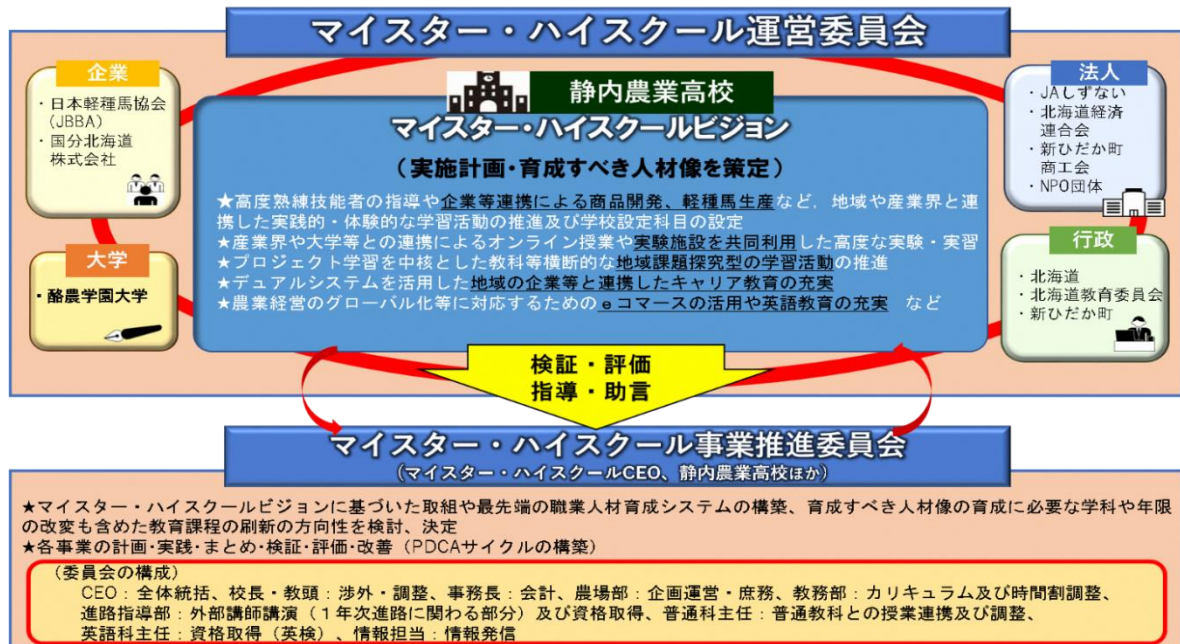


探究成果発表会



【3-7】コンソーシアムの具体的な取組⑦（静内農業高校の例）※取組概要図等は6～7ページ参照。

静内農業高校では、軽種馬、野菜生産や食品加工など、特色ある日高管内の農産業の実践を通して、地域産業の課題解決の一助を担うとともに、地域と産業の持続的発展を牽引する地域発次世代イノベーターとしてのマイスター育成に取り組むなど、地域と連携・協働した教育活動の充実を図っている。



1 活動内容

- ・高度熟練技能者による指導や企業等と連携した商品開発や軽種馬生産など、地域人材や地域の産業界と連携した実践的・体験的な学習活動の推進及び学校設定科目の設定
- ・プロジェクト学習を中核とした教科等横断的な地域課題探究型の学習活動の推進
- ・デュアルシステムを活用した地域の企業等と連携したキャリア教育の充実
- ・地域や小・中学校と連携した教育活動など、異年齢集団による活動の推進
- ・オンライン授業や実験施設を活用した高度な実験・実習など大学等との連携・協働
- ・農業経営のグローバル化等に対応するためのeコマースの活用や外国語教育の充実

2 具体的な活動例

(1) 食のマーケティング (食品科学科)

科目「総合実習」において、日糧製パン株式会社営業本部マーケティング部長による「企業が取り組むマーケティング活動」について講義を行った。生徒は、商品の企画からプロモーションまでの一連の流れ等、商品開発に関する知識等について理解を深めた。

(2) eコマースによるビジネスモデルや食品輸出に関する学習 (食品科学科)

科目「食品流通」において、農業分野において必要性が高まっている「eコマース」について、ヤフー株式会社の通販サイトを活用し、情報発信や販売の方法等を学んだ。その後、ヤフー株式会社SR推進統括本部関係社員と協働してカリキュラム開発を行うとともに、現在、新ひだか町観光協会の協力の下、ネットショップ開設の準備を進めている。また、ソフトバンクグループで食品の輸出を担当するウマミール株式会社社員による「インターネットを活用した食品の輸出や電子商取引」についての講演を実施し、生徒は、食品の輸出の将来性や具体的な取組事例等について、理解を深めた。

(3) 地域園芸の特性と栽培技術の学習 (生産科学科園芸コース)

科目「野菜」において、北海道農政部生産振興局技術普及課担当者による、地域の主力農産物の栽培についての講義及び圃場で栽培しているミニトマト、ピーマン、デルフィニウムの観察実習を行った。生徒は、農産物の生育状況の診断方法や新しい栽培技術等について、理解を深めた。

(4) 馬の蹄に関する学習 (生産科学科馬コース)

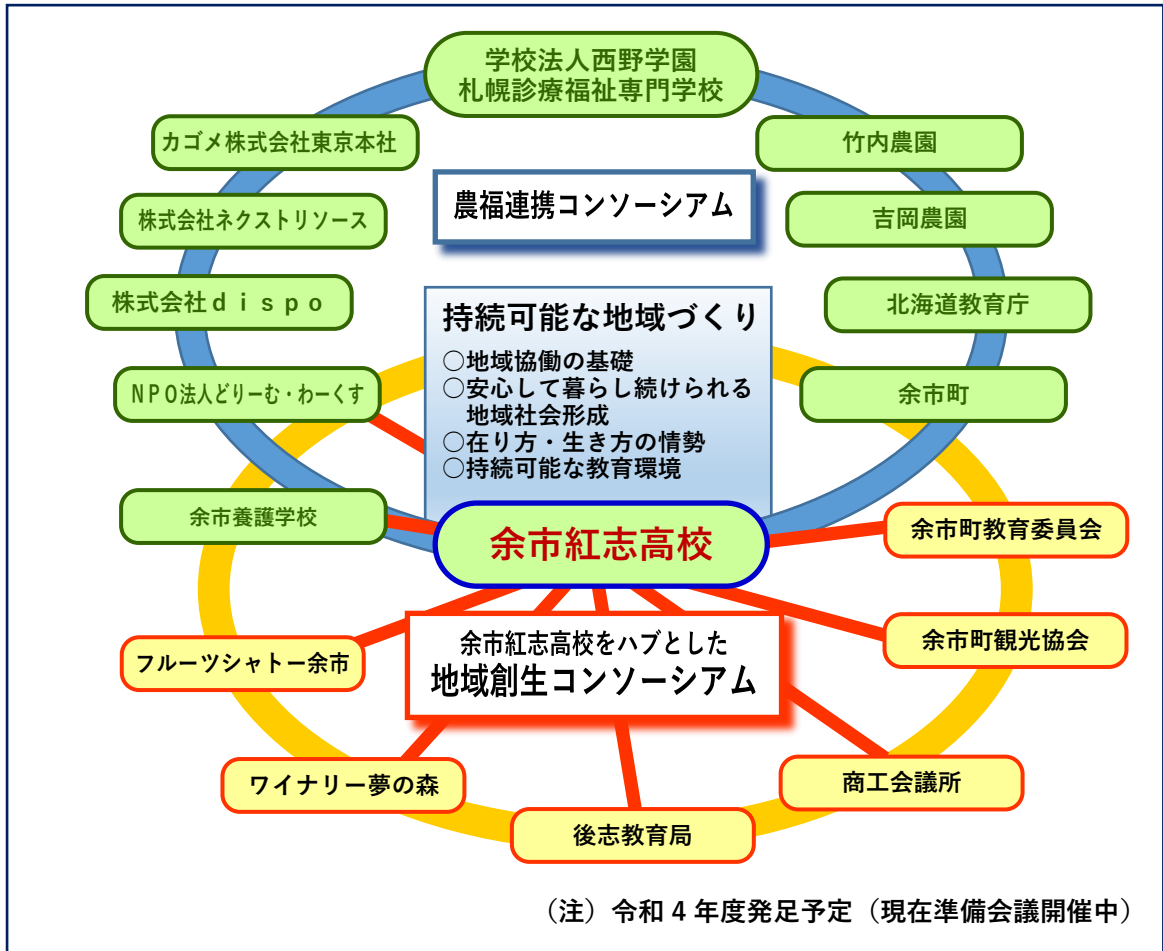
科目「馬学」において、日本軽種馬協会静内種馬場の装蹄師による「馬の蹄に関する授業」を計3回行った。生徒は、馬の蹄について、構造及び管理方法等の知識や、蹄鉄の脱着、端蹄 (はづめ) 廻し等の専門的な管理技術について、理解を深めた。

参照：手引 p.48



【3-8】コンソーシアムの具体的な取組⑧（余市紅志高校の例）

余市紅志高校では、「安心して住み続けられる地域づくり」並びに「地域から着目される特色ある食材づくり」を大きなテーマとして高専連携事業による「農福連携コンソーシアム」に参加したり、「地域創生コンソーシアム」の形成に着手したりするなど、地域人材や地域資源を活用した体験的な学習を通して目指す資質・能力を育てる教育活動の充実を図っている。



1 活動内容

- (1) 持続可能で誰もが安心して住み続けられる地域づくりのための農福連携活動
- (2) 地域から着目される食材としてのワインの生産、販売及び地域食材を使った食品開発

2 具体的な活動例

(1) 社会福祉士を育成する専門学校とのカリキュラム開発（農福連携コンソーシアムへの参加）

農福連携に重点化した社会福祉士を育成する専門学校の学生と本校生徒とが合同のワークショップを開催。就業支援の考え方など視野を広げるとともに、本校生のキャリア教育に係る資質・能力の育成を図っている。

今後は、本校の食品加工室や農場等において、余市養護学校の生徒、専門学校の学生とともに食品加工や作物栽培の実習を実施する予定。

(2) 余市紅志高校をハブとした関係者、関係機関とのコンソーシアム形成（令和4年度）

これまで実施または計画を進めてきた各関係機関等との取組を関係者間で横断的に認知し、点と線をつなぐ活動から面を形成する取組となるよう、本校を中心としたコンソーシアムづくりに着手した。

○余市養護学校とのコラボレーション（本校のジャムと余市養護学校生徒による木製スプーンのセット販売）＜余市養護学校・観光協会・NPO＋高専連携事業＞

○老人介護施設職員との年間を通じたワークショップや介護体験等の実施＜フルーツシャトー余市・余市町など＞

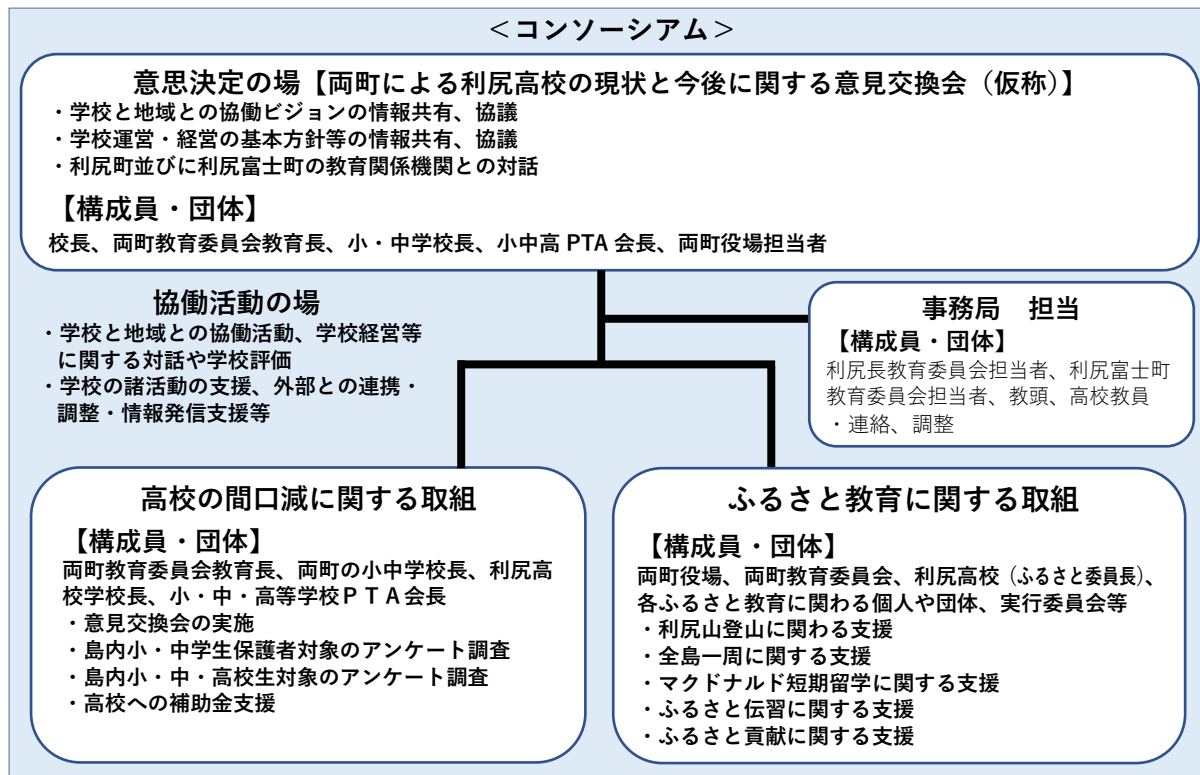
○観光農園のバリアフリー化計画＜観光協会・養護学校・余市町など＋高専連携事業＞

○ワイナリーと連携した高校生によるワインの製造・販売及び成人式での記念品等の活用＜ワイナリー夢の森・観光協会・商工会議所・余市町など＞

○北後志の文化、歴史、スポーツなどの要素との連携、町内施設活用のサポート＜教育委員会＞

【3-9】コンソーシアムの具体的な取組⑨（利尻高校の例）

利尻高校では、「離島だからこそできる特色ある教育活動」として、全島一周や利尻山登山などに取り組むふるさと教育について、地域（利尻町及び利尻富士町）と連携・協働した教育活動の充実を図っている。



1 活動内容

- ・地域・保護者と連携した「利尻山登山」
- ・悠遊覧人Gへの参加による「全島一周」

※悠遊覧人Gとは、ゆったりと楽しみながら、自然を広く見ながら、走る人のこと

2 具体的な活動例

(1) 利尻山登山

利尻山への登山を通じて、その魅力を理解・体験し、「ふるさと利尻島」を愛し、誇りに思う気持ちと広い視野をもち、その魅力を後世に伝えることができるようにするとともに、「如何なる困難にも打ち克つたくましい心と体」と「純粹で人情味ある豊かな心」を向上させることを目的としている。

令和3年度は、利尻山山岳会、利尻町、利尻富士町、利尻島国保中央病院の協力を得て、7月22日(土)に実施した。参加生徒は全校生徒64名のうち33名が登頂を目指し、約5時間程度の時間をかけ、26名が山頂に到着した。山頂にある祠に3学年全員の名前と進路や将来の夢を書き込んだ絵馬を奉納した。



利尻山登山

(2) 全島一周

利尻の海や山を見ながら、全島を一周することで、利尻島のよさを再発見し、郷土愛を育て、ゆっくり楽しく走ることの楽しさを知り、利尻の発展に寄与する悠遊覧人Gの在り方について考えることを目的としている。

令和3年度は、コロナ禍のため大会が中止となったが、利尻島一周悠遊覧人G実行委員会の協力を得て、WEB版で開催した。生徒は、島一周と同じ53kmを目標に、通信機器に計測できるアプリを活用し、開催期間内のランニングを記録した。全校生徒64名のうち35名が完走賞を手にした。



全島一周

【3-10】コンソーシアムの具体的な取組⑩（湧別高校の例）

参照：手引 p.73

湧別高校では、湧別町とともに「湧別高校魅力化」に取り組んでおり、探究学習である「未来計画」、特色ある教科・科目による「郷土愛」学習、ボランティアや交流活動による「地域参画」の3つの柱に取り組むなど、地域と連携・協働した教育活動の充実を図っている。

1 活動内容

コンソーシアム（湧別町、教育委員会、湧別町商工会、各協同組合、北海道教育委員会などの構成団体）によるカリキュラム開発（地域との協働による探究的な学びの実現）に関する検討・意見交換、事業実施に向けた連携・支援が主な役割として年2回開催している。また、構成団体で組織する運営指導委員会を設置し、定期的な開催により事業を把握するとともに、具体的な活動の実施状況の検証と改善への検討を行い、報告をしている。



コンソーシアム会議の様子

2 具体的な活動例

(1) 未来計画

①「自らの興味・関心に従い課題を見つけ、課題解決のための力を養う」、②「試行錯誤する過程でPBLを体験し、課題解決する力を養う」、③「自身の課題を地域と結び付け、地域へのつながりを強める」、という目標に対し、全学年が課題解決に向けた意見交換や議論を行うことにより、対話する力の育成を図っている。また、上級生がこれまでに実践してきた課題解決に向けた取り組む姿勢を下級生にも伝えていくことで、地域とのかかわりをより深め、地域の良さなどの気づきにつなげる取組となっている。

(2) 郷土愛学習

①科学と人間生活（第1学年）

地域の特産物や農業体験などを通して地域の歴史や文化に触れ生活に密着した身近なものとしてとらえる。[例：特産品の解剖、農作業体験など]

②北海道学（第2学年）

歴史、地理、文化、産業などの北海道の魅力や個性について幅広く学び、基礎知識を醸成する。また、取組みの過程で基本的な手法を定着させ、協働的に探究する姿勢を身につける。[例：文化財巡検(産業ポスター作成)、北海道新聞出前講座など]

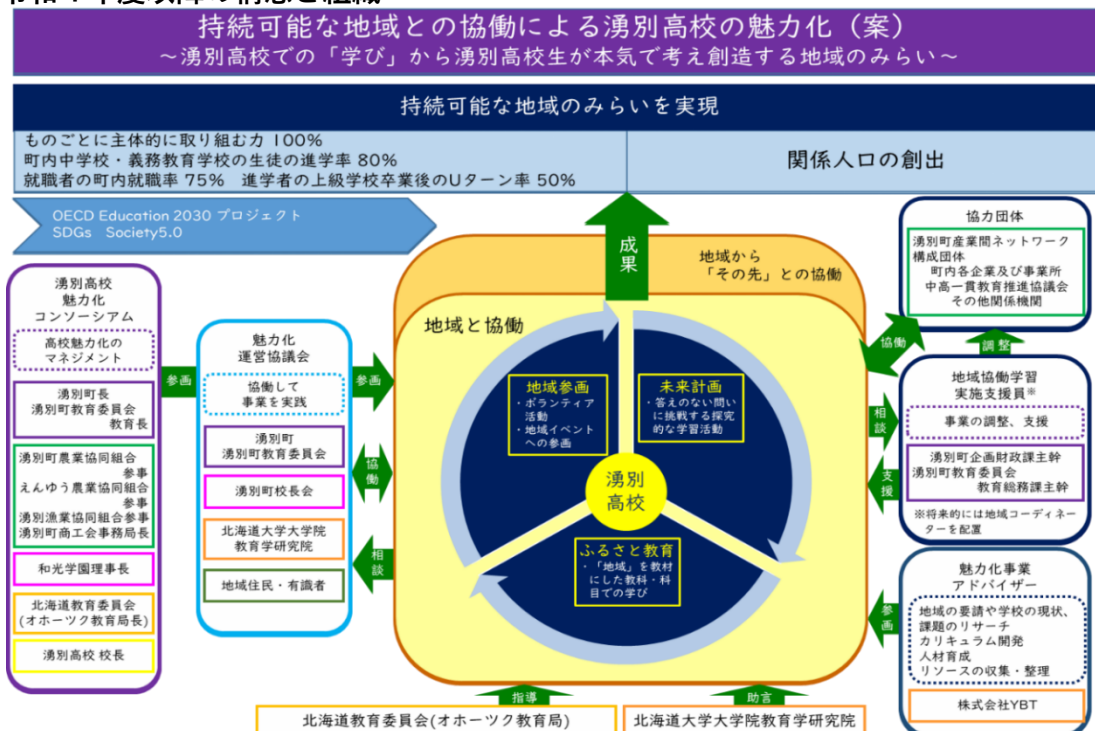
③地域と生活（第3学年）

地域の文化・自然などの体験的学習を通じて学ぶとともに、地域生活について主体的に考え、将来の生活確立に向けた知識・技術・活用する力を身に付ける。[例：特産物(ホタテ)を学ぶ、染め物(フェリッパ・たまねぎ)、服のチカラプロジェクト(SDGs)]

(3) 郷土参画 ～ボランティアや交流活動～

本校の教育活動を支える湧別町の方々に奉仕する機会を設けることで、町の発展に貢献し、地域を支え、地域に支えられる学校運営を目的に町民の厚意への謝意を示すとともに、生徒が地域住民にどのような期待が向けられているかを知る機会としている。

※令和4年度以降の構想と組織



【4-1】地域コーディネーターの具体的な取組①（当別高校の例） ※取組概要図は4ページ参照。

当別高校では、「北海道CLASSプロジェクト（地学協働活動推進実証事業）」を活用して、地域と連携・協働した地域課題探究型のキャリア教育を推進している。

持続可能な地学協働活動の実現に向けたコーディネート機能を充実するため、地域コーディネーターの選定に当たっては、当別町教育委員会と連携を図り、地元青年会議所において「まちづくり」のイベントや取組を行っている会社役員に依頼した。

1 活動内容

- (1) 本校職員の地域と協働して実施したい学習内容の把握
- (2) 生徒と地域の大人が協働した学習プログラムの準備
- (3) 本校の教育活動に協力してもらえる地域住民の発掘・調整
- (4) 学校の広報活動を支援する取組

2 具体的な活動例

(1) 教諭との面談の実施

「総合的な探究の時間」を活用した地域課題探究型のカリキュラムの構築に向けて、本校教諭が地域と協働して実施したい学習内容や実施に向けた困り感を把握するために、教諭一人ずつと面談を実施した。教諭との面談を実施した結果、地域課題探究型のキャリア教育の推進に向けた共通理解を図りながら、学習プログラムを準備した。

(2) 当別開拓の歴史

「まちを知る」ことをテーマに、本校1年生（普通科、園芸デザイン科、家政科）を対象に、当別町の歴史を知るプログラムを実施した。講師には、当別神社の宮司さんに依頼し、日程及び内容の調整を行った。



当別開拓の歴史①



当別開拓の歴史②



家政科生徒による試作メニューの試食

【4-2】地域コーディネーターの具体的な取組②（下川商業高校の例）

下川商業高校では、生徒が地域の課題に向き合い解決するための資質・能力を身に付けるため、下川町教育委員会が任用する地域コーディネーターを活用し、学校と地域が一体となって総合的な探究の時間に取り組むなど、地域と連携・協働した教育活動の充実を図っている。

1 地域コーディネーターの役割

- (1) 学校と地域のニーズを把握及び関係機関との連絡調整
- (2) 総合的な探究の時間の実施に向けた情報の収集と発信
- (3) 総合的な探究の時間の活動内容への提案や支援

2 具体的な活動例

(1) 総合的な探究の時間（課題研究代替）

総合的な探究の時間において、地域コーディネーターは、地域の教育資源を活用した活動の充実を図るため、学校と地域をつなぐ役割を担っている。

下川町には地元出身の若手経営者や道外から移住した企業家など、新規事業への挑戦や、町づくりに取り組む方が多く住んでいることから、地域コーディネーターは、地域資源の活用に向けた情報収集、授業の充実に向けた講師の選定、探究活動の実施に向けた関係機関との調整等を行っている。

学校は、年度当初に、担当教員とオンラインや対面形式で打合せを行い、授業計画を作成する。

(2) 今後の活動予定

令和4年度から、地域コーディネーターが学校に週1回常駐し、さらに地域と連携・協働した教育活動の一層の充実を図る予定である。

(取組予定)

- ・ インターンシップでの連携
- ・ 学年ごとの地域研修のプログラム作成
- ・ 学校と地域が連携した活動の情報発信
- ・ 地域学習に係る講師の選定
- ・ 地域行事参加に向けたプランの作成



町内で活動を伝える様子



地域学習発表会

【5-1】中学校と高校が連携した教育活動（浜頓別高校の例）

浜頓別高校では、浜頓別町の中学校と連携して、「主体的・対話的で深い学び」を実現に向けた授業改善に取り組むために、地域と連携・協働した教育活動の充実を図っている。

浜頓別町立浜頓別中学校で実践している「学びの共同体」の授業を参観し、中学校長を講師に招いた「学びの共同体」を実践するための校内研修を実施している。また、中学校と高校の数学科では、「中高交換授業」として、中学校教諭が高校1年生に、高校教諭が中学校3年生に授業をそれぞれ実施し、校種間連携を図っている。

1 具体的な活動例**(1)相互授業参観**

浜頓別高校と浜頓別中学校で相互の公開授業に教員を派遣し、授業の様子や展開の仕方、学ぶ子ども達の様子等を観察し、自らの授業改善に繋げた。



高校教諭による中学校での授業の様子

(2) 交換授業

浜頓別中学校の数学科教諭が浜頓別高校1年生に対して数学の授業を実施した。高校に進学したばかりの生徒たちの成長を実感するとともに、高校での学びについて中学校教諭が理解を深めた。

また、浜頓別高校の数学科教諭が浜頓別中学校で中学3年生を対象に数学の授業を実施した。中学校の指導の現状や生徒の状況を把握するとともに、今後の指導の工夫などに活かす材料を集めた。

(3) 校内研修

浜頓別中学校で立ち上げ、推進してきた「学びの共同体」において、生徒同士の協働的な学びの現状について講話いただき、浜頓別中学校の教員も交えた校種間の意見交流ができた。



中学校長を招いた研修の様子

2 成果

- ・中学校と高校の学びの繋がりを強化することができた。
- ・中学校から高校卒業までの生徒の学びを意識することができた。

【6-1】高大連携事業による地域の魅力創造の取組（天塩高校の例）

天塩高校では、4年前から筑波大学と連携し、人材育成や地域の魅力創造に貢献する生徒の育成に取り組んでいる。

1 ねらい

筑波大学と連携し、地域活性化案を発信することで、地域の魅力創造に貢献する。

2 実際の取組**(1) 天塩まちづくりシンポジウム（11月1日2日・天塩高校体育館）**

本校2年生43人と筑波大学の学生10人がグループに分かれ、1日目は町内視察やワークショップを行い、2日目は考案したまちづくりアイデアプランを発表した。

〔主な提言内容〕

- ① 天塩産アンコウの商品化と近隣地域の特産品を使った料理バトル企画
- ② 保護猫活動の取組と猫カフェを融合した保護猫カフェ
- ③ 電動自転車を使った天塩川河川公園などを巡るツアー
- ④ 主に夜間営業する居酒屋による昼間の若者・学生向けカフェ



天塩まちづくりシンポジウム

(2) 高大連携シンポジウム（1月9日・オンライン開催）

天塩高校を含む全国5校の高校生が地域活性化のアイデアなどを提言した。天塩高校は、(1)の提言の中から①と③のグループが代表して発表した。



高大連携シンポジウム

3 成果

- ・生徒からは、「もっと天塩について考えたくなった」、「考えた案をさらに進めたくなった」などの声があがり、地域創生に対する意欲の高まりが見られた。
- ・1年生も参加したことにより、自分たちが行っている総合的な探究の時間の充実につなげることができた。

【6-2】高校生が主体となった地域の魅力発信の取組（苫前商業高校の例） 参照：手引 p.69

苫前商業高校では、町教委主催のボランティア活動への参加や、町のイベント活動に積極的に協力するとともに、町の特産物の販売や観光のPR活動により地域の振興・発展に貢献することを通じて、地域に対し自ら主体的に考え取り組む生徒の育成を行っている。

1 取組に至るまでの経緯

- ・町の「未来ビジョンミーティング」に生徒が参加し、地域の諸課題について地域住民たちと意見交換を行った。
- ・この交流をきっかけとして、生徒の中に町に対する帰属意識や愛着心が芽生え、地域の魅力を高めるために自分たちができることは何かを考えるようになった。
- ・町おこし団体や町教委との連携により、生徒自らが自転車ツーリング事業を企画・実施した。

2 実際の取組

【自転車ツーリング事業】

強い精神力・体力を養うとともに、地域の魅力をインスタグラムで発信することをねらいとして、7月27日から29日、本校生徒9名が総距離220kmを走破した。

また、事業に参加した生徒による「自立しない自転車の置き場が少ない」という気付きから、生徒が主体的にアイデアを出し、自転車ラックの作成、設置場所を決めるためのワークショップ、周遊観光ルートの協議等を行った。



完走時の様子



自転車ラックの作成

3 成果

- ・産官学が協力し、サイクルツーリズムの振興による地域の活性化につながった。
- ・生徒のコミュニケーション能力や地域創生に対する思いが高まった。
- ・生活に根ざした探究活動により、生徒に自主性が身に付いた。
- ・生徒の成長や変容を見た町民からは、将来地域で活躍する若手人材としての期待が高まった。

【6-3】見学旅行との関連を図った総合的な探究の時間の取組（芽室高校の例）

芽室高校では、2学年の総合的な探究の時間において、見学旅行との関連を図った単元計画を作成し、SDGsの視点を踏まえた探究活動に取り組んでいる。

1 見学旅行との関連を図った総合的な探究の時間の単元計画

小単元	時期	時間	形態	内容
事前学習	7月	1～3	授業	RESASを活用し、意見文を書く (RESASの使い方、分析の仕方を学ぶ)
小単元1	7月	1～2	講話	SDGsを知ろう(概要、北海道の取組など)
小単元2	7～8月	1～2	授業	事前レポートの作成 (SDGsの17の目標の観点から北海道の現状・課題について調査・分析する)
			個人	
小単元3	8～9月	3～4	授業 班毎	研修内容の決定 (班をつくり、「環境」「社会」「経済」の中から班のテーマを選び、見学旅行先で何を見てくるかを決める)
小単元4	10月下旬	見学旅行		
小単元5	11月	2～3	授業	クラス発表の準備
	11月	1	授業	クラス発表
	11月中旬	1	全体	全体発表

2 具体的な活動

- ・事前学習
RESAS(地域経済分析システム)を使用し、分析の仕方や論理的な思考方法について学ぶ。
- ・小単元2
SDGsの17の目標の観点から、北海道の課題や現状について調査・分析を行い、仮説を立て、RESAS等のデータを活用し、課題に対して個人でできることなどを考察するレポートを作成する。
- ・小単元4
見学旅行の中で、旅行先である岡山県のSDGsの取組について講演を聴き、北海道と岡山県の取組を比較することで、SDGsの実現に向けて考えを深める。



見学旅行先で講演を聴く様子

【6-4】単元「南幌学」（南幌高校の例）

南幌高校では、地域の良さに気付き、地域に貢献できる人“財”育成をめざす単元「南幌学」を実施し、ふるさとキャリア教育の充実を図った。

1 目標（南幌学）

多面的な視点から地域を見つめ直し、地域の持つ良さに気付くとともに、将来それぞれが住む地域のまちづくりに貢献できる人“財”の育成を図る。

2 内容（南幌学）

見学旅行での姉妹町（熊本県多良木町）訪問に向け、姉妹町で次の2つの企画を発表するべく準備を進めた。

- (1) 私たちが選んだ南幌町 Best20（個人ワーク）
- (2) 多良木&南幌コラボメニュー（グループワーク）

3 実施学年・単位数

第2学年：1単位（総合的な探究の時間）

第3学年：1単位（産業社会と人間）

4 学習計画

小単元	時数	主な学習活動
オリエンテーション	4	○オープニング(1) ○想像してみよう!(1)〔課題の自分ごと化〕 ○南幌町チェックをしてみよう!(1)〔現状認識・目標設定〕 ○はじめの一步を踏み出そう!(1)〔ゴール設定〕
事前準備	5	○冬休みに向けて(1)〔チームビルディング〕 ○発表!南幌町のいいところ!(1)〔担当決め〕 ○発表内容を考えよう!(1)〔作戦立案〕 ○話し方講座(2)〔プレゼンテーション能力の向上〕
レシピ作成	9	○熊本県・多良木町特産物試食会(2) ○グループワーク(5)〔ポスター・レシピ・スライド作成〕 ○レシピ試作会(2)
Best20 スライド作成	6	○作戦会議(1)〔発表内容の確認・アドバイス等〕 ○個人ワーク(5)〔スライド作成・ナレーション録音〕
報告会	6	○各班発表練習(1)、デネプロ(1) ○南幌学成果発表会(2) ○見学旅行での講演会(1)(市民団体“クスろ”・釧路市) ○シェアリング・表彰(1)

5 具体的な活動（南幌学）

(1) 「自分ごと」としての取組にするための工夫

すべての活動が「自分ごと」となるよう、目標設定に時間を十分にかけるよう配慮した。姉妹町で、南幌町についてのプレゼンテーションを行うことによって、多良木町・南幌町にどのような変化が起きると望ましいかを考えさせ、考えたことをシェアすることが、「自分ごと」として取り組む姿勢につながった。

(2) 外部講師による話し方講座

人前で話すことに苦手意識を持つ生徒が多いため、フリーアナウンサー 青山 千景 氏を講師に話し方講座を2回実施した。テレビで活躍する現役アナウンサーから指導いただけたことで、「自分にもやれるかもしれない」という生徒の自信につながった。

(3) 生徒が楽しみながら取り組めるようにする工夫

生徒のリクエストも取り入れながら、熊本県または多良木町の特産物を取り寄せ、調理し、試食会を行った。北海道とは違う食文化に触れる良い機会となった。また、各班が考えたコラボメニューを実際に作成してみる試食会を実施した。

(4) 新型コロナウイルス感染症への対応

感染防止の観点から、姉妹町への訪問は断念せざるを得なくなった。見学旅行の行先を道内に変更する際、南幌学の目的である「将来それぞれが住む地域のまちづくりに貢献できる人“財”の育成を図る」観点から、ユニークなまちづくり活動に取り組んでいる釧路市の市民団体「クスろ」の講演を取り入れた。

姉妹町での発表はかなわなかったが、南幌町で発表会を実施した。町の関係者から大変好評をいただいた。特に Best20 の映像は、町内に長年住んでいても気づかない町の良さを教えてくれたと好評をいただき、地域の会合でも上映された。



【6-5】学校設定科目「地域研究」（札幌あすかぜ高校の例）

札幌あすかぜ高校では、令和2年度から、地域全体を学びの場とする学校設定科目「地域研究」を開設し、課題解決型の教育活動を展開している。

1 目標（地域研究）

- (1) 地域に関する学習を通して、生活圏である「北海道」や「札幌」等を含め、日本について理解を深化する。
- (2) 自ら課題を設定し、その解決に向けて取り組むことを通して、主体性を育む。
- (3) 調べたり考察したりした成果をまとめ、発表することにより、地域について理解を深め、地域を支える人材を育成する。

2 内容（地域研究）

- (1) テキスト（プリント）を活用し、北海道の地形・歴史・文化・交通・産業等について理解を深める。
- (2) 札幌市全体や手稲区、日本についてのテーマを設定し、各自の端末を活用して調査するとともに、調査した内容をテキストにまとめる。
- (3) 現地見学や野外調査などのフィールドワークを行う。
- (4) 出前授業を活用し、基礎的な知識等を習得する。
- (5) 具体的な研究テーマを設定し、ペアワークやグループワーク等を実施する。
- (6) 後期はグループ研究とプレゼンテーションを実施する。

3 実施学年及び単位数

第3学年（2単位）

4 学習計画（地域研究（2単位））

単元	時数	主な学習活動
オリエンテーション	1	・学習の流れについて確認する ・目標や目的の確認を行う
北海道の地形・歴史・文化	15	・講義 ・パソコン・スマートフォンを活用し調べ学習をする
札幌市・手稲区を調べよう	13	・インターネットや図書館を活用し、地域について基礎知識を得る ・出前授業を受講し、地域の環境について学習する ・グループワークにより、より地域の理解を深める
研究テーマ設定、地域見学、野外調査	11	・グループで、研究テーマについて話し合い、決定する ・決定したテーマに基づき、調査方法を確認する ・地域見学について、事前連絡が必要か確認する
グループ研究	17	・グループ研究①調査 ・グループ研究②まとめ ・グループ研究③再調査・修正 ・グループ研究④プレゼン資料づくり
報告会	13	・グループ研究⑤プレゼンテーション ・グループ研究⑥評価 ・グループ研究⑦まとめ

5 具体的な活動（調査研究例）

調査対象は「生活に関わること」とし、地域の課題を確認するとともに、他の地域の解決方法等を参考にしながら、地域の解決方法を考察していく。論理的に正しいかを考え、図解・表現方法などの工夫を行い発表する。

(1) テーマ1

生活圏にある「札幌市」、特に手稲区近辺に関わる情報を調査

(ア) 内容については、各グループで設定し、インターネットや図書館の活用、現地調査をする。

(イ) グループで、プレゼンテーションの準備をし、発表する。

(ウ) 自己評価および相互評価を行う。

(2) テーマ2

ア：SDGs イ：日本の取組状況 ウ：ジェンダー平等

(ア) 2週間で1本のレポートをWordで作成する。

(イ) プレゼンテーションの準備をし、発表する。

(ウ) 自己評価および相互評価を行う。

（調査テーマ例）

Sw（シングルワーク）

Gw（グループワーク）

①手稲の130年

を駆け足で

②前田の基礎をつ

くった大農場

③市場を賑わすサッポ

ロイロ・大浜みやこ

④手稲駅とその周辺

⑤手稲鉾山～鉾山の

泣き笑い

1. 左の①～⑤の中から
興味を持ったものを
1つ選ぶ

2. ゆっくり2回読む

3. 調査テーマを考える
（これは大事!!）

↓

担当の先生の70%以上
を採ろう。

4. 調査する

① インターネット

② 図書館

③ 聞き取り

④ 現地調査

5. まとめる

6. 発表（プレゼン）

<授業提示資料>

○ 感想・解決案

電気の節電をすることが私たちにできる一番簡単な解決策だと思う。私たち一人一人が省エネルギーに取り組むことが大事だと思った。家庭から排出される二酸化炭素のほとんどが、電気、ガス、ガソリンで、その使用料を減らせば、二酸化炭素の量を大きく減らすことができるということが分かった。

<生徒のまとめから>

○ 調査項目（利用者3位の理由）

手稲駅を利用する周辺人口が多く、バス路線も手稲駅を中心として構築されているため、周辺人口が都心にアクセスする場合必然的にJRに集中する。

○ まとめ

札幌市手稲区の中心駅であり、ほぼ全列車が停車する。周辺人口も多くバス路線も手稲駅を中心として構築されているため利用者が多い。また、学生の利用や周辺地域の人口増加や公共施設が集積しているため。

○ おわりに

手稲駅の利用客数は道内2位ではなく、道内3位だった。

<生徒のまとめから>

【6-6】総合的な探究の時間「OH My Project」（長万部高校の例）

長万部高校では、長万部町、さらには北海道や日本の将来を担う世代である生徒たちに、「町」の今後を考えるプロジェクトが発足し、教育活動を展開している。

1 目標（総合的な探究の時間）参照：手引 p.73

探究の見方・考え方を働かせ、地域や社会に人、もの、こと、自然に関する総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、適切で論理的な課題の発見と解決していくための資質・能力を育成することを目指す。

2 内容（OH My Project）

「SDGsの視点でまちをつくる」と題して、町内外で活躍する大学教授、企業家等から直接話しを聞き、課題の発見から解決までを目指します。生徒は4名～5名程度で構成されるゼミ形式で行う。

3 実施学年・単位数

第1学年：1単位（16時間）、第2学年：1単位（16時間）

4 学習計画（総合的な探究の時間：第2学年（16時間））（R2年度実績）

単元	時数	主な学習活動
ガイダンス	1	総合的な探究の時間で身に付ける力、「OH My Project」の流れ等について説明を受ける。
SDGsワークショップ	2	SDGsとまちづくりの関連性等について、SDGsカードゲーム地方創生版等を活用しながら考える。
長万部町の現状リサーチ	2	データ等を基に長万部町を客観的にみることで、まちの課題を捉えていく。
課題発見	2	長万部町の現状を理解したところでKJ法等を用いながら課題の洗い出しを行う。
まちづくりカンファレンス	1	まちの方をはじめとした外部の方からお話しを聞く中で、課題に対する自分なりの解決法を考えるきっかけとする。
具体的解決法の検討	2	まちづくりカンファレンスを振り返り、課題解決の具体を検討する。
発表の準備	3	課題解決について検討した結果を、長万部町内の小中高合同発表会において発表する。そのための準備と課題解決の内容を磨く。
小中高合同発表会	2	研究成果について発表し、地域の方々との議論をする中で、課題解決を深めることをねらいとした小中高合同発表会を行う。
振り返り	1	1年間の総括と自己変容の検証、新たな課題を見だし、次の学びにつなげていくようにする。

5 具体的な活動（小中高合同発表会）

これまでの探究活動の成果を披露するとともに地域の方々と議論した。

課題解決を深めるために開催された令和3年度の「小中高成果発表会」では、長万部町以外からも、北海道教育大学函館校の齋藤准教授とZoomで結んで指導・助言を受けるなど、高校生にとって大変有意義な学習機会になった。

なお、この発表会は「全国高校生マイプロジェクトアワード」と連携した取組となっており、令和2年度は、地元食材を使ったおにぎりや餃子を考察したグループが全道大会へ進出した。

6 新幹線デザイン検討委員会の取組

令和12年（2030年）開通予定の北海道新幹線の札幌延伸にともなう長万部駅開業に向けて、新しい駅舎デザインコンセプトを「長万部高校生にも考えてもらうのはどうか」という長万部の木幡町長のご意向から、町の有識者に高校生が加わった「新幹線デザイン検討委員会」が設置された。

複数回行われた検討委員会では、新青森駅の視察や青森西高校との交流、長万部町新幹線推進課との協議等を重ね、令和4年1月31日、本校生徒7名が「湯けむり香る噴火湾、人と時代の交差点」というデザインコンセプトを、町長へ答申した。



校内発表会



高齢者疑似体験



地域の方との試作・試食・合評会



町長への答申

【6-7】学校設定科目「函館学」地域探究学習（市立函館高校の例）

市立函館高校では、本校の人間性を育てる伝統を継承・発展させるため、郷土の歴史を受け継ぎ、未来を拓くために、生徒が地域の現実や未来に関心をもち、自分たちがそれを実現させていくという当事者意識をもたせるため、学校設定科目「函館学」の中で、「地域探究学習」を展開している。



1 目標（学校設定科目「函館学」）

国際性と進取の精神をもつ郷土函館の歴史・文化・産業・自然・人物・地域課題等について学ぶことで、豊かな教養を身に付けるとともに、社会における自己の役割を再認識し、地域の振興に向けて、自ら課題を見だし、よりよく問題解決する資質・能力を育てる。

2 内容（地域探究学習）

地域に飛び出し、地域のもつ力、それを支える方々の力を肌で感じ、3年間に渡る主体的な学びの礎にすることを目標に地域探究学習に取り組んでいる。学校外で市民向け等に関講されているワークショップ等40を超す講座から生徒が自分の興味関心、進路希望などを基に選んで受講する。



3 実施学年・単位数

1年次において、必修である函館学の1単元として、事前事後学習とあわせて14時間相当の学習を課している。なお、2、3年次生も参加可能としている。2、3年次で履修した函館学の他の単元と合わせ、35時間分の学習が認められた場合は、函館学の追加単位として認定している。

4 学習計画

（講座に参加してレポートを作成することにより学習を認定。下表は講座の一部で、令和3年度は45講座開講）

講座の名称	講座の運営主体
街づくりワークショップを美大生と行う	森町・武蔵野美術大学
東大生とサイエンスショーを企画・運営する	サイエンスサポート函館
新聞を作ろう～地域新聞社の研究	函館新聞社
「道南経済レポート」の作成と企業訪問 （新型コロナウイルスが函館経済に与えた影響を見てみよう）	函館財務事務所
法教育プログラム	函館地方検察庁
函館市・道南地域のNPOの分析	函館市まちづくりセンター
函館キッズプラザ スタッフ体験	函館キッズプラザ
気象庁ワークショップ（経験したことのない大雨その時どうする？）	函館地方気象台
函館が生んだ文学者達についての学習	函館市文化・スポーツ振興財団
野外劇への参加	函館野外劇の会

5 学校と地域の関係性

この「地域探究学習」は、あくまでもきっかけづくりという位置付けで考えている。この学習経験から地域の魅力を再認識し、将来地元に戻り、地域に貢献する人材として還ってくる可能性も生まれる。最終的には「地域探究学習」を含めた「函館学」自体が地域に貢献できるものとしていきたいと考えている。

※講座の集め方

講座の開拓は本校が実施している。各事業所に地域探究学習のねらい等を説明し、ご理解をいただいた事業所と打合せを行い、講座を作り上げていく。また、事業所で既に実施されている講座、あるいは企画されているワークショップなどを地域探究学習として利用させていただいている場合もある。



【6-8】学校設定科目「稚内学」（稚内高校の例）

参照：手引 p.77

稚内高校では、地域全体を学びの場とする学校設定科目「稚内学」を開設し、地域の歴史や文化、地理的な特徴を学ぶ教育活動を展開している。

1 目標（稚内学）

稚内市の地理的特徴や発展の歴史、文化的特徴に関する基礎的内容を学習することにより、郷土に対する理解を深め、郷土に対する愛情と貢献意識を高め、地域の担い手となる人材の育成を図る。

2 内容（稚内学）

稚内地域に対する過去・現在・未来への理解と思考の到達度を推し量る「稚内観光マスター検定（初級）」の取得や郷土研究テーマ（自然・歴史・文化・産業・観光・樺太関連・アイヌ民族及び北方民族関連・地域医療問題の領域）に係る研究調査を行っている。

3 実施学年・単位数

第1学年：1単位(35時間)

4 学習計画（稚内学（1単位））

期	月	時数	主な学習活動
前期	4 5 6	9	事前指導、オリエンテーション 稚内市の概要、地勢、風土、気候及び観光 宗谷岬周辺及び稚内空港周辺の史跡、施設について 前期中間考査
	7 8 9	8	稚内市内及び稚内公園周辺の史跡、施設について ノシャップ岬周辺の史跡、施設について 稚内西海岸、稚内港について 稚内のイベントについて、交通アクセスについて 前期期末考査
後期	10 11 12	11	稚内の味覚について、稚内の植物、動物、産業について 稚内観光マスター検定対策（放課後講習等実施） 稚内観光マスター検定総括 郷土研究（テーマ設定）、郷土研究（聞き取り調査） 郷土研究（発表資料作成）、外部講師講演会
	1 2 3	7	郷土研究（発表資料作成）、郷土研究（発表練習） 郷土研究発表会、 外部講師講演会、まとめ



授業「稚内学」の様子



5 具体的な活動

講師は、教科を限定せず、職員の中から担当を決めて授業展開した。また、授業内容のポイントに応じて年4回程度外部講師を招いて出前講座や講演会を実施した。

さらに、自分たちの稚内地域に対する過去・現在・未来への理解と思考の到達度を推し量ることができる「稚内観光マスター検定（初級）／稚内観光マスター推進委員会発行」の合格を1つの指標として設定している。

11月以降は、郷土研究テーマ（稚内の自然、稚内の歴史、稚内の文化、稚内の産業、稚内の観光、樺太関連、アイヌ民族及び北方先住民族関連、地域医療問題の領域）を設定し、各グループに分かれ、聞き取り及び研究調査を実施した。

3月に、その成果を郷土研究発表会として全校生徒、保護者及び地域の方々に向けてプレゼンテーションを行った。

評価の観点を次のとおり設定し、4観点、前期定期考査及び稚内観光マスター検定試験の結果など客観的材料、フィールドワークに望む姿勢やグループワークでの協働的な関わり、レポートの完成度、郷土研究発表会での発表内容等、多面的多角的に評価している。

<評価の観点>

【関心・意欲・態度】

地域理解の必要性を重視し、積極的に授業に取り組むことができる。

【思考・判断・表現】

地域の歴史と現状を知ること、今後の稚内の在り方について積極的に考えることができる。

【技能】

地域の諸問題についての的確に理解し、それを他者へ的確に説明することができる。

【知識・理解】

稚内の歴史、風土、文化、産業に関する幅広い知識を得ることができる。



稚内観光マスター初級合格証書を手にして喜ぶ生徒



郷土研究発表会プレゼンテーションの様子

【6-9】学校設定科目「弟子屈探究」（弟子屈高校の例）

弟子屈高校では、地域全体を学びの場とする学校設定科目「弟子屈探究」を開設することで、地域と連携し、地域の資源を生かした持続可能な探究活動を目指す教育活動を展開している。

1 目標（弟子屈探究）

弟子屈町の歴史、文化、自然、環境、産業などを総合的に学び、郷土に対する理解と愛情を深めるとともに、一人一人に自己の在り方生き方及び郷土との関わり方について主体的に考察させ、豊かな地域社会を築くために積極的に寄与する意欲と態度を育てる。

2 内容（弟子屈探究）

「郷土愛」をテーマに、地域の様々な機関と連携することで地域の課題を発見し、探究の手法やツールを活用し、弟子屈高校の生徒が考え行動を起こす「弟高アクション」として地域課題の解決を目指す。

3 実施学年・単位数

第1学年：1単位(35時間)、第2学年：1単位(35時間)

4 学習計画（1学年：弟子屈探究（1単位））

単元	時数	主な学習活動
オリエンテーション	1	1年間の活動の概要説明
探究活動のメソッド	5	探究活動を行うにあたり、必要な知識・技能を習得する。 (SDGsについての学習、キーワードマッピングによる興味関心のグループ分けの手法等)
基調講演	2	弟子屈町長や教育長による弟子屈町の魅力と課題、高校生の可能生についての講演(1年生、2年生合同実施)
地域巡検	12	硫黄山散策、屈斜路湖での釣り・カヌー活動を通し、弟子屈の自然環境の成り立ちや生き物、観光産業等について学習し、課題を発見する。
ブースセッション	3	地域巡検で発見した課題についての解決「弟高生アクション」について、地域の方々との交流を通して、ブースセッションの形で話し合い、発表する。
1学年探究活動	10	地域巡検やブースセッションの活動をもとに、地域の探究課題(テーマ)を設定し、課題解決に向け探究活動を行う。
報告会・振り返り	2	次年度へ向けてのまとめと探究活動の報告、評価を行う。

学習計画（2学年：弟子屈探究（1単位））

単元	時数	主な学習活動
オリエンテーション	1	1年間の概要説明、自分マップ(ウェビングマップ)の作成
探究活動のメソッド	8	探究活動を行うにあたり、必要な知識・技能を習得し、活用する。 (SDGsの観点での地域の課題発見、ウェビングマップによる探究課題(テーマ)設定、地域経済分析システムRESASの活用等)
基調講演	2	弟子屈町長や教育長による弟子屈町の魅力と課題、高校生の可能生についての講演(1年生、2年生合同実施)
2学年探究活動	17	グループで地域の探究課題(テーマ)を設定し、課題解決に向け町や外部機関と連携し、探究活動を行う。
見学旅行	4	他地域での探究活動計画を立案し、学校交流や物販の販売(R3未実施)を通して、探究の過程を深める。
報告会・振り返り	3	パワーポイントによるポスター作成を行う。次年度のNoMaps釧路・根室高校生ビジネスコンペティションへの応募に向けたまとめを行う。

5 具体的な活動（探究活動）

(1) 地域巡検（1学年（年2回））

・ガイドウォークにより、ガイドから自然環境の成り立ち、生物及び観光資源としての価値について説明を受けた。また、カヌー・釣り体験や土壌、水源及び温泉のpHの計測などの調査を通じて、地域の課題を考察し生徒間で共有することで、課題解決に向けた方策を検討した。

(2) 見学旅行での探究活動（2学年）

・弟子屈町の姉妹都市である鹿児島県日置市の伊集院高校の生徒との交流を通して、日置市の探究課題について、弟子屈町との比較調査を行うため、アンケートを実施した。また、弟子屈町、弟子屈高校の紹介及び探究活動の報告を行い、探究活動で作成したオリジナルマスクケースなどの記念品を贈呈した。

6 成果と課題（○成果 ●課題）

- 弟子屈町の課題について、体験や調査を基に探究活動を行ったことで、生徒が身近な問題として捉えることができた。
- 地域の特色を生かした教育活動とするため、単元配列表を見直し、教科等横断的な視点で内容の充実と改善を図る必要がある。



【6-10】地域を担う人材の育成（留萌教育局の例）

留萌教育局では、地域を担う人材を育成するため、令和2年度より独自事業「オロロンリレーションプロジェクト」を実施し、学校、地域及び関係期間が連携を深め、留萌地域全体の取組となるよう、地学協働を推進している。

【留萌地域の未来創造シンポジウムの実施】

1 目的

中学生・高校生が地域や社会の課題に対し向き合う機会を設け、地域の一員としての当事者意識をもつとともに、社会人として働きながら故郷のために活動している方々の話を聞くことをとおして、持続可能な地域のために主体的な活動をする意欲を育む。

2 主催

北海道教育庁留萌教育局

3 期日

令和4年（2022年）2月9日（水）13:10～14:45

4 会場

- ・メイン配信会場：北海道教育庁留萌教育局
- ・受信会場：管内各公立高等学校 他（Zoomによるオンライン開催）

5 参加者

- ・留萌管内公立高等学校第2学年・年次生徒（315名）
- ・留萌管内の小・中学校児童・生徒・教諭等、留萌管内PTA、市町村教育委員会職員、家庭教育サポート企業、地域づくりに関わる方（125名）

6 内容

(1) 事前アンケート

地域への誇りや貢献について、生徒を対象とした事前アンケートを実施

(2) パネルディスカッション

『「地域のため」その原動力は？』と題し、3名のパネリストによるパネルディスカッションを実施
〔パネリスト〕

- ・(株)ヤマセン仙北果樹園/PRクリエイター 寺沢 響太 氏
- ・厚真町教育委員会生涯学習課 齊藤 烈 氏
- ・天塩町地域おこし協力隊 横山 雄一 氏



(3) 実践発表

天塩町立天塩中学校及び苫前商業高校における地域創生に係る取組の発表

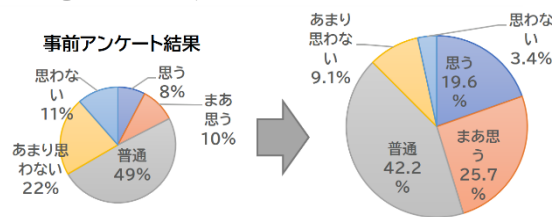
(4) まとめ・事後アンケート

「地域に誇りをもつこと」についてどのように考えが変わったか、地域の良さや誇りは何か、持続可能な地域のために自分ができること、してみたいことは何かについてまとめるとともに、地域への誇りや貢献について事後アンケートを実施

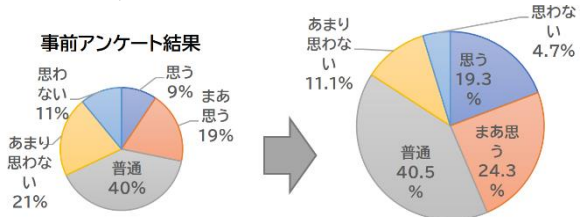
7 生徒の反応

(1) 事前・事後アンケート

- ・現在住んでいる留萌管内の地域に「誇り」を感じていますか？



- ・あなたは、将来留萌地域に貢献したいと思いますか？



(2) まとめ

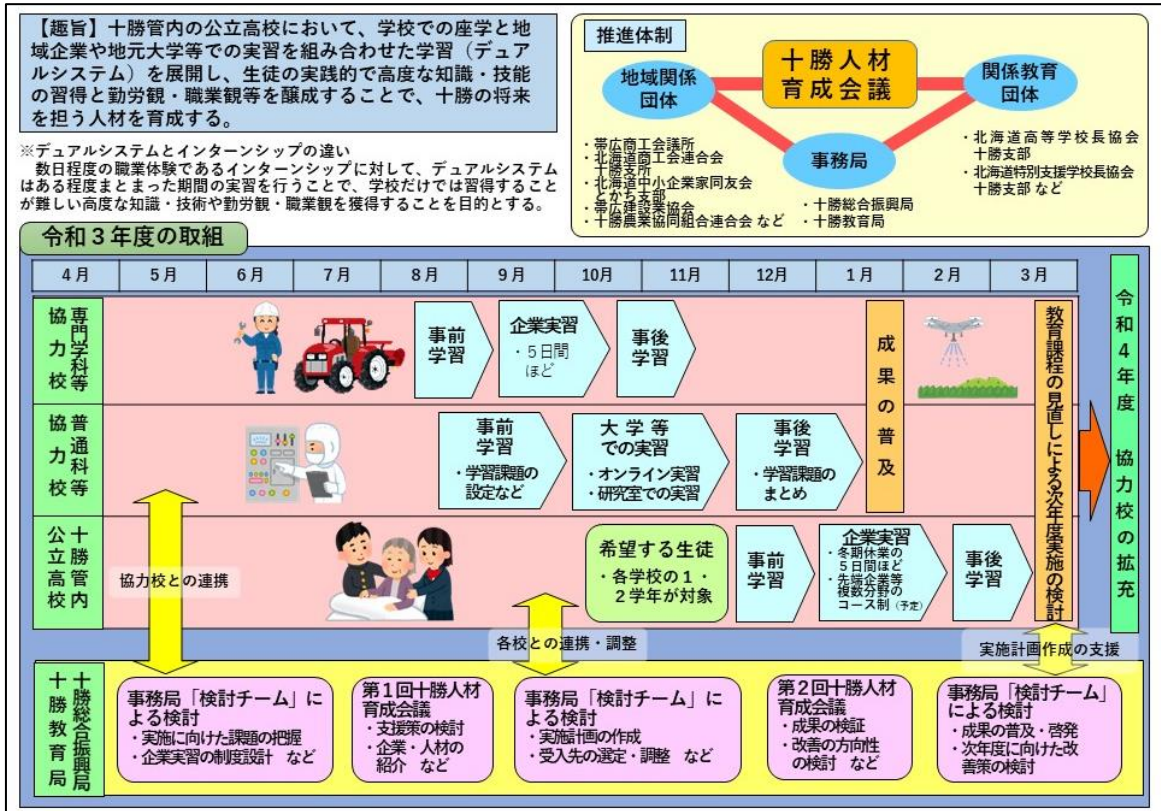
「地域に誇りをもつこと」についてどのように考えが変わりましたか？	今住んでいる地域の良さや誇りは何ですか？	持続可能な地域のために、自分ができること、してみたいことは何ですか？
<ul style="list-style-type: none"> ・地域のことを今以上に知りたいと思った。 ・地域に誇りをもつことは自分のモチベーションにつながると思った。 ・出身に関わらず地域に誇りがもてるのだと思った。 ・今、あまり誇りは感じないけれど、自分が高校生のうちにアクションを起こしたいと思った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人口が少ないからこそ団結力がある。 ・町を盛り上げようとしている人たちがたくさんいる。 ・個人のニーズが尊重されやすく住みやすい町である。 ・6次産業を頑張っている。 ・勉強やスポーツに集中できる環境である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・市の都市計画の作成に参加したい。 ・町の特産品を活用した取組をしたい。 ・町のPR動画やポスターを作りたい。 ・高校生カフェのような取組をしたい。 ・環境調査や水産クラブを通じて自分たちの地域を他の地域にもっと知ってもらいたい。

【7-1】デュアルシステム (十勝教育局の例)

参照：手引 p.81

「新たな企業等実習制度『十勝版デュアルシステム』実証事業」

十勝教育局と十勝総合振興局では、令和3年度より、関係教育団体や地域関係団体から構成される「十勝人材育成会議」を組織し、産学官による連携体制を構築し、学校での座学と地域企業や地元大学等での実習を組み合わせた学習(デュアルシステム)を展開し、生徒の実践的で高度な知識・技能の習得と勤労観・職業観等を醸成することで、十勝の将来を担う人材の育成に取り組んでいる。



1 協力校における取組

帯広農業高校を専門学科の協力校、帯広三条高校を普通科の協力校として、十勝総合振興局地域政策課や十勝教育局、協力校が実習の受入先や実習内容を検討し、次のとおり実施した。



	帯広農業高校 (専門学科の協力校)	帯広三条高校 (普通科の協力校)
参加者	森林科学科の3年生	科目「生物基礎」を受講している1年生
期日	令和3年9月6日(月)～9月10日(金)	令和3年12月4日(土)
受入先	広尾町森林組合	帯広畜産大学(帯広三条高校で実施)
学校での座学	林業の現状と課題及び測量方法等について学習	生態系と生物の多様性について学習
実習内容	森林環境の監視や管理、森林の境界や面積の測量等について実習	十勝の生態系と野生動物と人間生活の関係性の研究に関する大学教授の講義
成果	長期間の実習を通して、林業の業務内容を知り、就労意欲を高めることができた	学校で学んだことをより深く理解することができ、学習意欲を高めることができた

2 冬期休業における取組

冬期休業において、十勝管内の公立高校の第1・2学年の生徒を対象に、3つのコースにおいて企業等の実習を実施した。

	冬期休業における取組
参加者	帯広工業高校、芽室高校、池田高校、足寄高校からの参加希望生徒
期日	令和4年1月6日(木)～1月13日(木)の5日間(オンラインによる事前・事後指導含む)
受入先	①建設・建築コース：宮坂建設工業(株) ②ものづくり産業コース：(有)十勝スローフード、公益財団法人とかち財団 ③介護・医療コース：社会福祉法人幕別真幸協会、帯広大谷短期大学
実習内容	各事業所で専門知識の習得や高度な技能を体験
成果	学校での学びと企業での仕事のつながりを体験することで、進路の視野を広げることができた。

【7-2】地域人材を活用したキャリア教育（野幌高校の例）

野幌高校では、地域人材を活用し、家庭や地域の生活課題を主体的に解決しようとする能力を育成しながら、自らの人生を見つめ、キャリア・プランを考える学習を実施している。

1 実施目的

子どもや高齢者及び障がい者を取り巻く社会環境について体験的に学び、家庭や地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実・向上を図る能力と実践的な態度を育てる。

2 実施対象

第2学年

3 実施科目及び単位数

学校設定科目「生活と地域」（2単位）

4 主な連携先

江別市役所、札幌中税務所、日本年金機構新札幌年金事務所
北海道盲導犬協会、日本証券業協会北海道地区協会等

5 実施概要「防災講話と避難所体験」

(1) 目的

- ・防災時に主体的に考え行動できるようになること。

(2) 実施場所

- ・野幌高校

(3) 講師

- ・江別市危機対策防災担当者

6 参加者の声

- ・避難所に行ったときには運営面で力になりたいと思った。
- ・家族で避難場所を共有しようと思った。
- ・食料の備蓄が大切だと思った。

7 まとめ

4月初めの導入時にキャリア・プランを設計後、年度末に、再度、キャリア・プランを設計して、導入時で設計したキャリア・プランとの違いを自覚し1年間の学習のまとめを行う。



防災講話



避難所体験①



避難所体験②

（取組事例8）地域の人材等の活用や異年齢集団での活動

参照：手引 pp.82-90

【8-1】地域人材を活用した教育活動（南幌高校の例）

南幌高校では、地域人材を活用した取組として、町役場と連携し、「地域おこし協力隊」の方と連携した授業に取り組んでいる。

1 依頼内容

- (1) 地域に貢献できる人材育成をめざす単元「南幌学」の授業への協力（単元「南幌学」については32ページ参照）
- (2) 今後の授業に関する意見交換
- (3) 地域情報や画像の提供

2 具体的な活動例

(1) アンケート協力依頼への協力

「南幌学」の授業で、「南幌町 Best20」を生徒たちが選ぶにあたり、町の広報紙に町民アンケートを織り込んでもらう等の協力を仰いだ。当初、回答数が伸び悩む中、役場職員等へ積極的に働きかけていただき、一定数の回答を得ることができた。

(2) 地域情報や画像の提供

「地域おこし協力隊」が日頃から町の方々との交流を通して、本町の良さを発掘し、SNS等で発信していることから、生徒が「私たちが選んだ南幌町 Best20」の発表原稿を作成する際に、課題解決に有益な情報提供をいただいた。また、発表のスライドに用いる本町の写真画像も提供いただいた。美しい画像を用いることで発表をより魅力的なものにすることができた。



「南幌学」への参加



提供いただいた画像

【8-2】学校設定科目の学習の成果を地域へ還元する取組（江差高校の例） 参照：手引 p.52

江差高校では、生徒の興味・関心等に応じた学校設定科目として、学校設定科目「江差追分」を開設している。

例年「江差追分」の学習成果の発表として、町内の文化祭で演奏を披露していたが、今年度はコロナ禍のため、オンラインで町内のデイサービスセンターと繋ぎ、「江差追分」履修者や吹奏楽部員をはじめとする有志生徒が参加し、「クリスマスコンサート」として演奏を披露することとした。

○「クリスマスコンサート」の概要

(1) 実施日

令和3年12月24日（金）

(2) 実施方法

オンライン配信

(3) 江差高校の参加者

有志生徒（「江差追分」履修者や吹奏楽部員等、計50名）

(4) 成果

「クリスマスコンサート」で「江差追分」を披露することで、地域の文化である「江差追分」を知識・技能の両面から深く理解し、生涯を通じて江差追分を愛好する契機とすることができた。



※学校設定科目「江差追分」

（目標）北海道を代表する地域文化「江差追分」を技能・知識の両面から深く理解することで、地域に誇りを持たせるとともに、生涯を通して江差追分を愛好し、潤いある生活を送るための基礎づくりをする。

- （内容）
- 1 追分発祥から江差までの伝承、根付いた背景を理解する。
 - 2 歌詞（前唄・本唄・後唄）の内容を理解する。
 - 3 発声、息継ぎ（呼吸法）、節回し、音符を理解（「そい掛け」を含む）する。
 - 4 部分練習、全体練習を通して正調を唄える。
 - 5 伴奏楽器（尺八、三味線）の特性の理解と基本技能を練習する。

【8-3】地域と連携したボランティア活動の取組（稚内高校定時制の例）

稚内高校定時制では、地域ボランティアや街頭募金活動などに取り組みなど、地域と連携・協働した教育活動の充実を図っている。

1 ねらい

- ・地域の活動をともに行うことで、地域社会との連携を深め、地域の役割を理解する。
- ・奉仕活動を通して、思いやりの心や社会性を高める。
- ・生徒一人一人が活躍の場をもち、自己有用感を高める。

2 実際の取組

・「日本最北端わっかない平和マラソン」ボランティア

北防波堤ドーム内や沿道でのランナーへの給水を行う。

・北門神社例大祭町内子ども御輿補助

「子ども御輿」に参加する子どもたちの交通安全面の補助活動をするため、生徒は3つの町内会に分かれ、地域や町内会の方と連携して、安全に執り行えるように運営に参加した。

・その他の活動

市社会福祉協議会が主催する、「稚内ふれあい広場“ふくしフェスタ”」出店参加、「街頭募金活動」、「地域食堂“ふらっと”」での補助活動等、地域と連携したボランティア活動を積極的に行っている。

3 成果

これまでコミュニケーションを図ることが得意ではない生徒が多かったが、自主的にボランティア活動に参加し、積極的にコミュニケーションをとる姿勢が見られた。また、校内の体験発表においても、自身の経験や思いを発表する姿が見られ、表現力の向上につながった。



【9-1】学校設定科目「地域と自然」(蘭越高校の例)

蘭越高校では、尻別川を学びの場とする学校設定科目「地域と自然」を開設し、環境教育活動を展開している。

1 目標 (地域と自然)

- ・ 自然環境や自然の事象に対し、科学的に探究する能力と態度を身に付ける。
- ・ 河川の水質、エネルギーなど自然環境への理解を深め、科学的な自然観を身に付ける。

2 内容 (地域と自然)

毎月、尻別川の水質調査を行い、1年間を通じて川の水質の変化を分析している。また、課題研究としてテーマを決め、環境に関係する調査活動を行っている。

3 実施学年・単位数

第2学年：2単位

4 学習計画 (地域と自然 (2単位))

単元	時数	主な学習活動
オリエンテーション (GLOBEについて)	3	環境に関するデータを交流することにより、測定に高い正確性が要求されることを理解し、科学測定に対する責任感を高める。
定例水質調査	20	尻別川の水質を調査し、水質の根拠を科学的に考察する。
水質調査で分かること	5	調査対象と測定項目の関連性について理解し、複数の測定項目を組み合わせ、水質変化の原因を考察する。
揚力と慣性モーメント	4	素朴な玩具を制作し、玩具の面白さを支える科学法則を理解する。
空気の移動と気象現象	3	空気塊が移動することにより、気象に変化が生じることを理解する。
交流授業・準備	7	異校種との授業交流を通して、相手に配慮した表現力を身に付ける。
課題研究	6	水質変化の推察を裏付けるような実験・観察を行い、根拠を持った考察ができるようにする。
科学屋台テーマ研究	5	一般市民が科学に関心が持てるような科学屋台のテーマを研究し、科学振興に寄与する。
自然災害と向き合う	3	自然災害の面から地域の自然を見つめ、防災の意識を高める。
気象情報を知る手段	3	ICTに頼らず気象情報を知る手段を身に付け、観察眼を養う。
実践発表会・準備	5	研究発表を通して、わかりやすく相手に伝える表現力を高める。
報告書作成	6	1年間の活動を振り返り、報告書を作成する。



尻別川の水の採取の様子



採取した水の科学的な測定の様子

5 具体的な活動 (交流授業)

蘭越小学校4年生の「川の学習」(総合的な学習の時間)の授業において、本校生徒が学習のお手伝いを行う、交流授業を実施した。

本校生徒は、川の危険性についての説明や尻別川に入って小学生の水生昆虫の調査のサポートを行った。

生徒からは、「小学生とふれ合う機会が持てて良かった」「小学生に物事を伝えるのは予想以上に大変だった」等の感想があげられ、普段の授業では経験できない学習をすることができた。



小学生との交流授業の様子

【9-2】商業科目「総合実践」（小樽未来創造高校の例）

小樽未来創造高校では、地域全体を学びの場とする教科商業「総合実践」を開設し、「小樽指定歴史的建築物のかるた製作」を行う教育活動を展開している。

1 目標（総合実践）

地元・地域の振興と地域社会の歴史的・文化的価値の見直しの意義について、小樽の歴史的文化的価値を小樽市民に正しく理解させるとともに、歴史的建築物に対する一般市民の理解と課題について、具体的な事例を考察する学習活動を展開し、地域活性化について考える。

2 内容（総合実践）

各グループに割り当てた小樽の歴史的建築物について、歴史的な背景を調査し、建築された年月日、名称、住所及びキーワード等を整理し、読み札を作成するとともに取り札に掲載する画像を選定し、小樽市に使用許諾の申請を行う。また、かるたの読み札と取り札を収納する箱のパッケージデザインを製作し、各グループのプレゼンテーションを実施し選考する。なお、完成したかるたについては、地域の保育園、幼稚園、小中学校へ寄贈する。

3 実施学年・単位数

第2学年：3単位(流通マネジメント科10名、情報会計マネジメント科2名)

第3学年：3単位(流通マネジメント科4名、情報会計マネジメント科2名)

4 学習計画（総合実践（3単位））

単元	時数	主な学習活動
オリエンテーション	3	<ul style="list-style-type: none"> 「小樽指定歴史的建築物のかるた製作」の目標及び内容について説明 小樽指定歴史的建築物（79棟）の紹介 製作に係るスケジュールの説明
小樽指定歴史的建築物の調査及び計画書の作成	6	<ul style="list-style-type: none"> グループ編成 各グループに割り当てられた小樽指定歴史的建築物について調査を行い、調査した内容を計画書にまとめる
読み上げ文の作成	12	<ul style="list-style-type: none"> 各グループに割り当てられた小樽指定歴史的建築物について、かるたの読み上げ文を各自作成する かるたの読み上げ文について、プレゼンテーションを実施し、意見をとりまとめた上で、読み上げ文を決定する
読み札及び取り札の製作	9	<ul style="list-style-type: none"> 読み札の製作 取り札に掲載する小樽指定歴史的建築物の画像を選定し、小樽市に使用許諾の申請 取り札の製作
パッケージデザインの製作	9	<ul style="list-style-type: none"> かるたの読み札と取り札を収納する箱のパッケージデザインを製作 各グループのプレゼンテーションを実施し選考後、パッケージの決定
完成したかるたの地域への寄贈についての検討	6	<ul style="list-style-type: none"> 完成したかるたの寄贈先の検討 寄贈に係る文書作成及び寄贈方法の検討

5 具体的な活動（かるたの製作）

小樽市の歴史的・文化的価値について学習し、学習の中から得た知識をもとに、小樽指定歴史的建築物が建造された理由や歴史的な背景を調査する。また、将来の小樽の発展を担う子どもたちに小樽の歴史や文化が正しく理解されるため、生徒自らの学びの成果として、「小樽指定歴史的建築物のかるた」を製作し、地域社会へ寄贈することで、子どもたちが遊びの中から地元小樽への理解をいかに深めることができるかを考察する活動を行っている。

なお、「小樽指定歴史的建築物のかるた」の寄贈については、令和4年（2022年）4月を予定し、現在、寄贈先等について検討している。

次年度以降、工業科（2学科）とも連携し、かるたの取り札を現行の紙材から木材化（木材加工：建設システム科）や、パッケージの切削加工（機械電気システム科）をするなど、学校全体で地域社会を考察し、地域に貢献できる人材を育成することと、地域に根ざした学校として魅力づくりの一助となる取組を検討する。



【9-3】学校設定科目「日高地域研究」（静内高校の例）

静内高校では、地域全体を学びの場とする学校設定科目「日高地域研究」を開設し、目標達成のために地域や実社会と協働したプロジェクト学習を展開している。

1 目標（日高地域研究）

生徒や地域の人々と協働し、日高地域の課題の解決を目指し、自主的な活動を通して、自己調整力・創造力・行動力・郷土愛等、生徒が身に付けるべき資質・能力の育成を図る。

2 内容（令和3年度（2021年度））

地域や協働したPBL（プロジェクト学習・実践体験型授業）

- (1) 新冠町及び新ひだか町の社会課題探究
- (2) 地域の魅力を発信する短編映画製作

3 実施学年・単位数

2年次：1単位、3年次：1単位

4 学習計画（日高地域研究（1単位））

単元	時数	主な学習活動
【準備】 情報収集①	2	<ul style="list-style-type: none"> ○興味・関心に応じた、地域の魅力や課題等の情報収集 ○学習計画及び評価規準の確認（ビジョン及びゴール） ○安心安全の場・共創協働・地域に関するワークショップ ○前年度の様子（映像）の視聴 ○目標設定（「本校で育成すべき10の力」の中から、生徒自身がより身に付けたい資質・能力を設定）
【動機付け】 情報収集②	2	<ul style="list-style-type: none"> ○協働先の役場による説明（現状と課題・ビジョン及びゴール） ○俳優・映像制作者等とのワークショップ ○自己との結び付きを踏まえたビジョン及びゴールの設定
【ビジョン及びゴールの設定】	3	<ul style="list-style-type: none"> ○活動時間数を逆算した計画設定 ○役割分担・チームルール設定 ※役割分担の例（映画製作：企画・構成・脚本・演出・配役・スケジュール調整交渉・連携・場所確保・演技指導・撮影・編集）
【情報収集③】 地域の人々との対話	5	<ul style="list-style-type: none"> ○ICT（Google フォーム等）を活用した情報収集（アンケート調査等） ○外部講師（地域内外）とのワークショップ ○フィールドワーク（インタビュー・周辺視察（駅舎・乗馬場見学）等） ○先行事例（論文・先哲）の参照 ○新聞・書籍の参照
【整理・分析・まとめ】	10	<ul style="list-style-type: none"> ○ピラミッドチャートやYチャート等の思考ツールの活用 ○整理分析を通して知識の関連付け及び知識技能の概念化 ○ICT 端末等の積極的な活用 ○中間発表による他チームとの比較及び自チームの製作の検討 ○プレゼンテーションの練習
【プレゼンテーション】	1	<ul style="list-style-type: none"> ○多様な手段を活用した表現（パワーポイント資料・ポスター・映像等） ○町の会館で町長等、地域の方々に向けてプレゼンテーション・上映会及び参加者からの講評及び助言 ○Zoom での配信・YouTube での公開（※短編映画等）
【振り返り】	2	<ul style="list-style-type: none"> ○報告書作成 ○活動の振り返り（生徒が設定した目標の達成度等の確認）

5 具体的な活動

(1) 外部講師とのワークショップ

- ・「地域の社会課題探究活動」では、協働相手との目標の共有及び現状と課題の整理等を通して、生徒の地域課題に対する当事者意識を高めた。また、中間発表プレゼンテーションでは、新ひだか町役場に勤務する卒業生から直接、アドバイスを受けた。
- ・地域の魅力を発信する「短編映画製作」では、俳優や映画監督、映像制作者から、撮影の流れ、演技や編集技法、映画製作のポイント等を学んだ。映画の製作に当たっては、生徒が地域の方々に出演の交渉を行うとともに、俳優及び映画監督と製作に向けた打ち合わせを行った。



卒業生との協議の様子

(2) 大学との連携

札幌大谷大学社会学部社会学科 平岡 祥孝 教授を講師に招き、生徒による地域課題の解決に向けた発表及び教授とのディスカッションを実施した。生徒は、平岡教授から発表についての講評を受けるとともに、地域の既存資源の有効活用方法や他地域との差別化を図る上での視点等についてアドバイスを受けた。

(3) 教科等横断的な授業

生徒による短編映画製作に係り、BGM の作成（音楽）、地域の歴史や風土（地理歴史及び公民）、グラフやスライドの作成（情報）、台本の作成（国語）等、複数の教科からの学びを製作に取り入れることで、生徒は、授業での学びを活かす経験を積むことができた。

(4) ICT の有効活用

「Google Form」によるアンケートを実施するなど、目的に合わせて ICT を積極的に活用した。



生徒の発表の様子



資料作成の様子

学校設定科目「高山植物」の取組

礼文島は、レブンアツモリソウなどの高山植物が低地でも群生し、特徴的な自然環境を有している。

礼文高校では、この特色ある自然環境の中、地域人材（NPO ガイド等）の協力を得て、理科の学校設定科目「高山植物」を実施し、地域資源を活用した特色ある教育活動を展開している。



【レブンアツモリソウ】

1 目標

礼文島に生育する高山植物群を中心とした植物の観察・実験・演習を通して、自然保護に対する関心を持ち、自然と人間との関わりについて体系的な知識を身に付けるとともに、自然保護と観光産業の発展を両立する方法を考察し、自然に対する科学的な見方は考え方から問題解決能力を育成し、礼文島の自然と積極的に関わりながら生きていく力を養う。

- (1) 礼文島の自然の観察を通して、自然の事物・現象についての知識を深め、まとめる力を身に付ける。
- (2) 見通しをもって実験・観察を行い、科学的に探究する力を身に付ける。
- (3) 主体的に授業に取り組み、観察、実験の結果から科学的に探究する態度を身に付ける。



【ガイドから説明を受けている様子】

2 内容

- (1) 高山植物の構造と花の種類（植物の基本構造、植物の分類）
- (2) 礼文島の自然環境（礼文島の成り立ち、礼文島の地形）
- (3) 礼文島の高山植物の保全（国立公園の目的と意義、自然保護活動、自然保護と自然利用の在り方）

3 実施学年・単位数

第1学年・2単位

4 学習計画（高山植物（2単位））

時期	主な学習活動
4月～6月	オリエンテーション、野外学習（湿原の特徴、周氷河地形と風衝木の観察、植物の基本構造、花壇での定期観察、外来種駆除）など
7月～9月	礼文島の成り立ち、礼文島の地形、野外実習（花の観察）
10月～12月	礼文島の高山植物の保全、校内実習（アツモリソウの培養実験）
1月～3月	自然利用の在り方、観光パンフレットの作成、校外実習（雪の保温効果）

5 具体的な活動（野外実習の一例）

令和3年9月7日、町内の山道にて、秋の花についての野外観察を実施した。礼文自然情報センターの職員を講師に招き、生徒は6班に分かれて課題の花を探し、各班で記録したり、写真を撮ったり、図鑑を調べたりするなど分担して観察した。生徒は葉の形など細部まで観察し、話合いの活動を通して、答えを導き出そうとしていた。



【実習の様子】

【9-5】学校設定科目「知床学」（羅臼高校の例）

参照：手引 p.82

羅臼高校では、地域全体を学びの場とする学校設定科目「知床学」を開設し、地域の自然を大切にすることを意識を涵養するとともに、地域の環境問題に対して当事者意識を持って考え行動できる人材の育成に資する教育活動を展開している。

1 目標（知床概論Ⅰ）

- (1) 自然科学に関する基本的な概念や原理・法則を理解する。
- (2) 知床半島をフィールドに、地学的・生物学的な事象について理解し、地域の産業や生活環境との関連等を科学的に捉える。
- (3) 自然と人間生活の関わりを持続可能な社会への課題と捉え、発展的に解決しようとする意欲を高める。

2 内容（知床概論Ⅰ）

- (1) 国立公園・ESD・SDGs
- (2) 知床の地形や気候などの生物環境的要素
- (3) 知床の動植物に関する生物学的要素

3 実施学年・単位数

第1学年：1単位(35時間)

※「知床概論Ⅰ」履修後、第2学年で「知床概論Ⅱ」：2単位(70時間)、第3学年で「自然観察」：2単位(60時間)を選択履修することができる。

4 学習計画（知床学Ⅰ（1単位））

単元	時数	主な学習活動
・オリエンテーション ・知床の地図	4	・知床の地名や地形などについて学び、学習の意義や目標について理解する。
・国立公園、ESD、SDGsについて ・知床の気候	5	・ESD及びSDGsについて学ぶとともに「持続可能性」についての議論の視点や方法について理解する。 ・知床半島の形成過程を地質学的に理解するとともに、知床の気候の特徴について、「流水」等の具体的現象や諸資料を活用し理解する。
・知床の生態系と物質循環 ・知床の植生	10	・物質循環、生物多様性、生物の分類等について学び、学んだことをもとに知床の植生、森林の構造とその変遷を理解することにより自然環境の変化が生態系に及ぼす影響について考察する。
・知床の哺乳類 ・知床の昆虫	11	・知床に生息する生物及びその特徴について理解を深めるとともに、共存するために必要なことについて考察する。 【学習対象とする主な生物】 エゾシカ、ヒグマ、エゾオオカミ、海獣（トド、アザラシ）、齧歯目（エゾモモンガ・エゾリス・エゾシマリス）、食虫目（ネズミ）、翼種目（コウモリ）、昆虫
・知床の鳥類 ・地域実習 ・まとめ	5	・知床に生息する鳥類及びその特徴について理解を深めるとともに、共存するために必要なことについて考察する。 ・知床の猛禽類（オジロワシ、オオワシ）については、外部講師による講義を実施するとともに、実際にクルーズ船に乗船し、ワシや海鳥等の観察を行うことにより、環境や生態系維持に係る課題について理解を深める。



【講義】



【エゾタヌキの標本】

5 具体的な活動

【ワシ学習】



「知床学」では、羅臼町内外の環境や生物の専門家を講師とした授業があります。写真は観察実習前の事前学習でオオワシの大きさを体感しています。

【地域実習】



地域実習では、クルーズ船に乗船し、知床半島で流水や海鳥の観察を行います。流水時期にしか見られない猛禽類を観察できます。

【学習成果発表】



根室海峡に生息する生物の資源としての有用性や持続可能性について学習した成果の発表を行い課題解決の方法について理解を深めます。

【9-6】学校設定科目「北海道の自然」（訓子府高校の例）

訓子府高校では、地域（訓子府町）全体を学びの場とする学校設定科目「北海道の自然」を開設し、地域の主産業である農業分野に関連する教育活動を展開している。

1 目標（北海道の自然）

- (1) 体験的な学習等とおして、農業の社会的役割について理解する。
- (2) 科学的な見方を養い、農業や環境に対する理解を深める。
- (3) 作物の管理・収穫等とおして生命尊重の態度を育成する。

2 内容（北海道の自然）

- (1) 農作物の栽培（中学生との合同作業含む）
- (2) 収穫物の調理
- (3) スマート農業学習



たまねぎの苗を植える様子



スマート農業学習の様子

3 実施学年・単位数

第3学年：3単位

4 学習計画（地域連携に係る）

単元	時数	主な学習活動
オリエンテーション	2	中高合同農業学習・スマート農業学習計画の確認 栽培する野菜の特徴を知る、調べる
中高合同農業学習①	2	【町内銀河農園】 合同農業学習（たまねぎ、じゃがいもの苗植え）
中高合同農業学習②	2	【町内銀河農園】 合同農業学習（銀河農園の除草、生育状況観察）
中高合同農業学習③	2	【町内銀河農園】 合同農業学習（たまねぎ、じゃがいもの収穫）
スマート農業学習	2	【ホクレン実証農場】 最新の農業についての講義、無人トラクターの試乗、ドローンの操作
中学校出前授業（報告会）	2	【訓子府中学校】 1年間の学習内容の発表（クイズ形式含む）

5 具体的な活動（北海道の自然）

- (1) 畑（敷地内）おこし、野菜の苗植え、水やり、除草
- (2) 銀河農園での中高合同農業学習
- (3) 校内での収穫物の調理
- (4) 収穫物の給食センターへの提供
- (5) ホクレン実証農場でのスマート農業学習
- (6) 訓子府中学校での発表（合同農業学習・スマート農業学習まとめ）



訓子府中学校での発表の様子

【9-7】地域の博物館等の教育施設の活用（野幌高校の例）

野幌高校では、北海道埋蔵文化財センターや北海道博物館及び開拓の村を訪れ、地域の歴史や文化について理解を深める等、地域と連携・協働した教育活動の充実を図っている。

1 活動内容

- (1) 施設の見学と学芸員さんからのレクチャー
- (2) 地域の歴史や文化に関するワークシートの作成
- (3) 集団行動やルールの遵守

2 具体的な活動例

北海道埋蔵文化財センターや北海道博物館及び開拓の村での活動

1・2学年がそれぞれ、地域の博物館等の教育施設を訪れ、地域の歴史や文化等について理解を深めた。学芸員から詳しいレクチャーを受けながら地域の歴史や文化について、ワークシートを作成した。生徒一人ひとりがそれぞれの視点で、地域に対する新たな発見や驚きを確認することができた。

生徒からは「自分がいつも通っている学校や駅の下に遺跡があると知って興味深かったです。北海道は沢山の遺跡が埋まっており、土偶は地域によって色々な形や模様があることを知り、興味深かったです。」「見学だけでなく施設の方が説明してくれたことで、より理解が深まりました。現在では見ることのできない道具や建物があって歴史を感じた。」「以前から興味があったアイヌ文化を知ることができて良かった。とても勉強になった。」等の声があった。



博物館等の見学①



博物館等の見学②



博物館等の見学③

【10-1】道外からの地域留学の受入れ（斜里高校の例）

斜里高校では、地域留学を受け入れ、地域に係る学びの充実などに取り組むなど、地域と連携・協働した教育活動の充実を図っている。令和3年度は道外から地域留学生（以下「留学生」という。）2名を受け入れた。

1 活動内容

- (1) 簡易魚道作りに協力
- (2) 経済産業省「未来の教室」実証事業に参加
- (3) 斜里ロータリークラブ例会にて留学生の卓話
- (4) 各種ボランティア活動
- (5) 課題研究（知床学）に係る資料作成・発表

2 具体的な活動例

(1) 簡易魚道作りに参加

簡易魚道作りは、段差のある川に、魚が遡上するバイパス（魚道）を、材木や土嚢などを組み合わせて作製する活動であり、知床の自然を守る団体「知床財団」の活動の一つである。留学生2名は、現地に行って大人たちに混じって2日間（6単位時間×2）作業して完成させた。

(2) 経済産業省「未来の教室」実証事業に参加

「観光」をテーマとして、留学生が全国からの参加生徒とオンラインによる合同研究を行った。留学生は自身の経験に裏打ちされた前向きな意見を活発に述べ、他の参加生徒をリードし、議論の活性化に大きく寄与した。また福岡県にて予定されていたスクーリングは、コロナ禍のためリモートによる参加になった。

(3) 斜里ロータリークラブ例会における卓話

斜里ロータリークラブ例会に留学生2名が招かれ、留学生の視点からの感想と意見を発表した。留学生の一人は、自身の出身県では自然が失われていることを説明した上で、知床では人が自然を守る活動をしているため、自然が少しずつ再生されてきていることを感動とともに述べた。

別の留学生は、斜里町にいろいろな団体があって、それぞれ活発に活動しているが、それぞれ活動に留まっていることを指摘した上で、相互に協力する必要性を述べた。

高校生による感想と指摘は、その的確さが例会参加者に新鮮な感動と驚きを与え、例会参加者が斜里町の課題を再認識することになった。

(4) 各種ボランティア活動

夏には、小中学生を対象とした自然体験学習「知床キッズ・斜里っ子自然教室」（知床財団主催）に留学生が指導者として運営に参加した。留学生自身も子どもたちと一緒に自然体験を経験し、小中学生や主催者から好評を博した。

冬には、「森づくり」ボランティアとして看板設置作業や防鹿柵、樹皮保護ネットの補修作業を行った。

(5) 課題研究（知床学）に係る資料作成及び発表

商業の科目「課題研究（知床学）」は、本校の特色ある教育の一つであり、地域の課題を見出し、解決策や新たなアイデアを発表することを通して、主体的な学びや対外的な発表の仕方を学ぶこととしている。

留学生による発表は、課題を見出す切り口が鋭く、データと深い考察により説得力があり、本校生徒の平均水準を上回るものだった。

より高次の発表例が示されたことにより、本校生徒にとっての刺激になり、よりよい発表を目指す動機が向上した。



簡易魚道作りの様子①



簡易魚道作りの様子①



「未来の教室」実証事業



斜里ロータリークラブ例会の様子



知床キッズ・斜里っ子自然教室



「森づくり」ボランティア

3 留学生（生徒A、生徒B）の声

(1) 簡易魚道作りについて

- 「魚道を作ると言われて、最初は全然イメージが付きませんでした。いろいろと調べた結果、完成イメージを持つことができ、ぜひやってみようとの思いで活動に取り組むことができました。」(生徒A)
- 「いつもお世話になっている知床に少しでも恩返しできたらいいなと思って参加しました。今の私には想像はつかないけど、魚道ができあがって、ゆくゆくはそういう姿（魚の遡上する姿）が見られたらとてもうれしいなと思います。」(生徒B)



(2) 印象に残った活動について

- 「2月に氷点下16度の中で防鹿柵の点検作業などに参加しました。芯から体が冷える初めての経験でしたが、斜里の大人と積極的に関わることができました。今では本当の家族のように接してくれる人もできました。町の皆さんとの交流は留学後も続けるつもりです。名古屋に帰ってからは知床の森づくりの活動を同世代に発信したいと思います。」(生徒A)
- 「夏休みにオホーツク管内500kmを4日間で巡る自転車旅行に挑戦しました。優しいライダーハウスのご主人と出会い、北海道の自然を堪能できたことは最高の思い出になりました。」(生徒B)

(3) 1年間を振り返って

- 「地域みらい留学の一年間を振り返ってみると、たくさんの地域の方々の話を聞いたことがよかったですと感じています。知床の自然や歴史、斜里の人たちそれぞれの人生経験談など、とにかくたくさん聞きました。高校生だから子どもだからと受け身になるのではなく、自分から積極的に動いて、一緒に考えて何かに取り組んだりすることの大切さを町の皆さんから学びました。自分自身が客観的に物事を捉えられるように少しだけ変わったと思います。」(生徒A)
- 「地域みらい留学に参加するにあたっては、斜里町に限らずどこ留学先に行っても頑張ろうという気持ちでいました。特に『誰に対しても丁寧に接してみよう』という意識を持って斜里町で過ごしてきました。大人に対しても同級生に対しても、親切を尽くそうと心に決めていました。一年間を振り返ると、自分の中で成長できたかなと感じています。留学生として、自分の生活面での管理を経験できたことは今後につながるのだと思います。そして、人を大切にすること、相手を尊重することを大切にすることを学べたと思います。」(生徒B)

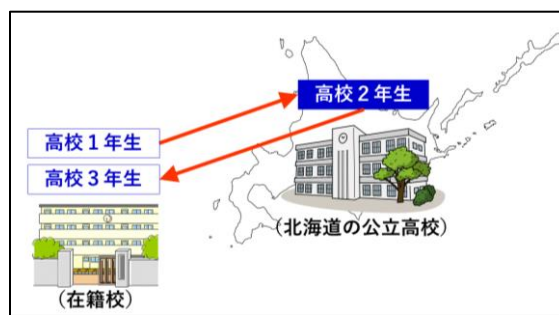


(参考)

地域留学とは、高校生が、在籍する高校とは別の高校において1年間を過ごすことをいう。

北海道教育委員会では、北海道高等学校「高校生対流促進事業」（参照：手引 pp.49-50）において、鶴川高校、斜里高校、幌加内高校を事業指定校とし、地域留学に取り組んでいる。

具体的には、道外の高校生が高校2年生の時に、道内の公立高校で1年間過ごす。

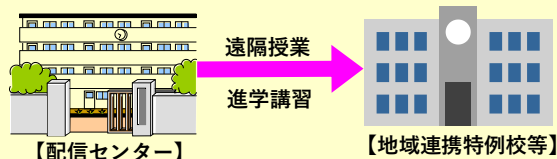


北海道教育委員会では、令和3年(2021年)4月、遠隔授業の配信機能を集中化した「北海道高等学校遠隔授業配信センター(T-base)を有朋高校内に開設した。令和4年(2022年)3月、T-baseへの理解を促進するため、教職員を対象としたリーフレット「北海道高等学校遠隔授業配信センター(愛称:T-base)を知っていますか?」を作成した。

北海道高等学校遠隔授業配信センター(愛称:T-base)を知っていますか?

北海道教育庁学校教育局高校教育課(令和4年(2022年)3月)

北海道教育委員会では、道立高等学校の小規模校化や、広域分散型という本道の地理的特性を踏まえ、令和3年(2021年)4月、北海道有朋高等学校内に「北海道高等学校遠隔授業配信センター」(愛称:T-base)を開設し、小規模校の魅力化を図っています。



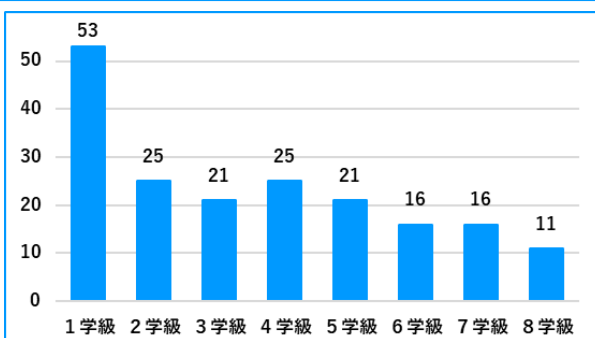
1 開設の背景

中学校卒業生数の減少等により、道立高等学校の小規模校化が進んでいます。令和3年度(2021年度)においては、第1学年が1~3学級の道立高校は99校(52.7%)と半数以上を占めており、第1学年1学級の高校は53校と最も多くなっています。

小規模校のメリットとしては、生徒一人一人に対するきめ細かな指導の充実や地域の教育資源や人材を活用した教育活動の充実がある一方、次のような課題があります。

【小規模校における課題】

- ・教員配置数の減少
- ・設置科目数の減少
- ・切磋琢磨する機会の減少
- ・部活動の停滞の懸念



【令和3年度 道立高等学校(全日制)第1学年の学級別学校数】

2 北海道高等学校遠隔授業配信センター(T-base)のコンセプト等

小規模校化の課題として、生徒の興味・関心や進路希望に対応した選択幅の広い教育課程の編成の困難さや、切磋琢磨する機会の減少などがあります。

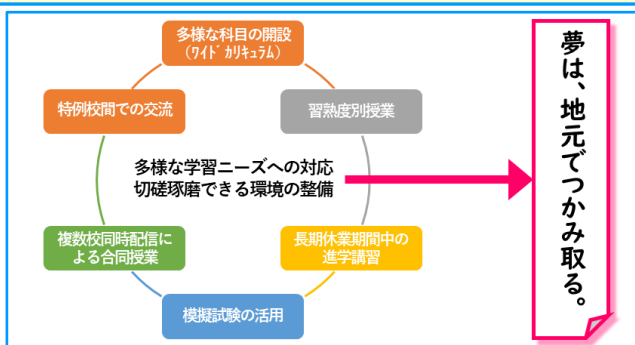
これらの課題に対応するため、令和3年(2021年)4月、北海道高等学校遠隔授業配信センターを開設しました。「夢は、地元でつかみ取る。」というキャッチフレーズのもと、遠隔授業の配信はもとより、進学講習などにも取り組むことで、小規模校の魅力化を図っています。

開設目的

どの地域においても、自らの可能性を最大限に伸ばしていくことのできる多様で質の高い高校教育を提供し、地域の小規模な高校の教育課程や教育活動の充実を図ること

実施体制(令和3年度)

- センター長(有朋高校の校長が兼務)
- センター専任の教員16名
 - ・次長(教頭)1名
 - ・教諭15名(国語、地理歴史、公民、数学、情報、理科、音楽、書道、英語)



【北海道高等学校遠隔授業配信センターのコンセプト図】

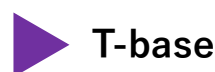
配信対象校(令和3年度)

27校(地域連携特例校25校と離島の道立高校2校)
※令和4年度は特例校が2校増加し29校に配信予定

主な取組

- ・配信センターからの遠隔授業の実施(習熟度別授業、多様な科目開設、遠隔合同授業)
- ・配信センターからの進学講習の実施
- ・遠隔システムを活用した特例校等間における交流等(特例校等間の遠隔授業、生徒会交流、教員研修)

Tele Teaching (遠隔授業を)
Tied Triangle (配信センター、受信校、道教委の三者がしっかりと結び付いて)
Tonden base (屯田から配信する拠点)

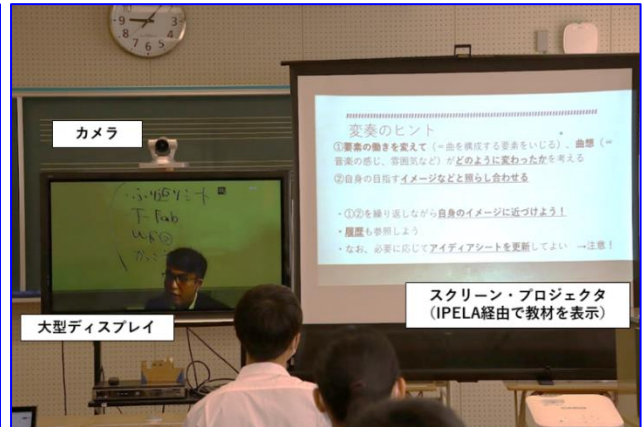


3 遠隔授業の実際

T-base では、遠隔授業の配信に当たって、ビデオ会議システム（SONY 製の IPELA）を基本としつつ、受信校側の端末の準備状況や生徒の実情、教科の特性等を踏まえ、適宜 Web 会議システム（Google Meet 等）などのクラウドサービスも活用しながら、効果的な遠隔授業の配信に取り組んでいます。



【配信側（使用機器等の紹介含む）の様子】

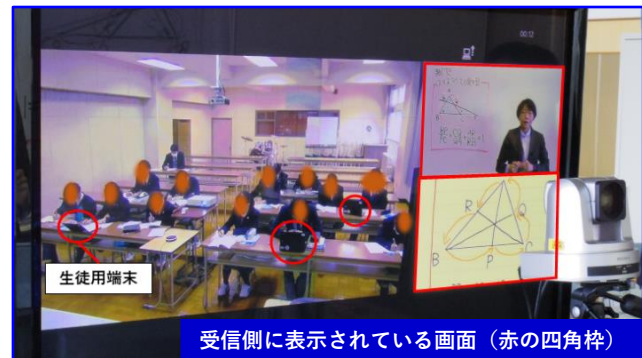


【受信側（使用機器等の紹介含む）の様子】

配信方法例① 数学 A

配信方法例①は、ビデオ会議システム（IPELA）を活用した遠隔授業です。ここに掲載している画像は、ホワイトボードを使用して、問題の解法を説明している様子です。

授業者（配信者）はワイヤレスマイクやイヤホンを使用して音声面での利便性を確保するとともに、ビデオ会議システム（IPELA）のほか、Google Classroom を併用して、課題を提示したり、課題提出を行わせたりという工夫も行っています。



【配信側（使用機器等の紹介含む）の様子】

配信方法例② 英語会話

配信方法例②は、配信方法例①で使用しているビデオ会議システム（IPELA）ではなく、Web 会議システム（Google Meet）を活用した遠隔授業です。

映像スイッチャーを使用して、生徒に提示するコンテンツを適宜切り替えるなどの工夫を行っています。



【配信側（使用機器等の紹介含む）の様子】

配信方法例③ 書道 I

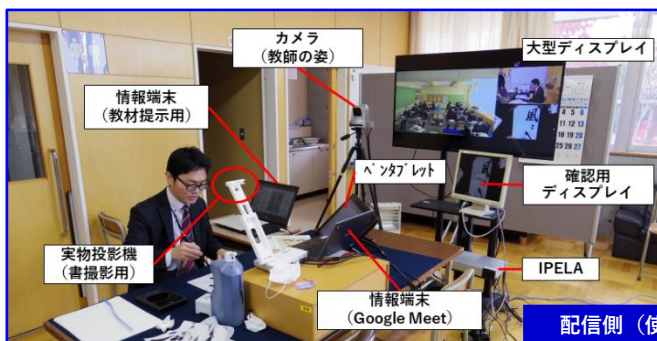
配信方法例③は、ビデオ会議システム (IPELA) と Web 会議システム (Google Meet) を併用した遠隔授業です。

各生徒の手元には情報端末があり、Google Meet でつながっています。Google スライドの内容が共有されるとともに、生徒の手元を確認できるようになっています。

また、書く姿勢が大切なことから、実物投影機で上から見た様子を配信するとともに、横から見た教員の様子を受信校に配信しています。



受信側に表示されている画面 (赤の四角枠)



配信側 (使用機器等の紹介含む) の様子



4 紙面座談会「T-base ってどんなところ？」

T-base で実際に遠隔授業を担当している先生に、T-base のことについて聞いてみました。

井口先生

国語担当。T-base は 5 校目の勤務校。ICT 関係は苦手だったものの、T-base での勤務を通じて ICT スキルが向上中。

T-base に勤務してイメージの変化はありましたか。

井口先生

配信など技術的なことは専門の方が担当すると思っていましたが、機器の接続や調整など自分でやらなければならないことがたくさんありました。もちろん T-base の先生方が積極的にサポートしてくれます。

杉浦先生

理科担当。T-base は 2 校目の勤務校。新しいことに挑戦することが好き。ICT を活用した効果的な授業づくりを日々模索中。

杉浦先生

勤務する前の「遠隔授業」は、予備校の衛星授業や YouTube などのオンデマンド型のイメージがありましたが、遠隔会議システムを使った双方向型であったり、生徒の 1 人 1 台端末の状況を踏まえて Google Meet を使った授業をしたりと、想像と大きく違いました。

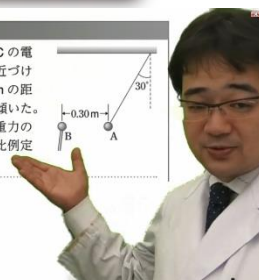
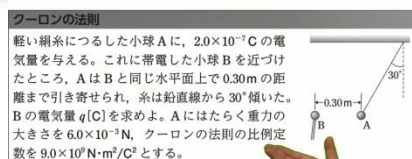
T-base での勤務を希望した理由を教えてください。

井口先生

地方の高校では、夢を叶えられないといって地元を離れる中学生が多くいることを過去の勤務経験から知っており、課題意識を持ち続けていました。遠隔授業を配信することで地方の子たちが学びたいことを学べ、進路を実現するチャンスを与えられるという事業を知り、役に立ちたいと思い希望しました。

杉浦先生

理由は 2 つです。1 つは新しい組織の立ち上げに関わってみたいということ。全国的にも珍しい事業なので、どんな仕事ができるのかワクワク感を持って希望しました。もう 1 つは自分の授業について見つめ直せるだろうということ。遠隔授業に向けて、今までの授業を一から作り直す必要がある。そうした環境に身を置いてみたいという気持ちがありました。



T-baseで勤務する上でのやりがいは何ですか。

井口先生

受信校の先生方と遠隔システムを活用して情報共有している際、生徒の進路について真剣に話をしていると、1人の生徒の成長をたくさんの大人がサポートし見守っている、その一員に自分がいることにやりがいや楽しさを感じています。

杉浦先生

教材研究を充実させることです。対面授業と同じようにできることと、遠隔ならではのことがありますので、授業や教材の作り方、評価の在り方などを工夫・研究しています。また、遠隔でできる生徒実験や、生徒の端末を使ってできることを試行錯誤する中で、自分の授業の幅が広がったと感じています。

遠隔授業を担当する難しさや楽しさは何ですか。

井口先生

遠隔授業では、教室で何気なくやっている見取りができません。一方、その難点を解決する改善策も次々と生まれており、生徒と共に技術の進歩を享受しています。その他、基本的に授業時間にしか生徒と顔を合わせませんので、放課後の補習などができません。生徒に自主的に頑張ってもらうような授業の在り方を模索中です。

杉浦先生

難しさは、受信校との情報共有と生徒理解です。例えば、時間割変更や生徒の状況把握です。職員室での情報共有ができない分、受信校の先生と連絡を取り合って確認をしながら進めています。生徒とも基本的に授業でしかコミュニケーションの時間がないため、理解度を把握したり様子を観察したりする手段に限られます。このため、振り返りシートの自由記述欄や提出課題に返信コメントを書いて理解度や質問対応などを行っています。また、進学希望者に向けて Google Classroom を使って個別の課題を出して添削するなど、遠隔ならではの工夫が必要な場面があります。

楽しさは、新しい形の授業を生徒と一緒に模索できることです。今年度から1人1台端末の状況を踏まえ、Google Meetでの授業に取り組んでいます。生徒によって個人差がありますが、お互いに教え合いながら端末を上手に使っています。アプリを使い、今までできなかった「その場で実験データを共有する」や「生徒の考えをアンケート集計して提示する」、「ポスター代わりにJamboardを使って発表する」など少しずつ授業の形が広がっています。

T-baseでの勤務を通じてスキルアップしたり、考え方が変わったりしたことはありますか。

井口先生

私はパソコン操作が苦手でしたが、T-baseの先生方が教えてくれます。使いこなすレベルには到達できるかは分かりませんが、「できない」「やらない」と思い込むのは早計だなと思います。

杉浦先生

授業で使う機材やアプリの知識が増えました。このおかげで授業を作るときの自由度が増したと思っています。

また、校内外で研修の講師役や発表をさせていただく機会があり、自分の理解の見直しや伝え方など勉強になっています。

T-baseでの勤務を踏まえ、今後はどのような教職キャリアを積んでいきたいですか。

井口先生

次の勤務校では、T-baseで身に付けたICTスキルを生かしつつ、進路指導についてさらに学んでいきたいです。さらにもう1校勤務するなら受信校に勤務し、T-baseの取組を受信校側から経験するのもいいかなと思っています。

杉浦先生

今、いろいろ新しいことに挑戦させていただいているので、ここで実践したことを、異動後の学校でも生かしていこうと考えています。

その他、全道の先生方に対して、T-baseについてアピールしたいことがあればお願いします。

井口先生

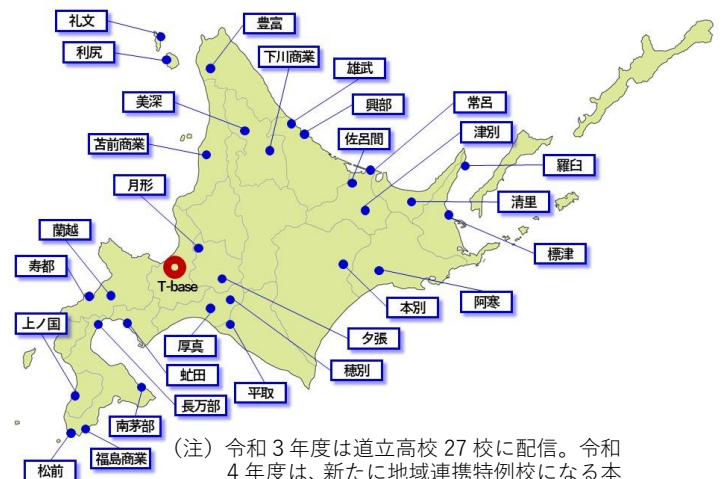
生徒には授業でしか会えないからこそ、授業は本物でなければならないですし、授業を通して生徒の成長にしっかり関わらねばなりません。機器の扱いは自信がないという人も、「こういうことがしたい」というビジョンがある人は大丈夫です。

杉浦先生

好奇心とチャレンジ精神を持っていただければよいと思います。新しい組織ですのでもまだまだ課題はありますが、その分、いろいろなことに挑戦できます。

先生方、どうもありがとうございました。

令和4年度（2022年度）の配信対象校



(参考)「地域創生に向けた高校魅力化の手引」における「参考資料」掲載一覧

北海道教育委員会が作成した「地域創生に向けた高校魅力化の手引」には、地域創生の背景や、魅力化に向けた取組を検討する際に参考となる資料を、「参考資料」として次のとおり掲載している。なお、「p.○」は、手引の該当ページを示す。

1 まち・ひと・しごと創生基本方針等

まち・ひと・しごと創生基本方針 2020	p.26
第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」	p.26

2 第2期北海道創生総合戦略等

第2期北海道創生総合戦略	p.28
北海道総合教育大綱	p.28
北海道教育推進計画	p.28

3 社会や地域に関する意識の状況（全国）

社会意識に関する世論調査	p.29
--------------	------

4 生涯学習に関する住民の意識調査（北海道）

生涯学習に関する住民の意識調査（北海道）	p.30
----------------------	------

5 コミュニティ・スクールをはじめとした地域とともにある学校づくりの魅力

子供にとっての魅力	p.31
教職員にとっての魅力	p.31
保護者にとっての魅力	p.31
地域住民にとっての魅力	p.31

6 課題把握のためのアンケート調査の例

中学生を対象とした質問例	p.32
小学生を対象とした質問例	p.32
保護者を対象とした質問例	p.33

7 小規模校の特色化・魅力化に向けた課題

小規模校の特色化・魅力化に向けた課題	p.34
--------------------	------

8 高校の魅力化を図るための方策例

高校の魅力化を図るための方策例	p.35
-----------------	------

9 高校の魅力化を目的としたワークショップの実践例

テーマ「地域みんなで〇〇高校の未来を考える」	p.36
------------------------	------

10 コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）

コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）とは？	p.37
学校運営協議会の主な3つの役割	p.37
道立高等学校における学校運営協議会の設置に係る基本方針等	p.37
道立高等学校におけるコミュニティ・スクールの導入状況（R2.11.1現在）	p.38
具体的な取組①	別海高校 p.38
具体的な取組②	興部高校 p.38
具体的な取組③	追分高校 p.39
具体的な取組④	美瑛高校 p.39

11 地域学校協働活動

地域学校協働活動とは？	p.40
地域学校協働活動の具体的な取組	p.40

12 地域コーディネーター

必要なコーディネート機能とそれを担う人材	p.41
地域で活躍するコーディネーター	p.42
地域コーディネーター	上士幌高校 p.43
地域・教育コーディネーター	白糠高校 p.43

13 小中高一貫ふるさとキャリア教育推進事業

概要図	p.44
「地域未来づくり会議」の例	p.44
スタートアップ・ガイドブック	p.45

14 高等学校 OPEN プロジェクト

概要図	p.46
指定校等一覧	p.46
地域みらい連携会議	帯広工業高校 p.46
取組①（研究主題・目標等）	標茶高校 p.47
取組②（研究主題・目標等）	白老東高校 p.47
取組③（研究主題・目標等）	帯広工業高校 p.47
取組④（テーマ・取組内容等）	静内農業高校 p.48

15 北海道高等学校「高校生対流促進事業」

事業趣旨	p.49
事業指定校①	鷗川高校 p.49
事業指定校②	斜里高校 p.50
事業指定校③	幌加内高校 p.50

16 学校を核とした地域づくり

鹿追創生アカデミア構想	鹿追高校 p.51
-------------	-----------

17 生徒の興味・関心や多様な進路に応じた学校設定科目の開設

学校設定科目「観光地理」	岩内高校 p.52
学校設定科目「高山植物」	礼文高校 p.52
学校設定科目「江差追分」	江差高校 p.52
学校設定科目「生活福祉援助技術」	追分高校 p.53
学校設定科目「アイヌ学」	釧路明輝高校 p.53
学校設定科目「看護総合」	砂川高校 p.53
学校設定科目「富良野と演劇」	富良野高校 p.53

18 地域における学びのスタンダードの作成

町内における学習規律の統一化	知内町 p.54
12年間をつなぐカリキュラムの作成	天塩町 p.54

19 小・中・高等学校の教職員や児童生徒が連携した教育活動

礼文型教育連携	礼文町	p.55
中学校と高校が連携した乗り入れ授業	蘭越町	p.56
中学校と高等学校の連携事例集		p.56
中学校と高等学校が連携したキャリア教育の取組	湧別町	p.57

20 アカデミック・インターンシップ

高等学校学習指導要領解説総則編		p.58
具体的な取組①	札幌西高校	p.58
具体的な取組②	大麻高校	p.58
具体的な取組③	旭川永嶺高校	p.58

21 大学と連携した研究活動

大学との連携による「岩東メソッド」の開発	岩見沢東高校	p.59
----------------------	--------	------

22 北海道の学校開放の状況

北海道の学校開放の状況		p.60
学校開放の取組（ダイバソフィ）	美深高校	p.60

23 地域と連携した部活動

地域との連携等		p.61
市町村からの支援による部活動運営	むかわ町	p.61
中学校・高等学校の枠を越えたスポーツ活動	下川町	p.61
地域の活性化を目標とした部活動	札幌東商業高校	p.61

24 複数校合同部活動

部活動の設置、統廃合、合同チーム等の編成		p.62
複数校合同チームによる大会への参加についての考え方		p.62
複数合同運動部活動の実施上のポイント		p.62

25 持続可能な開発目標（SDGs）

持続可能な開発目標（SDGs）の5つの特徴		p.63
持続可能な開発目標（SDGs）の詳細		p.63

26 地域ビジネス創出事業（SBP）

SBPとは？		p.64
SBPの5要件		p.64
SBPの成果・効果		p.64
SBPの代表的な事例	留萌高校	p.64

27 地域を学びの場とした教育活動

地域を学びの場とした教育活動	浦河高校	p.65
----------------	------	------

28 市町村と連携した高校生対象の地域づくりの取組

高校生プロジェクト	鷹栖町	p.66
まちづくりワークショップ	岩内町	p.67
高校生議会の取組	大樹町	p.68
市議会による高校生との意見交換会	稚内市	p.69
未来ビジョンミーティング	苫前町	p.69
まちづくり対話集会	旭川市	p.70

29 地域課題をテーマとした探究的な学び

特別活動（宿泊研修）	札幌東高校	p.71
総合的な探究の時間①	本別高校	p.71
総合的な探究の時間②	函館西高校	p.72
総合的な探究の時間③	長万部高校	p.73
総合的な探究の時間④	湧別高校	p.73
総合的な探究の時間⑤	枝幸高校	p.74
総合的な探究の時間⑥	奥尻高校	p.74

30 学校設定科目「地域学」

学校設定科目「むかわ学」	鷗川高校	p.75
学校設定科目「つべつ学」	津別高校	p.76
学校設定科目「松前学Ⅰ」	松前高校	p.77
学校設定科目「稚内学」	稚内高校	p.77
学校設定科目「上士幌学」	上士幌高校	p.77

31 12年間を見通したふるさと教育やキャリア教育

小・中・高等学校キャリア教育全体計画	栗山町	p.78
小中高キャリア教育合同発表会	寿都町	p.79

32 キャリア・パスポート

目的		p.80
定義		p.80
留意事項		p.80
実践例	栗山高校	p.80

33 デュアルシステム

ねらい		p.81
学校設定科目による実践①	旭川工業高校	p.81
学校設定科目による実践②	静内農業高校	p.81

34 地域の教育資源や地域人材等を活用した教育活動や奉仕活動等

自然環境を学ぶ「自然環境科目群」の開設	羅臼高校	p.82
十勝ジオパーク学習の取組	上富良野高校	p.82
地域の専門家を活用した防災教育	静内高校	p.83
避難所運営ゲーム製作の取組	標津高校	p.84
当別青春フットパスの取組	当別高校	p.84
遊覧船観光ガイドの取組	虻田高校	p.85
中学生と高校生による地域の魅力発信情報誌「ひやま Walker プロジェクト」の取組	檜山教育局	p.86
地元経済界との連携や異世代交流の取組	富良野緑峰高校	p.87
農業高校の強みを生かした地域連携	新十津川農業高校	p.88
市と連携した地域学習の取組	芦別高校	p.88
インターンシップ・次世代育成交流会	北広島西高校	p.89
小学校での学習ボランティア	砂川高校	p.90

35 遠隔授業の3類型

遠隔授業の3類型		p.91
----------	--	------

※手引は北海道教育委員会のホームページに掲載しています。右のQRコードでアクセスしてください。

